

クロスマイナス 『虚言使いと戯言遣い』

謂篠式椎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如として京都の城咲、はるか上空にまでとある能力で^{スキル}転移させられた球磨川禊は「ぼく」と偶然にも出会ってしまう。『混沌よりも這い寄る過負荷』と人類最弱の戯言遣いの邂逅は、どういう物語を産んでしまうのか。

・オリキャラ絡み

・球磨川禊が箱庭学園に戻るまでのお話

・基本は戯言シリーズなため、原作にめだかボックスとされていますが登場人物は大抵戯言シリーズ絡み

・時期としてはめだかボックスは宗像形の初の人殺しと『劣化大嘘憑き』^{マイナスオールフィクション}が生成された翌日、戯言シリーズの方は赤き征裁^ハv s^ロ橙^{ウイ}なる種^ンが終わってから二か月ほど後くらい。

・数々のメタ、他西尾作品の示唆アリ

と思いきや、ちよつとした気まぐれで続いてました。

目次

上 水俣村	1
上の下 水俣町	12
下 水俣市	34
下の下 水俣病	54
ブリスフルーザー 虚ろな大嘘への襖	
過負荷	69
欠陥製品	78
人間失格	89
結晶皇帝	99
赤き征裁	111
嘔吐伯樂	121
病的	134

上 水俣村

『……………』

箱庭学園、三年マイナス十三組。マイナスという名前から分かるように忌み嫌われていそうなこんな教室でぼつんと一人佇んでいるのは勿論、球磨川禊である。意外と皆、登下校が早くて取り残されてしまった彼。家ですることがそんなに多いのだろうか、などと何気なしに疑問を抱いているところだ。

そんな彼がすぐさま疑問を捨てたのは言うまでもない、挙句の果てには今度誘われたら付いて行ってみようなんて考えている。何だかんだ慕われているところもあるので、拒否自体はされないだろうが不思議だと言わんばかりの表情は炸裂されてしまいそうだ。

『……………そろそろかなあ』

黒板に近い、いわゆる前の扉がガラリと開く。現れるは紫がかったさらりとしていてキューティクルの光る長い黒髪を持つ人間。ただし、彼女は球磨川禊の予想している人間ではないし、性別から違う。「あれ？ 球磨川くん、まだいたのかい、そろそろ完全下校時間を過ぎるよ？」

『大当たり』

教室に入ってきたのはマイナス十三組「妹学」担当、黒神真黒。黒神めだかの兄である。彼も年齢は球磨川禊とそう変わらないはずなのだが、学生ではなく、教師という体裁だ。

『うん、そうだね真黒ちゃん。喜界島さんに呼ばれてるから生徒会室に行くとするよ』

「下校するわけじゃないんだね……………」

流石は球磨川禊といったところか、言われたことをそのままする事はないらしい。しかし呼ばれている、のため元より帰るつもりが無かったのだからこの場合は黒神真黒の予想が最初から間違っていたというのが正解となる。

『せんせーさよーならー』

「……………さようなら」

尚、その彼は過^{マイナス}負荷であるこの男が今また気を変えて移動すらしないのではと考えたのだが、そんなこともなくその席から立ち上がり、黒板が無い方の、いわゆる後ろの扉を開けて姿を消す。実際『^{アナリシス}解析』まで使って考えていたはずが、やはりそれでも行動が読めることはないようだ。

『いやしっかし、手刀で殺されるのは初体験だったなあ』『まあ確か傷物語じゃ手刀で殺し合うんだし、はまり役っちゃはまり役だよねえ』さらっとメタ発言である。第何の壁であろうと関係なく発言してしまうその行動は、正直二次創作者にとっては予想しきれないことなので止めて欲しい。

「……僕ですら自覚してはいけない事実を君があっさり言わないでくれるかな」

『うわ!?!』『いたの!?!』

「いや。単に真黒さんにまた特訓してもらおうと思ってね、すれ違っただけだよ」

いたわけじゃない。それだけ言うと、傷物語にて手刀を使って殺し合いをする人間と同じ声優を担当する宗像形は去っていく。再び、球磨川禊は廊下にぽつんと一人。

『あー驚いた……』『喜界島さんを庇ってとはいえ、彼には昨日殺されたのになあ』『彼は何であんなに普通なんだろう?..』

一般的に考えると確かに宗像形も異常人の範疇に入ることには確かだが、その異常からも異常であると刻印を押される過負荷が言えることではない。そして球磨川禊の場合は死んでいることが「なかったこと」になっているため、気に病む方が間違っていたりする。

『……あれ?』『いつか、「僕はロリに弱いのかな?」とか言っちゃった気がするけど』『喜界島さんって、ロリじゃないよね……』『いや、それを言ったら安心院さん、めだかちゃんもロリじやなめだかちゃんはロリ時代に会ったんだった』

こんな風に独り言ですら話が一八〇度ぐるりと盛大に転換するような人間を殺した事実は、「なかったこと」にしてもらって正解なのかもしれない。何よりそのような人間を殺したのが初めての殺人であ

るという現実は特に、受け入れたくない面もあるだろう。

『じゃあオリ順番ではめだかちゃん、人吉先生、不知火ちゃん、太刀洗さん、財部ちゃんか』『……なんかそろそろ巨乳ロリとか来そうだなね』

今までの全員が貧乳ロリであったにも関わらずそのようなことをぼやく球磨川禊。裸エプロンの方が見たいんだけどなあ、でも最近は裸ジーンズも熱いや、なんてことも続けて呟く。何にせよ裸に何か一着、というフェティシズムは外せないそうさ。

「あの……球磨川先輩、ですよね」
『!?』

球磨川禊はその言葉に、完全に不意打ちを喰らった。……完全に。彼が。不意打ちを。負完全である彼に対して完全を冠するなど矛盾も甚だしいが、それに加え今の彼は気配がない。そのため誰かに何のきっかけも無しに訊かれるなど、それも初対面の人間に不意打ちを喰らうわけなど、ない。

さすれば、新しい敵。そう彼は何と無しに警戒態勢を敷こうかとも考えるが、本当に敵だとすれば茶化すのが彼。いつもの通りに、優しく声をかけて名前を聞いて、先輩として威厳を示せるように甘ったるく優しく優しく優しく優しく優しくプラスに振る舞おう。

なんて当然嘘で、軽く人体の骨と同じ数ほどを散々に螺子込んだのに。

「わ、私は水俣真美みなまたまなみといます」

そんな螺子は、どこにも螺子込まれていなかった。彼は確かに骨一本に対し螺子一本使ったはずであり、声をかけてきた人間は確実に人の形を為していなかった。と語っていても今の彼にはそれ以外の驚きが頭を包んでいる。

水俣真美と名乗ったその少女は、彼が直前に予想した、巨乳ロリそのものだった。不知火半袖ほどの体軀にも関わらず現在の黒神めだかに負けず劣らぬ豊満さを誇っていきそうなそれが視界に入った彼の脳内では「巨乳ロリ、キター!?!」と延々と右から左にコメントがループしている。

『……………』

「実は今日付けで一年マイナス十三組に転入でして……他の人達に聞いたら、球磨川先輩に案内してもらえばいいと言われまして」

『え、あ、うん』『……僕は球磨川禊じゃなくて大分学おおいたまなぶだけど、大丈夫？』

その胸元に視線を思いっきり引き寄せられつつ、その体躯の小ささと乳房の大きさのアンバランス具合に戸惑いつつも、いつも通りの球磨川節を披露したつもりである。文字数が同じなあたり、あまりインパクトは無さそうだが。

しかし、球磨川禊にとつてはそうなってしまうくらいに彼女の姿がかなりインパクトがある。巨乳ロリというのもだが、個人的にはその誰かを彷彿とさせる床にでも付きそうなまとまった長髪と、リボンのような材質をした橙色のカチューシャ。髪型という外見情報も、印象的だったのだ。

「大分なんて名字の人はマイナス十三組にいませんよね!? しかも過負荷でも吐きそうな程に気持ち悪いけど可愛い先輩なんて、あなた以外にいそうにありませんが!!」

『僕そんな風に悪く言われてるようで可愛いとか言われてるんだ!』
喜ぶことではないが。そもそも可愛いというのは男の子にとつて誉め言葉ではない可能性の方が高く、何より過負荷なのだから誉められたからと言って喜んでしまつては駄目なのではなからうか。何にせよ、この少女に対しては球磨川節が不発が続いてしまふばかりのようだ。

『ま、もう僕が球磨川禊だつてことは認めるけど、何で君はずっと左上を見ているんだい?』

「……………ここまででは前生徒会長に案内してもらつていて……大きいなあ、と」

……前生徒会長というと。

『う』『わーお』『日之影くん、いたんだー』

「……驚きが結構雑だな」

『知られざる英雄』は無いから見えていなかったはずは無いんだが

な、と、小声で呟かれる。全く以てその通りであり、加えて日之影空洞は目の前の水俣真美と名乗った小柄な少女が隣にいとその大きさが際立つ程には図体が大きい。

球磨川禊自身もお世辞には身長が高いと言えるものではなく、体付きも華奢と言えてしまうくらいで、彼を目の前にするとこれまた大きさの違いがはつきりする。

『やだな日之影くん、気付いてたに決まってるじゃないか!』『だって僕だよ? 天上天下球磨川禊だよ? 君がこの校舎に入った時から気づいていたさ!』

「……ああ、そうかよ。じゃあまあ、その転校生の案内は任せるとよ。じゃあな」

『ばいばい』

「ありがとうございます」

『で? 君は何なんだい?』

そう言い、彼らに手を振り背を向けて歩く日之影空洞が去った後。球磨川禊は、その彼の背中を見送る態勢から視線も何も変えず一気に核心を突く。

「……は? 何の話ですか?」

『日之影くんはね、下校が早い方なんだ。けど今は完全下校時間を過ぎている。仮にも案内を本当に頼んでいたとして』『日之影くんがここまで時間をかけるわけがないし』『何故、生徒会長であるめだかちゃんじゃなくて、前生徒会長である日之影くんなんだい?』『それに、君は最初、気配のない僕に気付いた』『大量の螺子も消されたしねえ』『そこまでの過負荷だと、下手したら僕より大規模だ。さあ、それを予想しておきながらも一度君に訊くよ』『きみは、何なんだい?』

「あーだり」

しかし球磨川禊が聞いた言葉は、それのみだった。それどころか、今現在においてその廊下に彼の姿は無い。水俣真美、その少女一人だけがそこに立っている、が先程の大人しそうな態度とは打って変わって、乱雑に右手で頭を掻いている。

「ったくよー、何だよこいつ。記憶とか全部一時的に『騙した』はずな

んだがな。『大嘘憑オールドフィクションき』を安心院とやらに返したつっ—のが嘘だったのか？」

口が、悪い。これが過負荷、水俣真美、なのだろうか。騙したとは言っているが、彼女自身がその過負荷を説明したわけではないため、どのような存在なのかは断言できない。

「まあとりあえず今この場からは『騙した』し大丈夫だろう。下手したら戻ってこれねえけど、それこそそれで重畳だ」

一方、球磨川禊は落ちた。どうやら異世界だか何だかに飛ばされたようで、その地面に落ちたらしい。それもマーフィーの法則だとも言いたげに、当たり前のように頭から落ちた。しかしそんなことも関係なくさらりとまたしても『劣化大嘘憑マイナスオールドフィクションき』を自動発動させ、蘇生したまま球磨川禊は呑気に楽しげな表情をする。

『うお!? 異世界だ?!』『まるでジャンプみたいじゃないか!』『これはテンション上がるなあ!』

そう喜ぶ彼の周りは森であり、残念ながら異世界ではなく同世界(なのだろうか)、京都の一部地域である。しかし彼にとってはそんなことは分かるべくもなく、まさかの異世界転生ではと意気揚々としていて迷いフラグがピンピンに立っていることにも気付いていない。しかも、

『よし、とりあえず右に行こうかな』

とか言いつつも左に曲がった球磨川禊だった。

『うんまあ、迷うよね』

一時間も経たないまま、当然の帰結に対して文句は無い当人。薄々と異世界ではないことは気付いているものの、だからといって迷わない道理になるわけでもない。次いで、彼は中途から何者かから尾行されておりそのあたりも気になっているところだ。

水俣真美のように初対面の人間にも関わらず、球磨川禊の「なかったこと」にされている気配を感じ取るその感覚の鋭敏さは一体何なのだろうか、それとも、球磨川禊のそれは「なかったこと」になっても滲み出てしまうほどのものなのかもしれない。

『螺子込んだら出てきたりしないかなー』『あ、そうだ、アレをしよう』
『迷った時の定番、棒倒し！ を螺子でしよう』『よっ——』
「……痛」

誰かの声。球磨川禊はそんな平穏なことをするわけでもなく、実際は地面に刺して、そのまま伸ばして曲げて伸ばして、相手の目下から突き出したのだ。相手の体勢までは把握していないため、下手をすれば心臓を貫いてもおおかしくはないが、声を聞くにそこまでの重傷ではないらしい。

しかし、そこから動いて逃げる、という意志を持った声でもないため、球磨川禊はさくさくと声の方向へと歩いていく。不思議と、^{マイナス}過負荷の彼にしては珍しくその先へと足を踏み出すのが若干だけ億劫に感じつつ。

『さてと、誰かなあ』

ただ、声を聞くにそこまでの重傷では、と先述したが当の球磨川禊は腕一本程度であれば引き千切るくらいの速度と威力で螺子込んだつもりだった。彼からするとその対象が男らしいという事実の方が見に行きたくない理由になっていそうだが。

だがだからこそ、見に行きたくない気配が出ていたから、球磨川禊は確認する。そこにいたのは、

死んでから良い腐敗具合の目をした男だった。

『……誰だい』

「誰でもないし、誰でもある。好きに呼んでくれていいよ」

……それは、名前が無いという事か。名前が忌々しいという事か。名前がありすぎるといふ事か。球磨川禊は、判断できない。

『じゃあまあ、なんとなく「いーちゃん」でいいや』

「……………」

目の前の男は無言を貫く。常時へらへらとした笑顔の球磨川禊とは正反対に、死んだ目と腐った仏頂面を發揮し続けるいーちゃん。球磨川禊は、そんな彼に対して思うところがあるようだが、その思うところはすぐさま思考放棄した。

『ねえねえいーちゃん、何で君は途中から僕を尾けてたの?』

そして、そんなどうでもいいことよりも益になりそうな問題を問う。

「……ここは玖渚っていう奴の私有地なんだ。知らない奴が入れる訳が無いし、仮に入ったとしても確実に迷う。尾けてたのは単に、君が空から降ってきたからだよ。不思議で不思議でたまらないし」

『そういうことね』『酷いなあ、ここも日本なんですよ？ 仲良くしてくれてもいいじゃない』

「いきなり空から降ってきて大きい螺子を持って現れた奴と仲良くしたくないよ。それに尾けてたつてだけで半身の自由を奪われたしね」

言われて見れば、いーちゃんにはあの螺子に左半身を貫かれていた。それもかなり思いつきり、足は皮一枚といったところで、腕なんて事もあるうか前腕も上腕も貫かれてる上、その螺子の先は頬にも螺子込まれている。そのような状態で普通に喋っているのだ、この男は。

『マイナスオールフィクション』
『劣化大嘘憑き』はまだ使っていないために、出血量も凄まじい。

これで痛、だけで済むとは、もしかすれば球磨川禊以上の、何かかもしれない。そんな考えがうつすらと頭に過っている自分の脳味噌に對してほんのちよつとだけ驚きつつ、球磨川禊はそのいーちゃんに声をかける。

『……君には命の予備が無いんだろう？ だったらもつと叫んで助けを呼べばいいのに』

「生憎、他人の前だと叫びたくなくなつちやう病氣なんだ」

『マイナスオールフィクション』
『劣化大嘘憑き』。君の半身の傷をなかつたことにした』

そのよく分からない病氣については一切の言及をせず、間髪入れず球磨川禊は自分でつけた彼の傷を癒す。いーちゃんは特に驚かず、ああ、戻ってるな。とでも言いたげな目で戻った半身を眺めて、立ち上がり、一言。

「……戯言だな」

『マイナス』
『過負荷だよ』

決まった文句かのように、無意識にさらりと言葉を返す。

いーちゃんにとって零崎人識が鏡ならば。零崎人識にとって石風

砥石が写真ならば。いーちゃんにとって球磨川禊は絵だった。似てはいる——が、何かが違う。決定的に違う。球磨川禊の場合、いーちゃんのように中身が空っぽではなく、嘘や欺瞞で溢れている。いーちゃんの外つ面だけを写しただけのように。それも、歪に、少しばかり助長と空想とを含めて、乱雑に、写真なんて言えないくらいに分かり切った風な。だからこそ、絵である。

「……ついてきなよ。とりあえず玖渚の家まで案内するからさ」

彼も無意識下においてそれが理解できてしまったのか、球磨川禊を案内することにしたらしい。彼の絵であるということは、どのようなベクトルにかはよるがその向いているベクトルに置いては限りない危険さを保有するということにもなるのだが、それには気付いていないのかもしれない。

もしくは、気付いていて尚、それならば防ぐ手立てを持っていないことを知っているが故にそのような諦めたかのような行動に打って出たのかもしれない。ご機嫌伺い、ご機嫌取り、だ。

『それはありがたいや。お言葉に甘えて、ついていくとしようかな。』
しばらくして、玖渚友の住む城咲のマンションに着き、階層を登り、いつもの部屋に入る。
と。

久し振りに、その部屋は赤色に染まっていた。

「……哀川さん」

「あー？ お前まだあたしのこと名字呼びすんのかよ。いい加減蹴るぞ」

「その姿で元気ですね……」

今の哀川潤は、まだ全身包帯という状態だ。そのため、赤色に染まっている部屋も元々の白さも相俟ってその包帯の白さが加えられ、どちらかと言うと良い感じに混ざり合い、紅白のような印象を受ける。しかし蹴られかねない状況であるいーちゃんは右下るれろを思い出していたり。

「病院、抜け出して来たんですか」

「違えよ、昨日退院したんだ。いや、それはどうでもいい、あたしは十

月の事についていーたんに文句しかねえんだよ。それを言いにはしかこねーよ」

「せめてそれ以外の件で来てください」

「お前これどうしてくれんだよ、二ヶ月経ってもまだ一〇〇パーセントに回復しないんだぞー！」

前よりも回復速度が落ちている。

「……あ？ 後ろの奴誰だ？」

そんな文句も球磨川禊顔負けの速度で放棄して、気になったことをすぐに訊く。球磨川禊も哀川潤に対しては誰だろうという疑問しか抱いていない。若干ばかり、黒神めだかに似た、理不尽な強さを感じ取ってこそはいるものの。

「さつき空から降ってきた奴です」

『はじめまし——』

『!!』

気が付いたら球磨川禊は吹っ飛ばされていた。

気が付いたら球磨川禊はブツ飛ばされていた。

「!? ちょ——何やってんですか!？」

球磨川禊が間髪も感じずに撃ち込まれたその攻撃方法は彼も知っている技で、その威力はその身を以て知っていたりする。時計塔の上で、問答無用に、ぶちかまされた、あの。黒神ファントム。ただし、座りながらであり、攻撃した本人が満身創痍だったのにも関わらず、哀川潤に増えた傷は無い。

「あん？ いや、知り合いが言ってた奴に似ててな。お前、球磨川禊だろ？」

それどころか軽々と片足で跳ねて、元の椅子に座り直す始末。しかしその問いに帰ってくるのは無言どころか無音だけで、球磨川禊はそもそも心臓からも音が消えていた。

「……？」

「あ、やべ、手加減ナシで当たったから死んでるかも」

「あんたそれ「かも」で済まされねーよ!？」

流星は人類最強。その名を知らなければ本名も正確には知らない

球磨川禊だが、今、目視した。把握した。確信した。理解した。哀川潤は、黒神めだかよりも強い存在だと。

「まあ、知り合いによれば生き返るらしいし？ 待ってこようぜ」

「あんた、人一人殺したのに呑気だなあ！」

上の下 水俣町

やあ球磨川くん。潤ちゃんに完全完成版黒神ファントムと云っても差し支えのない攻撃を喰らわされたようだね。全く、君はこの時期に何やってるんだい？今はめだかちゃんみなまたまなみと善吉くんのバトルの最中なんだよ？いや、確かにあの『歩く病気』をこの箱庭学園に侵入させてしまった僕にも非があるんだけどね。

水俣真美。

この子の説明はまたいつかにしてやるよ。そうがっかりするなつて。ん？巨乳ロリ？めだかちゃんをも凌ぐかもしれない巨乳なのに不知火ちゃんよりロリだって？……水俣真美の外見の話はどうでもいいよ。

やめろ、続けるな、語るな。それ以上君のキャラを壊すんじゃない。いい加減にしろ、殴るぜ。何だよ、そこまで君は水俣真美の話を聞きたいのかよ。

仕方ないなあ。君が被害にあった水俣真美のスキルの一つだけだからな？

ああ、水俣真美は四つ、持ってる。

アブノーマル異常一つに、マイナス過負荷が二つ。あと一つはスタイル言葉というんだが……君はまだ知らないだろうから説明はしない。さて、話を戻すとして。

君が被害を受けたスキルは、マイナス過負荷だ。『ホールブラックジョーク合縁忌円』という。このスキルは……そうだなあ、球磨川くん、君のスキルは『なかつたこと』にするスキルと、『球磨川襖』にするスキル、だろう？水俣真美の『ホールブラックジョーク合縁忌円』は、『騙す』スキルだ。

まず最初。日之影空洞くんの記憶を『騙した』んだ。だから彼は彼女を案内していた数時間、生徒会長だと『騙さ』れ、下校時間がまだそこまで過ぎていないと『騙さ』れていた。勿論、その部分だけだから不知火ちゃんに『知られざる英雄』を喰われたのは覚えていたけどね。それに、あくまで一時的に『騙した』だけだから今は彼は水俣真美の存在すら覚えていない。

次に、君の気配を『騙した』。そして現実を『騙し』て、螺子を消し

た。それが真実。更に最後に、現実がまた『騙さ』れ、球磨川くん、君は京都の城咲というところに飛ばされた。かなり上空にね。

何故途中で君が『騙さ』れたことに気付いたからだって？ そりゃあ、君がひねくれ者だからだろう。正確に言うのと、君が劣化大嘘憑きを自動で発動させたんだ。君が死んだときみたいだね。

さで、説明はここまでだ。潤ちゃんによろしくね、球磨川くん。あ、あと××くんのことだけど、彼は——

ち××、おい、聞きたいとこだけ聞いてオサラバかよ！ 酷いなあ、球磨川くん——

「一時間経過してますが、生き返りませんよ」

「……………気のせいだって」

「流石にそろそろ通報しますんで、自首してください」

「いや待て。あと一分待て」

「もうそれが続いて三〇分——」

途端、先程まで死体だった死体が起き上がる。ゆつたりと、のらりと、くらりと。

『劣化大嘘憑き』マイナスオールフィクション——僕の絶命を、なかったことにした』『全く、それはないよ哀川さん』『安心院さんによるしくねって言われたしさ』

そのさりとし、淡々とした台詞に対し、哀川潤はけたけたと笑いながら、な？ と、言う。

「……………戯言だろ……………」

しかし——ちゃんにはあ、と呆れながら、頭が痛いらしく額に手を当てて、その溜息と共に言葉を吐きだす。

『嘘憑きなだけさ』

生き返ってきた当の球磨川禊はまたしても定型文に対して同じくそれへのテンプレートである返しかのようにそう、括弧つけて、言う。「いやしかし、確かになじみんの言う通りだなー。いーたんより蹴り甲斐があるとはなー。それは誇っていいことだぜ、クマー」

『……………人の名前をきちんと呼ぶってことができないのかい？』『哀川さんは』

言いにくいことを、さらつと言いつつ球磨川禊。相も変わらず余ほど命が必要ないと見える。『劣化大嘘憑き』マイナスオールワイクシヨンを持っていて彼にとつて命は必要ないというか、掃いて捨てられるものではあるのだろうが、その過負荷マイナスは完全ではないのだからあまり冒険はするものではないだろうに。

『いーたんだったり、なじみんだったり、クマーだったり』『玖渚ちゃんだったり』

「待て、何で最後のを知ってんだてめえ。あとあたしのことを名字で呼ぶんじゃねえ」

もっぺん蹴るぞ、といつものように怒りながら言う。哀川潤も哀川潤で、球磨川禊の命を考えていないような発言。あのとんでもない攻撃は間違つてもいーちゃんには当てないだろうが、球磨川禊には容赦しないようだ。

『やだなあ、冗談ですよ冗談』

「お前の場合冗談と嘘と本音が区別つかねえよ」

あたしの読心術も効かねーしよ、と続けざまに愚痴る。

「え？ 読心術が……効かない？」

「おおともよ。何だか、こいつには「心」が介在しねー、つーかよ」

愚痴の一言に対していーちゃんが反応する。心が読めない、そういう系統の発言を誰かにした誰かを、彼は知っているからこそである。

しかしそれは、あの隔離された島で殺された、脳漿を撒き散らして暗殺者に殺された、超能力者。いーちゃんとも、哀川潤とも相容れなかった超能力者が、玖渚に言った事象より酷かった。

「見えない」ではなく——「効かない」。

『いやいやおいおい』『人をそんな風に言わないでくれよ、傷付いちやうなあ』『心外だぜ』

「……お前は絶対傷付かねえよ」

心が存在しないなどと言われているのだからそう思われても仕方がない。

『あと、僕は箱庭学園に戻りたいんだけど？』

話の腰を完膚なきまでに粉碎した上で、球磨川禊は、凶器を、狂気

を出しながら、おぞましく言う。先刻まで普通に会話していたにも関わらず、だ。混沌より這い寄る過負荷——球磨川禊と言われるだけはある。天上天下球磨川禊どころか、天下最下球磨川禊なのだ。教えてくれなきや、心を折るぞ。少しばかり、遅いハロウィーンと言ったところか。

「あん？ それは仕事依頼かよ？」

だが、人類最強こと哀川潤はそんな球磨川禊の狂気なんて気にも止めない。いっそのその狂気をこそを折り曲げてゴミ箱に捨てる風にさっぱりとした反応で返す。

『ああんそうそう仕事依頼……なんだっけ、何でも屋だっけ』

「何でも屋って……ちげえよ、正確には請負人という。人類最強の請負人」

『これはこれは度々すみません』『人類最強の万屋でしたか』

「お前今人の話聞いてたか!？」

『請け負ってくれるんですか？ 僕ごときの頼みを』

どうやら話は聞いていたうえで故意に間違ったらしい。頑張つてはいないとはいえわざわざ場の雰囲気作りがてらに出した狂気をさらつとなかったことにされたのは不服だったのかもしれない。そんな球磨川禊に呆れつつ哀川潤は、

「お前、小唄と気が合いそうだな……いや、あたしは請け負わない。が、代わりに」

×ーちゃんを指差して。

×を指差して。

「~~い~~×「たんが請け負うんだぜ」

ホーバークルドレツド
赤き征裁は、そう言った。

「いやいやいや———はあ!?! 何言ってますか!?!」

「いーたんが請け負うんだぜ」

先程の言葉をそのままリピートされる。

「そういう意味ではなく! 何を根拠に言ってますかって言ってますよ!」

「えー見て分かれよ、聞いて分かれよー感じろよー」

彼女は座ったまま、可愛らしく口を尖らせて何かの売り文句のように、文句を述べる。それを見て、この二人の掛け合いはおもしろいなと球磨川禊は二人の掛け合いを眺めつつ、そのような考えが走る。どちらも弱点が強さに埋もれており、否、片方は強さが弱点に埋もれており、どちらにせよ良いタッグだと感じざるを得ない。

最強と、最弱。

それこそが、最強タッグ。どこかの誰かたちも、そんな風なタッグだった。今はそれが拗れてしまっているものの、強さと弱さを受け持つのは——それだけでもう最強の証だ。

けど、人の上には人がいるし。人の下には人がいる。無論「下」は球磨川禊であろう。ならばこの場合「上」は？ 完全院さん、あたりしか存在し得ないのかもしれない。

「いやだってあたしは動けねーし。大体、いーたんはあたしのライバルになるつつつたじゃねえか。だからこれがそのための試練、もとい依頼第一号だろ」

「……そもそも僕はハコニワガクエンなんて知りま×市×区×にある」ああはいそうですかありますがどうございます行つてきます×

台詞の間に台詞を言う哀川潤。球磨川禊にとって、安心院なじむ並みの暴虐無人さを印象付けてしまうくらいである。もしくは、安心院なじむと馴れ合ったことにより、そんな荒唐無稽な真似をしているのだろうか。

『というか何で僕はこんな乱暴に引き摺られながら案内してもらってるんだい？』『何もしていない手が疲れちゃうよ』

「何もしていないのに疲れるのか……」

『ああ痛い痛い！』『せめて曲がり角は気を付けて！』

箱庭学園、ではなく水槽学園の制服の襟をいーちゃんに掴まれたまま、角も配線も関係無しにずると引き摺られる球磨川禊。ここのマンションの角はきっかり九〇度であるため、軽い刃物とも言えるくらいだ。

『それ以前にこのマンション白過ぎない？』『今にも汚れちまいそうだ』

ぜ』

「お前はこれ以上汚れねえよ」

そういうと、ようやく手を離してくれた。髪も黒く制服も黒く腹も黒い彼であれば、確かに汚れる理由が無い。何より白いから汚れそうという辺り、過負荷マイナスらしい。綺麗好きである彼からすれば真つ黒な空間の方が清潔に感じるのだろうか。

「玖渚は何故か白色が好きなんだ。さっきのが「汚れが目立つ」って意味なら共感できるけどね。因みに、エレベーターも白い」

『ここ三二階だか三三階だかだっけ？ また一階まで一気に下りるんだねえ』『というかここ、京都タワーより高いよね』

「高いね」

『市役所辺りに怒られなかった？』

「国に怒られたらしい」

市どころか国。実にスケールの大きい話だ、球磨川禊にとっては国がそこまで京都タワーを大切にしているという事実も少しばかり現実離れしていて、意味不明だなあ、と思うばかりだ。

国に怒られたにも関わらず、住み続けている玖渚友やおそらく揉み消したのであろう玖渚機関についてはもう精神が凶太いという勢いではないが。

『エレベーターが降りる時の浮遊感と言ったら、堪らないね』

「子供か」

『エレベーターの止まる時って、目が回るよね』

「どの意味でもそれは共感できない」

ちよつとした受け答えをして、球磨川禊のいーちゃんに対する印象が更新される。最弱という彼と似た立場でありながら、役柄は人吉善吉のようなツツコミに相對するものだからだ。一般人、箱庭学園に通う生徒が一般人なのか、黒神めだかと戦う人間が一般人なのか、怪しいところではあるのだが。

そこでふと過負荷は疑問が一つ。役柄が人吉善吉と同じなのならば、伝家の宝刀、ノリツツコミは出来るのか、と。

『ねえねえ、いーちゃ——』

「いーちゃん、今すぐその人から離れて。」

しかしそのノリツツコミのための渾身のボケが如何様なものだったのかは判明する前に、そのような雰囲気ではなくなる。エレベーターが開くと、それはもうおっかない黒服の危なげな方々に銃器を突き付けられ、言葉を紡ぐと撃たれてしまうような状態なのだ。

そして、そう言った目の前にいる少女の身長は小さめだ。少なくとも哀川潤よりは小さく、未熟。加えて哀川潤と逆であり、青っぽい。否、蒼っぽい。球磨川禊からするとその蒼色は若干、水俣真美を想起させたりするのだが、それは置いておいて。

「……何でだ、友」

『何々？ いーちゃんの彼女？』

「今そういうノリはやめてくんないかなあ?！」

しかし、実際に彼女でもあるためにいーちゃんは否定しない。その関係性を否定が無い現実だけで理解した球磨川禊は何となく嫉妬の念に駆られかけたが今はそういう場合でもない。

ただ、昔ならば、ムカつくこともなくただ単純に目の前に立ち塞がられたからという理由だけで螺子を構えていた可能性はある。マイナスマイナス劣化過負荷、と言えなくもない存在になってしまった彼は、随分と甘くなってしまうているのかもしれない。

「……友、単にこいつは学校に帰りたくて僕はその見送りを哀川さんに投げられただけなんだが」

「駄目。球磨川禊の場合、いーちゃんの『無為式』より酷くなりかねないの」

「けど」

瞬。

連続した轟音と共に、その少女を含めたいーちゃんと球磨川禊、二人を除く全員の心臓の位置に。真横に線が掘られたヘッドの螺子が一本ずつ、螺子込まれる。人数が人数だったが故に建物も破壊痕だらけになってしまっており、下手をすれば倒壊も有り得る。

「!？」

驚愕の符を出したのはいーちゃんだ。彼ら以外は、その符を出すこ

とも敵わないくらいに素早く、封じられてしまっている。髪は白く抜けていき、全員の目が、いーちゃんとは違って純粹に死んでいく。

口もだらしなく開けられたりして、その表情からは生気が全く感じ取ることが出来ない。その異様な光景を瞬時に目の当たりにさせられたからこそ、いーちゃんは流石に驚いた。

「なっ……」

『いやあいーちゃんはこんな僕を庇うなんて』『君は過負荷マイナスみたいだねえ』『しかし、それでも君の言葉は甘いね』『過負荷マイナスだろうとそれは甘過ぎる』『だがその甘さ』『嫌いじゃあ、ないぜ』

恰好付けて、括弧付けて、言う。それがいーちゃんは不思議だった。それに、目の前には螺子による地獄絵図。理解するしないではなく、その行動原理から脳髓が拒否反応を示している。何が起きているのか。

何をしたのか。そんなこと、気にしては駄目なのだ。だがしかし、さしもの戯言使いであろうと、混沌より這い寄る彼のその犯した行為は、問わなければ始まらない。

「……何をした」

『却本作りブックメーカー』『なあに、痛みはない』『ただちよつとばかり、封印しただけさ』『警備員は百年くらい、その蒼つ子ちゃんなら三十年で抜けるよ』

「……君の気が変わることを祈っておく。ま、死んだ訳じゃないならとりあえず行こうか。玖渚のマンション内ならどこで寝ようと無事だろうし」

彼女持ちにはあるまじき冷酷さである。

『君の感情は欠陥マイナスなんだね』

「君に言われたくないよ、虚言使い」

『虚言使いか……いいねえ、それ』

「へえ、その水俣真美とやらにここまで飛ばされたのか。大変なご身分だね」

『ははは』『全くもってそうだね』

駅まで歩く途中、球磨川禊はいーちゃんに事情を普通に説明していた。車で送るだとか、飛行機に乗るだとか、色々と交通手段は考えたのだが車は出したくないといういーちゃんの意固地により、電車の乗り継ぎで手打ちとなったのだ。

それでも、幾分かの金銭が吹き飛んでしまったりするのだが。

「通称が『歩く病気』っていうのは多分、水俣病からなんだろうね」

『あー、確かに水俣ちゃんが使ってたスキルの具現化が水銀っぽかったかも』

「……後ろからいきなり飛ばされたのによく分かったもんだ」

『僕が飛ばされた事を「なかったこと」にした』『確認するだけ確認して、そのあと』『その場に僕がいるという事実を「なかったこと」にしたらここに飛ばされたんだ』

この言葉、球磨川禊でなかったらいーちゃんも少しばかりは信じる気はあった。が球磨川禊だと無理だ。正当な事だろうと正直に言おうと嘘にしか聞こえない。何より、水銀みたいだったという情報が如何にも後付け過ぎる。

そしてこの男は本当にそんなことはしていない。やろうと思えば出来たことではあるのだが、そんなことを考えるまでもなく彼はどこかに飛ばされたという事実に関心浮かれていたためにそんなことを思いついていなかった。

「要らない嘘は吐かなくていいよ」

『無理無理。僕は嘘に憑かかれている嘘憑きだからね』『三分に一回は嘘を憑かないと死んじゃうんだ』

「結構な頻度だね」

しかし何分に一回どころか、返す言葉言う言葉に嘘を混ぜているいーちゃんが言える言葉ではない。

『でや』

「……何だい」

どうせ碌でもないことだろう、という溜息混じりの返事。

『後ろからロリっ子がついてきてるんだけど』『なにその子、いーちゃんの子のロリ奴隷？』

「!？」

「いーちゃんは驚いてバツと振り向く。どうも気付いていなかったらしい。さして気配を消していたわけではないため、いーちゃんでも勘付けるはずなのだが、球磨川禊の過負荷具合に痺てられているのかイマイチ索敵できていないようだ。」

「あ」

後ろにいたのは随分と暗い色にも関わらずツヤの濃い光沢が輝く黒髪で、その髪と太極図かのように相反する形で白磁のように抜けるような無垢に白い肌の、そしてその柔い肌を存分に見せるワンピース一枚を着た幼女。闇口崩子である。

「……崩子ちゃん。なに、いつの間に僕に気配を感じさせないほど尾行が上手くなったの」

「潤さんに教えてもらったのです。将来役立つだろうからって」

「あの人がいたいけな少女に何教えてんだよ!」

尚、いーちゃんはいままで経とうとロリ奴隷だということを否定しない。彼女だけでなくロリ奴隷までいる身、それを球磨川禊はだんだんと普通に羨ましくなってきたりする。それもどちらも絶世の美貌を誇るというのだから。

そして何故かどちらも幼女体型だというのだから。

「それで、何の用事?」

「え……用事もなく近くにいたら駄目でしたか……?」

「いやいや勿論良いよ良いとももう本当いてくれて良いよいやむしろ僕の方からいてくださいと頼むところだったんだ崩子ちゃんはあるだけで僕にとっては癒しだし眼福だし疲労なんて感じなくなるし楽しくなるし嬉しくなるし最高最高最の高って奴だよいやあ崩子ちゃんは僕のそんな感情を理解している上に空気も読めていてとても賢いし可愛いし良い子だ!」

球磨川禊でも不自然と思えるくらいの意見の変え方。何と、あの球磨川禊が絶句してしまったほどである。いつそいーちゃんがどこまで闇口崩子に対して甘いのか気になるくらいに。

「って言っても、ここ、あの元骨董アパートから相当離れてるよ?」

そのテンションをすつと戻して、素朴な疑問を一つ言う。元骨董アパートとはいーちゃんと言口崩子、そして他にも多数の住人が暮らしているアパートのことである。元々はその骨董アパートという名に違わず古めかしい建物で家賃も格安の破格だったのだが、とある事情でとんでもないことになった経緯がある。

「いえ、虫を殺そうとしたら戯言遣いのお兄ちゃんに気配が似ている可愛い猫を見つけたので追いかけていたら道に迷ってしまい、とりあえず細道から抜け出したところ、戯言遣いのお兄ちゃんの姿を見つけたので駆け寄ったのです」

「その猫、黒猫だろうな…」

自分が不吉だと自覚しているいーちゃん。彼の場合、どちらかといえば鳥の方が似ているはずだが。

「それにしても」

若干ショックを受けているいーちゃんはさておいて、言口崩子は視線を球磨川禊に移して、一拍置く。

「戯言遣いのお兄ちゃんが一緒に歩いているこの方は殺した方がいいと思うのですが、どうでしょう？」

『へえ、ただのロリ奴隷じゃないんだね』『その年で「殺した方がいいと思うのですが」って』『いやあこの驚きは財部ちゃんがパンツを見せながら苛めてくれた日以来だ！』

要はそこまで驚いていない。流石は球磨川禊、こと生死を問われる事案に関しては暇がない、慣れてしまっている。というよりは、慣れる気が無いのだろう。気にする気も無いのだろう。彼にとって、些細なことなのかもしれない。

『まあ箱庭学園じゃめっちゃくちゃ恐くて怖い眠りロリ姫がいるからね。そこまで驚かないけど、初対面の人に失礼じゃない？』

「あなたの気配の、存在の方が失礼ですよ。言うこと言うこと、とことん私の父親と真逆で苛つきますね。戯言遣いのお兄ちゃん、殺しの許可をください」

「そいつに関わったら崩子ちゃんだと心が折れすぎて曲がるから却下」

心が折れすぎて曲がるとは。心が曲がりすぎて折れるわけではなく、折れすぎて曲がる。否、この場合は「禍る」という意味合いなのだろうか。骨董アパルトその他から人気がある彼女が球磨川禊のような負完全に染まってしまふのは拒みたいのか。

「ですが」

「あんまり聞き分けが悪いようだ、帰った時のお仕置きが悪化す」今すぐ帰りますごめんなさい」

その言葉を聞いて、彼女は目にも止まらない速度で走り去っていった。

『……どんなお仕置きをしたらああなるんだい』

「秘密」

しばらくして、球磨川禊といーちゃんという最悪タッグが駅に入ろうとした時。いーちゃんの携帯へと、哀川潤から電話がかかってきた。嫌な顔一つせずさらつとすぐさまいーちゃんは出たが、内心では何となく嫌な予感はしている。

「あたしあたし！ 今さー、玖渚ちに捕まっちゃった。釈放されたいから一五〇万振り込んでくんないか？」

「真実と詐欺を混ぜないでください」

「ま、起きたら玖渚ちん達が螺子伏せられてた？ って感じかな。とりあえず刺さつてた螺子抜いたらさあ」

抜けたらしい。『却本作り』は怪力や力づくで抜ける代物ではないはずだが、一体どういう原理で抜いたのだろうか。おそろしや哀川潤、下手をすれば安心院さんよりも凄まじいのやもしれない。

「意識が戻ったみたいで、あたしが捕まえられてな。いーたんとクマーを連れ戻せーって」

哀川さんがそう言い切った瞬間、辺りが静まり返る。駅近くであり、街中であり、間違つても人々の喧騒が一瞬でなくなるなど有り得ない場所。そんな場所で、人影すらもすんと消えたのだ。

「君が球磨川禊かい？」

そんな中、いーちゃんと球磨川禊の前に二人だけ、目隠しをした女

性が現れる。その現れた瞬間も目視できておらず、いーちゃんは戸惑ったままだが、片方の女性は球磨川禊に対してそう言った。

『うん？ そうだけど何、君？ 僕のファンかな？』

しかし球磨川禊は特に何も思わず、いつも通り言葉を返す。

「おーい、いーたん聞いてるかー？」

「すみません哀川さん、玖渚にも無理だつて言つといてください。今から、多分ヤバくなりますので」

「あ？ おい、あたしを名字で呼ぶ——」

流石に緊急事態と身体が分かってしまったのか、いーちゃんは電話を切る。哀川さんに蹴られないよう祈れなくなるまで祈つといてあげようというのが、その行動を見た球磨川禊の感想だった。

『で何？ また知り合い？ 今度はいーちゃんのそういうフレンド？』

「いねえよ」

いないそうだ。

彼女とロリ奴隷がいたために、球磨川禊からすればもういーちゃんという人物の周りどれほどのヤバイ関係の女性が紛れていようと驚かないし疑問に思わないことにしたところだというのに、そういうフレンドはいないらしい。

「多分だけど、多分だけど——時宮じゃないかな」

『ときのみや？』

『『呪い名』序列……つて言っても分からないのか、うーん』

いーちゃんの地域に関しての知識が乏しい球磨川禊に分かりやすく言うには何と説明したものか、と彼が言葉に迷っていると彼に時宮と想定された女が喋り始める。ノイズがかかっているかのように、判別が上手く付かない声。だが、その声の主軸は、球磨川禊だけは何となく、知っている声だ。

「正解正解。記憶力悪いんじゃないの？ 『いーちゃん』。まあ僕は『いーちゃん』じゃなくなつて球磨川禊に用があるんだよ。因みに僕は時宮刻^{きざみ}弥^みね」

『そうかい——』

螺子。

直感でも直観でもそうとしか思えないほどの量の螺子が時宮刻弥に投げられた。腕だろうが足だろうが心臓だろうが脳味噌だろうが、全ての部位を破片にして肉片にする気しか無いほどの量。彼女からすれば、視界が螺子まみれになったことであろう。が。

「おいおい球磨川くん、不意討ちとか当然のことをしないでくれよな」
時宮刻弥は目隠しを外していて。

『あ……安心院さん!?!』

球磨川禊から見たら安心院なじみでしかなかった。

声、姿、体格、喋り口調。性格においては今しがた判別しづらいが、少なくとも現在確認できる全ての情報において、球磨川禊から見た時宮刻弥はどうしようもなく安心院なじみだったのだ。

「……………操想術師……! そいつは——」

「おっと! 君の相手は私だよーん!」

そう言い、立て続けに球磨川禊へ時宮の情報を教えようとしたいちちゃんを制止したのは、死んだはずの占い師。否、天才・占い師。烏の濡れ羽鳥にて出会った、相容れそうにもない、あの人間。

「な——」

「私は時宮刻弥の姉、時宮指針^{ししん}だよ。私達姉妹は相手の『嫌な奴』になる操想術師なんだ」

時宮時刻じゃないだけにやりづらい。不意討ち過ぎて対応できていない。覚悟が決まっていけないからまんまと術中に嵌ってしまった。時宮だというのだからそう判断した時点で何かしらの心的感情に訴えかけてくることは危惧して然るべきだった。いちちゃんは時宮指針の、特に面白くもない攻撃を避けながらそう考える。

とにかく、はやく慣れねば。と。

「…………『嫌な奴』、ですか」

「そうとも。とは言っても私が一体誰になってるのかなんて、わかりやしないんだけどね」

「ということは『嫌な奴』の前だと自身の本領を発揮し過ぎて本末転倒になることを狙っているということなんですかね。それとも、嫌よ嫌

よも好きのうち、という意味での『嫌な奴』で、本気を出せないようにして隙を狙うということなんですかね？」

『僕の相手が安心院さんだから多分後者だよ』

「今は黙つていて」

球磨川禊の応答をさらりと流す。

「んー？ ま、そうなるかな。だって今、心情が揺れてるだろう？ なら私の思惑通り、少年は元々の力を出せるわけがないのさあ。て言っても特に鍛えているわけでもない君相手だと身体関係は問題ないがね」

問題は大有りだったりする。いーちゃんは確かに膂力こそめばしくないものの、意識の在り方が違うからだ。人間、タガが外れていると例え力が無くとも恐ろしいことになる。その骨頂、とまでは言わないが、筆頭になれるくらいの男ではあるだろう。

「つまるところ、ガワだけだと？ その人間の、能力などは一切。性格すらも」

「否定はしないよ、でもそのあたりは君という人間が補完する。当たり障りのない、それらしい言葉を連ねておけば勝手に補って未完成を完成させてくれるんだ」

本当にガワだけ。外側だけ。姿形だけ。ならば、いーちゃんにおいてはその操想術の意味が為されなくなる。確かに外見さえ似ていれば驚いてしまうが、彼が彼女を苦手だと思っていたのはその性格そのもの。

それ故、その問答でいーちゃんは落ち着く。落ち着いてしまう。落ち着ける時間を与えられてしまう。

嗚呼、何て不完全な術だろうか。

時宮時刻なんて比較にならない。低俗すぎる。低レベル過ぎる。つまらなさ過ぎる。くだらなさ過ぎる。きつと、中身までも投影できてしまうような術だったならば、いーちゃんにとって大打撃だったろうに。

「では、もう一つ訊きますけど」

そして、

「あなたは」

人類最弱の戯言遣いは、

「誰にも。世界中の誰にだろうと、」

時宮指針の、

「きつとそちらの姉妹の方にすら、」

心を、

「本来の姿を見てももらえない、可哀想な孤独な孤高の、独りぼっちさん
なんですね。」

折る。

「どうしました？ 時宮指針さん」

気持ち悪い。それが、時宮指針が抱いた最初の率直な感想だ。粘り
つくような、まどわりつくような、気持ち悪さ。よりにもよって、時
宮指針は失敗したわけである。もう終わった「狐さん」に気に入られ
ようとして、『いーちゃん』を狙ったのはただの失敗だった。

いや、ただのではない。完全なる失策だった。

彼女の意識は失墜した。

『……へえ』

球磨川禊がそのいーちゃんの戯言具合に感心した途端、いーちゃん
は彼女の頭を掴んで、目を合わせる。死んでから、死体としては絶妙
なタイミングを迎えている腐り落ちた瞳と、合わせられる。

「あなたは、時宮時刻に近いんですね。僕が会った時宮時刻も実はそ
ういう類いの操想術師だったらいいです」

その時宮時刻とは、催眠にも長けていた、「狐さん」が想影真心を制
御するにあたってその三分の一を務めた時宮時刻。そう、事実、いー
ちゃんは西東天の十三階段のうちの一人、時宮時刻を突破してしまっ
ている。最初から、勝ち目など無かったとも言える。

「……やっぱり心の問題だったか」

いーちゃんが呟き。時宮指針の頭から手を離し、顔も離す。

「結構美人さんなんですネ」「!?!」

途端、発した言葉に対し、金髪ボブカットの少女が驚愕の顔をする。

眼を見開き、見たことを無いものを見るかのような、そんな目線。多少の冷や汗も掻いているだろうか、少なくとも口腔内は乾き始めている。

「なっ……まさか、見え……？」

『嫌な奴』なら『嫌な奴』だと思わなきやいい話でしょう？」

「そんな、人間にはしづらいことを、出来るわけが——」

嫌な奴。それが操想術の対象ならば、その対象は生きている人間ならば絶えないことが普通なはず。多少なりとも、嫌だなあとと思う人がいる。そのため、この術は本来ならば少しだけであろうと人を揺さぶることが確実なのだ。

だが、いちちゃんは違った。

何故なのか。と、言うのと。

「僕は。極端な話、言ってしまうえば全部嫌いですよ。嫌ですよ。でも、そのなかで一九年近く生きてきました。『嫌な奴』を『嫌な奴』にしない自己暗示なんて、毎日してらんですよ」

「だからって！ 時宮の操想術を破られるなんて——」

「いいんじゃないんですか、別に。やっど他人に本来の姿を見られて、良かったでしょう」

「！」

その通りである。今まで、妹ですら見れなかった時宮指針の姿が、他人に、見られているのだ。それは、何とも、

「……そっちは終わったのかい、球磨川くん」

謎のトリップに入ったらしい時宮指針を置いておき、球磨川禊の方を気にするいちちゃん。この二人とは違い、球磨川禊と時宮刻弥の二人は盛大に肉弾戦をしているため、本来ならば答えられる状況ではないはずなのだ。

『え？ いやいやいや僕にはそんな話術がないからねえっ！』

そんなことも考えずに喋る球磨川禊。そして安心院なじみ、否、時宮刻弥の蹴りがまともに入る。正中線、腹のど真ん中。若干ばかり中の物が出そうになっているが、噴き出すまでには至らない。

「わっはっは、やっどまともにも君に蹴りが入ったねえ」

『……僕相手に「まとも」を云うなんて、笑い転げそうだぜ?』
ただ、こちらでもガワしかコピーしないその欠陥が、仇となる。

「それがどうしたんだい? 一応僕の操想術は『嫌な奴』且つ『最強』
の方なんだぜ。だったら僕は、君に完全勝利を出来るんだ」

確かに、『劣化大嘘憑き』マイナスオールフィクションで怪我を戻してはいるが、球磨川禊はま
ともに入っていないくとも、かなり攻撃を受けてしまっているのだ。幾
度となくボロボロになったことのある服が、またしてもボロボロに。
そしてそのボロボロが一瞬で戻る。が、またボロボロになる。しか
し、そんなことはどうでもいい。問題は、時宮刻弥のその迂闊な発言
群。こともあるるか相手は球磨川禊。球磨川禊である。

混沌よりも這い寄る過負荷。混沌よりも、這い寄ってくる存在なの
だ。そんな奴に、這い寄る理由を与えてしまったのが彼女。

『だったら、僕に勝てなかつたら君は明日から』『裸エプロンだ』

「はっ……球磨川くん、君はまだそれを言うのかい、懲りないねえ。
まあいいだろう、僕が君に勝利を収められなかつたら、裸エプロンで
も裸ジーンズでもなんでもしてやるよ」

『……僕に対して、「完全」を称するなんて、本当に』『片腹痛いぜ、金
髪ロリ』

「……え?」

金髪ロリ。そう呼ばれたことに驚く時宮刻弥が違和感を感じた右
肩を見ると、螺子。しかし、今まで投げていた螺子と何ら変わりはな
いプラスヘッドの螺子。それがまるで、彼女の右腕を螺子切るかのよ
うに螺子込まれている、

『劣化大嘘憑き』マイナスオールフィクション

ような、気がした。

『螺子が君に螺子込まれるまでの時間をなかつたことにした』『そし
て』

『君の訳の分からない操想術とやらもなかつたことにした』

その言葉を発されてから、数秒の無言が続く。観戦しているいー
ちゃんも、おお、と言っていてどうやら時宮刻弥の本来の姿を目視で
きたらしい。そもそもとして時宮指針を破った癖に、時宮刻弥を破る

気が無かったというのもどうだという話だが。

「!? そつ——そんなこと、を、出来るわけが……ないだろう!?!」

『何で?..』

「きつ君の能力は理不尽な急速快復だろう! だったら!」

『あはははは!!』『本当に片腹痛いし笑い転げちゃったよ』『いやいや時宮さん。時宮刻弥さん。』『僕は「完全」じゃなくて「負完全」だ。そんなどこぞのアセロラオリオンじゃないんだよ』『「現実」を「虚構」にする——いや、今は劣化してるから全とはいかないけないけどね』

だが、時宮刻弥の能力くらいであれば、「虚構」に出来てしまった。まだ使い始めて二日目であるために、彼自身まだ限度が分かっていない。元々の『大嘘憑き』ですら、「虚構」に出来なかったものがあるというのに。

「……そん、な、使い方からして、——」

『その思い込みが君の弱点だね。そして僕は嘘憑き、大嘘憑きだ。』『やれやれ、君の未来が見えるようだぜ』

運絡みとも言える勝利だった。ああ、勝利だとも。球磨川禊が、勝利したのだ。だが、運絡み。それも、相手が間抜けでなければ勝てる見込みなどなかった。運と運と運が混ざった上でのちよつとした、しようもない勝利。全く、それこそ片腹痛い。

それを勝利と認めるなど、週刊少年ジャンプファンが許すわけがないだろう。虚しくない勝利など、球磨川禊のモットーのうちではない。勝てたなど、言いたくもあるまい。

『また勝てなかった』『とは言えないなあ』『でも』『やつと勝てた』『なんて絶対と言いたくない』『こんなしようもない感じで勝ちたくないよ僕は』

「馬鹿をつ……言え……!」

一度は膝から崩れた時宮刻弥だったが、どうやら簡単に勝たせてくれるわけではないらしい。例え操想術を消されようとも、相手はいち人間。そして何より、ただ単純に打ち合いをしてのめされただけで、彼女は心が折れていない。

球磨川禊のいつもの、過負荷としての負越がまだ発動していない。

だから、戦闘はまだ終わっていないのだ。

「時宮病院を、嘗めるなよ！」

『おっと』『これまた』『実直で愚直だ——まっすぐ突っ込んでくるなんて』

しかし、操想術を失った時宮など、その恐怖が薄れてしまっている。加えて、この二人は名前から分かる通り、時宮としては及第点ギリギリの者達であり、何が間違っても少なくともいちちゃんをどうこうできるレベルに達していない。

『ま』『それが正解なんだけど』

「は?！」

本当にまっすぐ突っ込んできて、時宮刻弥が彼に膝蹴りを喰らわせたところ、思い切り吹き飛ばされて地面へと後頭部スライディングをキメる球磨川禊。盛大にアスファルトを擦っていったせいで血の跡が酷い——が、すぐにその怪我も血も「なかったこと」になる。

『いやー』『まともな肉弾戦とか、僕参っちゃうよ』『どこに打ち込まれても致命傷だもん』『大変だなあ』

『どういうことだ……? さっきまでのあの勢いは虚勢だとしても!』

『うんうんそうそう』『虚勢』『良いよねえ虚勢』『なんてったって勢いが虚ろなんだぜ?』『最高だろ』

話が地味に噛み合っていない。いや、噛み合っているのだろうが、歯車で言うのなら本来の型と違うものと組み合わさっているかのような、絶妙に微妙な、そして致命的なズレが起きている。

時宮刻弥は意味が分からない、という顔をしつつも勝利のために球磨川禊への一方的な暴力をしかけてみるが、そのどれもがクリティカルヒットを成し遂げる。が、無論すべて「なかったこと」にされ、次第に彼女の体力の方が保たなくなっていく。

「何……なん、だ……お前は……!」

『いや』『え?』『君、僕の名前知ってたよね?』『能力についても予想してたし』『なのに今更僕の正体を訊かれても困るなあ』

殴れば骨が折れる音がするし、蹴れば皮が裂ける音がする。頭突きをしても頭蓋が割れる音がしたし、叩いただけでも関節が外れる音が

響いた。だが、その痛みが「なかったこと」になっているとはいえ平然と。

球磨川禊は飄々と立ち上がる。

「いい……もういい……！ 私に負けでいい！ だから、見逃してくれ！ 嫌だ、もうお前とは関わりたくない！」

『まだ僕何もしてないんだけど』『その言い草はちよつと不満だなあ』『ほら、諦めは最大の敵だって言わない？』『そういうのは駄目だと思うんだよ』『でも確かに金髪ロリっ子相手に嫌がられるのも嫌だなあ』『じゃあ、そうだ』『もつとこう単純に分かりやすく勝敗を決めようじゃないか』

「……何をすつて言うんだ……？？」

疲れつつも身構えたままの時宮刻弥と目を合わせる球磨川禊。そのまま視線を下へとズラしていき、一度螺子を螺子込んで螺子切られた服から見える肌を通り過ぎ、その足元まで舐めるように見た。ところで、また顔を上げて。

『野球拳しようぜ』

「アホか」

後頭部にいちちゃんの手刀が直撃。

「人目がなくなつてるとはいえそんなはたしない勝負を今からするな、僕が困るわ」

『ええー、でもいちちゃんも見たくない？』『裸』『それも徐々に脱いでいくことによつてどんなフェイズムが開花するのか分からないドキドキとか』

一応は思春期男児、ふむ、と顎に手を当てて考えてみるが、

「いや球磨川くんが負け続けて裸になつて終わりだよな？ そういう存在だよな君？」

『うつわ本当じゃん』『気付いてくれて助かったぜ、さんくーいーちゃん』

「その言い方は凄まじく友と被つてるから今後絶対に言わないでくれ絶対にだ」

ぽかんと惚けたままの時宮刻弥を放つたまま、虚言と戯言の応酬は

続く。球磨川禊が球磨川禊であるだけに、玖渚友を彷彿させるような言動はしてほしくないらしいーちゃんという新しい一面が見られたが、彼女にとってはそんな会話はどうでもよく。

ただ、どうしても野球拳を言い出した彼と、それをチョップで防いだ彼を見ていると勝負をするのが馬鹿らしくなっているとどこかだつた。要の操想術も「なかったこと」になっているうえ、妹の指針は謎にーちゃんを見つめたままで無言。

そのため、身構えるのをやめ、小さく拳手して、それを二人の欠陥品が気付いてこちらを見てくれたところで質問をぶつける。

「えっと、どうなった？」

その質問に対し、その二人は互いに見つめ、

「こつちの不戦敗で」

『また勝てなかった』『ということだ』

話はあっけなくつまらなく終わった。

下 水俣市

「さあ、駅に入って新幹線に乗らないといけなただけ。持ち合わせある？」

時宮姉妹が退去していくのを見届けたところで、いーちゃんは気分を変えるように訊く。

『んー？ ないよ？』『過負荷マイナスだからそうそう持ってないなあ』『いやまあ、持つてる過負荷マイナスもいるけどね。親が遠巻きに見てるだけの過負荷マイナスだとそれなりに持つてる』

「どつちにしろ君はないんだね……」

僕の貯金も今月は引き出せないしなあ、と言いながらいーちゃんは携帯を触る。そのままリダイヤルから、とある人物に連絡しようとするのだ、が。そこで一つ、思い出す。とても嫌な顔をして、それはもう嫌な顔をして。

「……あ、そういやさっきの戦闘前に哀川さんから用件伝えられてたんだった……うわー、電話したくない」

『僕を連れ戻せ、とかだっけ？』

と、言いつつもそのまま電話をかける。

「そうだったはず……あ、出た」

「おいおいーたん、さっきはそつちから切つといてその後にそつちからかけてくるってどういう度胸が出来たんだよ。帰ってきたらさば折りされる覚悟はあるんだろうな、え？」

「い、いやいや、ちよつと退つ引きならない状況だったんですよ。で、今から駅に入ろうとしたんですが、この虚言使い、持ち合わせが全くないらしいです。それで貸してもらいたいですよ」

「却下。とにかく帰ってこい。さもないと皮全部ひっぺがすからな」

「どこの拷問ですか、それ!? ……て、切れたし！」

この場合は球磨川禊が悪いのか、水俣真美みなまたまなみが悪いのか、いーちゃんが悪いのか、哀川潤が悪いのか、玖渚友が悪いのか。何にせよ、その責任を負いツケを払うのはいーちゃんであることは確実である。

「仕方ない……一回戻るよ」

『はいはい』

言えば、悪いとすれば球磨川禊の運。球磨川禊自身は悪くない。僕は悪くない、という奴だ。いーちゃんの運も悪いと、言えなくもないのだが。

「やつほー、いーたん」

「呼び返しておいてやつほーも何もありませんよ……」

『あつはは！』『いやしかし、哀川さんなら戻ってくる途中で捕まえると思っただけがね』『何もしませんでしたねえ』

「……それは挑発と受け取ったらいいのか？」

球磨川禊は思いきり睨まれる。行きはよいよい帰りは怖い、といったところか。箱庭学園に戻ろうとしたらこのような怖いお方に怖い眼で怖く睨まれるなど、早々ない体験である。

「つーかさ、玖渚ちゃんはやたらクマーのことを煙たがってたんだがお前、何やったんだ？」

『何もしてないのに……』『ちよつと不意打ちで螺子伏せただけなのに……』

「……あれ、お前のせいだったのか。そりゃ嫌われもするだろうよ……」

「それ以前に、ただでさえ“普通”になりつつあるんですから。こいつの障気は耐え難いんですよ」

『……何か酷い事しか言われてない気がするけど』

「いやいや、長年いーたんの傍にいたんだから、それはないだろうな。多分」

「こいつと一緒にの扱ってというのは、些か不愉快なんですが」

『僕もちよつとごめんかなあ』

「しかしだな、やつぱは似てるんだよ。ま、どこぞの零崎とは違うんだけど。上っ面が似てるっつーかね」

その場合、果たして不知火半袖はどうなるのだろうか。球磨川禊と似ていると多数から宣われた、あの少女は。本人曰く、全く似ていない、むしろ止めてくれたとか何だとかそんな話だったはずだが。

「あ、そーいやさあクマーよ」

『何ですか?』

「箱庭学園ってさ、あれ、なじみんが計画した……何だっけな……フラスコ計画だっけ? まだやってんの?」

流石は人類最強、離れている学園の情報でさえお見通しなんだそう
だ。

『やってますよ。いえ、箱庭学園としては凍結中です。ただ、安心院さんが個人的に続行中です』

「はあ? 個人的に?」

『とある普通^{ノーマル}を主人公化させようと、今頃修行中でしょうね』

「なっ……普通^{ノーマル}にさせてんのかよ、あれを!」

普通といっても、ただの普通じゃない。主人公の隣に十三年間い続けた、根性の塊。球磨川禊は本当に、彼が妬ましかった。彼と彼女の関係性が妬ましかった。彼女の彼に対する気持ち^{ノーマル}が妬ましかった。

あの子に先に会ったのは球磨川禊だと言うのに。なのに、あの子の気持ちにも気付いていない。あの子が何故あなのかも分かっていない。そんな、無責任な彼が本当に——妬ましかった。

『そうですよ。一介の一般の普通の高校生の恋心を理屈に、主人公に勝てる主人公にしようとしてるんです』

「……まあ……なじみんが選んだんなら、普通じゃない普通なのは分かるが……」

「あの……話が読めないんですが。フラスコ計画ってなんですか?」

途端、喋ってなかったいーちゃんが喋る。流石に理解が追い付かなくなったらしい。球磨川禊に対して呪い名など何だかんだ理解したい単語を連発していた彼だが、自分の知らないことはさらっと質問していくらしい。

「あー、やってることはお前の大っ嫌いなあそこと一緒だよ。人為的に、天才を作り出す。又は、主人公を作り出すことを目的とした大規模な学校裏の極秘計画さ」

「ああ、だから哀川さんが行かないんですね」

「ご察しのよろしいことで。あと名字で呼ぶな」

はいはい、とーちゃんが流す。

「あたしが行ったら、取っ捕まえられて監禁されて、材料にされるのがオチだろうよ」

「潤さんだったら、捕まらないと思いますけどね」

「そう簡単には問屋がおろさねえよ。箱庭学園の規模は玖渚機関に匹敵するぜ?」

「……ただの変人奇人びつくり箱な学園が、ですか」

「ただの変人奇人びつくり箱な学園『だからこそ』だよ。つーか、クマーはそのびつくり箱に戻りたいわけ?」

『あれ、戻してくれるんですか、哀川さん』『いやあそれは感激ですね。今すぐ帰りたいんですよ』『じゃないと親が心配しますしねー』

「いいぜ、別に。ただし、玖渚ちゃんから頼み事があってよ。なじみんからも同じことさつき頼まれてよ」

『あの人善吉ちゃんの修行中にここに来たの!』『何でいるんだよ、とつか連れて帰ってほしかった!』

その球磨川禊の怒涛の反応を無視して、哀川潤は一つ、その頼み事という名の条件を提示する。無論、そんなものは嫌な予感しかないのが当然だ。何せ、言う人間は人類最強の請負人。

そんな請負人への依頼、なのだ。無理難題に決まっている。例えば、

「帰りがかったら、あたしを倒せ。」

とか。

「ちよ……いやいやいや! 何言ってるんですか!? あんたに勝てる人間なんていないでしょうよ! 今や真心でも難しいってのに!」

「ん? いや、別に仲間呼んでくれていいんだぜ。あ、でもやっぱ真心は駄目な。あいつは桁違いだからさー」

「仲間連れてでも戦いたくありませんから言ってるんですよ!」

『甘いなあ』『見苦しいぜ、いーちゃん』『ま、その甘さも嫌いじゃあないけどね』『しかし』『たかが人類最強でしょ? 無敗じゃないんで

でしょ? だったら!』『僕の価値をあなたの負けによって決めるとしますよ、哀川さん!』

勝てない。

「……勝てないと仮定しても、ここまで戦えれば十分なんだろうけどね。僕じゃ、十秒も保たないだろうなあ」

「！」

しかし。

勝てなくても形勢が逆転することは多々ある。その後にまた形勢逆転されるとしても、だ。それが今だった。

「……なっ……」

深々と哀川潤の正中線上に、心臓の位置に、ぴたりと。ヘッドの窪みがマイナス型の、螺子が一本。刺さっている。長く長く、胸を貫いて床にまで先端が刺さってしまっている、一本の螺子。螺子込まれた、螺子。

「……これが……『却本作り』……っ!!」

安心院なじみから聞いていたのだろう。その効能を、知っているよ。うだ。

「……『あんまり『劣化大嘘憑き』に頼りたくなかったし』『同じ技も使いたくなかったんですけどね』『哀川さん』『あなたに』『却本作り』が刺さるまでの時間を、「なかったこと」にしました。』」

「……やっぱ何でもアリかよ、そのスキル……」

『何でもアリ……には程遠い』『何故なら』『哀川さん、あなたはそれを抜け出せる』

黒神めだか以上なのだから。しかも、今は劣化している。玖渚友に刺さった螺子すら抜くとききた。どこに通ずる要素があるのか。どこに通じる理由があるのか。——ない。ならば、フェイント程度にしか使えない。

「……は！ 絶世の過負荷野郎が!!」

立ち上がる。あの時と、あの子と同じように、立ち上がる。

「嘘は憑かなくていいのか？ まあいいけどよ———そんなじゃま！ 再開と行こう、かつ!?!」

そして、その上半身にも螺子を螺子込む。しかしこれも効くわけが

ない。この程度が効くなら、もう勝っているのだから。いつまで経っても理由を付けて負け続けている彼が、こんな時にこんなことで、勝てるだけでも。

「不意討ち闇討ち騙し討ち！ 上等だ、もつと来い！ そして価値を見せつけろ！」

哀川潤は、やはり黒神めだか以上だなどと、球磨川禊は確信する。黒髪めだか以上の、異常だなど。球磨川禊の気も知らないで、かかってこいなど猛々しく吠えてくる。やれやれだぜ、とぼつり。

『ならばお望み通り見せつけ——』『——ません！』

勿論、今のもフェイントだ。哀川潤に勝つにはフェイントの嵐の中で、僅かな隙を狙うしかないだろう。足を狙って螺子込み、哀川潤を後ずさらせる——はずだった。
が。

哀川潤は螺子込まれた螺子を、そのまま受けた。

『!?!』

「ほーう、その反応を見る限り、何か狙ってたな……虚言使い。けどな、「虚を突く」って知ってるか？ いやあ、実際、こつちを想定してんじゃねーかってひやひやしたぜ。ま、嘘に憑かれてるお前にや虚に突かれてるのが毎日だろうがな」

『……………』『流石、ですね。驚きですよ』『そんな事をするなんてね——』

『で』

『まあ』『これでもう僕はネタ切れですよ』『あとは——』
「惨めったらしく！ みつともなく!! 勝ちに固執して最後まで戦いましようか!!」

途端、球磨川禊の雰囲気が変わる。それを、いーちゃんは感じる。

括弧付けずに……格好付けずに、言った。

清々しく負けようという意思だろうか？

それとも本気で勝ちにいくのだろうか？

分からない。

分からないからこそ——価値がある。

「小唄……てめえ見てたのかよ。見てたんなら分かるだろ、こいつは負けた。だから残る」

「三全ですわよ、お友達。了承ならきちんと貰いましたわ。球磨川禊を、箱庭学園に帰す了承ならば」

すると、石丸小唄は一枚の紙切れを取り出す。見ると、確かに球磨川禊の帰還了承についてかかっている。安心院なじみのサインと、玖渚友のサイン付き。この短時間で、それほどの書類を整えてくるとは。いつしかの戦挙よりも早い。

どこかの誰かが、こんなことを見越してどこかの誰かに事前に知らせておいたのかもしれない。

「……裏でルール変えてんじやねえよ」

「しかし、言ったとしてもあなたは興味本意で球磨川禊と戦ったのでしょう？ お友達」

「……仕方ねえ、費用は後払いであたしが受け持ってやらあ。代わりに、安全に箱庭学園まで返してやれよ」

「請け負いましたわ、お友達」
ディアフレンド

石丸小唄のヘリコプター内。

『へえ、自家用ヘリですか』『お金持ちなんですねえ』

「……私はあまりあなたと話す気はありませんわ、球磨川禊」
『つれませんね』

「哀川潤の言う通り、確かにあなたとは気が合いそうですが。あなたには根尾に近い雰囲気がありますわ」

『しかしですね、お礼くらいは言わせてもらいましょう』『ありがじ——』

「お礼なら」

球磨川禊が渾身のブリザード級のベタなギャグを言おうとしたところを、一言で遮る石丸小唄。流石である。似たような者と謳われるだけあって、扱いはお手の物ということか。ただ、それが果たして似ていることに通ずるのかは確証は無いが。

「お礼なら、とあるお友達に言って欲しいところですよ。実際、あの子

が伝えてくれなければ、私はあなた達の戦いを一全も知りませんわ」
『……………ひとつ質問ですけど』

「何ですか？」

『そのお友達は、不知火半袖という子ですか？』

「そうですが。そうだと何か不都合でもおありでしたの？」

その後には、ヘリの駆動音以外の音が響かなかった。その駆動音自体が止まるまでは。

撃ち落とされた。

それが一番正しい表現方法だろう。明らかに誰かから撃たれていたのだから。正確に言うくと、石丸小唄の頭とヘリコプターエンジンを狙って。実際当たったのはヘリコプターエンジン部だけだが。

「誰でしょうか」

『気になるなら確認しに行けばいいんじゃないんですか』『どうせこのヘリ、墜ちるでしょうし』

「それも十全に一理ありますわね」

「おやあ？ おつかしーな……………暗殺しないといけねえのに……………暗殺できてねえじゃん。これじゃ闇口の評判がた落ちじゃん、けひゃひゃ」

奇異な笑い方をする、女が喋る。

「ふむ——闇口衆の方ですわね」

『……………あ』

石丸小唄は上から飛び降りて颯爽と現れたが、球磨川禊は普通に落ちただけだった。いや、ただ落ちた、というか落ちただけならそれはもう派手に落ちた。というか死んだ。頭から落ちて脳漿と血液を撒き散らして、首から上——否、首から下を無くして豪快に死んだ。京都に落ちてきたときと全く同じ死に方である。

「……………暗殺対象じゃないのが死んじやったじゃん」

が、今回ばかりはその死に様の目撃者が二人ほど。流石に闇口衆であろうと、ここまであつけなく自殺並のことをして死んだ人間は見たことがないらしい。おそらく、これからもないだろう。

「一周してむしろ十全な死に方だと褒めてあげたくなくなってきましたわ……」

石丸小唄も驚きと呆れを見せていた。明らかに呆れの方が大きい
が。

『マイナスオールフィクション
』『劣化大嘘憑き』——』

「!」

しかし球磨川禊の能力を知らない闇口衆は、更なる驚きを隠せない。何せ、死んだはずの人間が生き返るのだから。死んだと思っただけは生きていた、などではなく。どう考えても死んでいた人間が蘇る。尚、石丸小唄は既に知っていたのか全く驚いていない。

『いやはや、すみませんねえ』『ちよつと手と足と頭と胴体と関節が滑りました』

「それは全部ではありませんの?」

「な……な、なあっ?! いやいやいや、おつかいだろ、生き返ったとか! どういう神経してんだよって話じゃん! お前それ、何をどうやっても説明できないじゃん!」

『なんか、いちいち説明するのも面倒臭いなあ』

石丸小唄と球磨川禊の戯れ合いは置いておき、盛大に分かりやすく驚嘆してくれる闇口の人間。だがついに球磨川禊は自身のスキルの説明すらする気がなくなったらしい。箱庭学園においてはその自己紹介をする機会があまりなくなっていたために、今更このように立て続けに説明するのは骨が折れるのかもしれない。現に、首の骨は折れたわけだが。

「い、いや、お前はいつでもいいんじゃない。私は、石丸小唄を殺しに来たんじゃん。つーわけで石丸小唄ぶべらっ!」

そんな宣言を無視して、十全なる蹴りが十全に闇口衆の鳩尾に入っている。名前を名乗れてすらいない。名乗る前に十全に気絶してしまっている。そのため、先程からこの闇口の名前を記すことが出来ていないではないか。

「じゃんじゃんじゃん五月蠅いですわ——闇口衆程度が、私を殺せるなどと思えばがらないで欲しいものですわね。むしろ殺し

「ていませんで、生存料として主人を教えてもらいたいですわよ？」
『いや、気絶していますから』『聞こえちゃいませんよ、多分』
「あら」

「どうやら気付かなかつたらしい。あんな蹴りが入れば、普通気絶すると考えた事はないのだろうか。加えて、その行動を見てまさかの球磨川禊が常識人のような立ち位置に収まってしまっている。

『殺し名』というからには、相当な頑丈さを持っていると思いましたがの……意外に脆いですわね」

「しかも、故意的に力を込めたそうだ。信頼、なのだろう。一応。

『……で、どうするんですか？』

「どうするも何も。あなたが無事では無くなった以上、あなたを送るという請け負いが破綻しましたわ。それに、ヘリも無くなってしまったのですから」

『いえ、この人をどうするのか訊いたんです』

「でしようね」

「そしてやはり、何故か球磨川禊が常識人枠になりかけている。

「……あいつら……私が目が醒めてもまだ話し合ってるじゃん……私ってそんな影が薄かったか……？」

「暗殺者であれば影が薄くて正解なのだが。それでも、この状況だと普通にハブられているだけな気がするようだ。

「おや。目を醒ましたか。上手く調節できたようですわね。十全に気絶させたとはいえ、吐いてもらいたい事もありましたのでね。少し浅目に入れされてもらいましたわ」

「闇口衆は無言を貫く。尚、上手く調節したなどと宣っているが、石丸小唄はそんな調節を全くしていない。さきほどの気絶させた下りの話をこの闇口が聞いていない上での話のはつたりである。そのあつさり加減もあつてか、球磨川禊にとってはこの者は先程の時宮と同様の所屬か、と思っている。

「私は拷問された程度で吐くような情報なんて持ってないね、拷問以上の事をされても吐かないね！」

『どんな拷問がお好みですか小唄さん?』『個人的には拷問以下のごことがしたいんですけど』『なんかあります?』

「それならばあなたは何かもしないでいただきたいですわ。これは私を殺しに来たのですから」

それを静かに制止する石丸小唄。当然である。

「はっ——私は何も吐かないって言ってるじゃん。なんなら、一つでも私から吐かせたなら知りたい事全部吐いてやる」

「ほう。言いましたわね? 言ってしまったわね? いいでしょう、二言もありませんでしょうし」

「ふん、吐かせれるもんなら吐かせてみろって話じゃん——やつてみなあつ! けひやひやひやひやごつぶつ!」

蹴った。

いやもう、それは思いつきり、胃を。

そのブーツの踵が見えなくなるくらいにまで膣口の腹に食い込ませたのだ。それも球磨川禊はおろかその膣口でさえ捉えられたかどうか怪しいくらいの速度で。

「げ、ぼっ……お……っ!」

そして嘔吐。胃の中の物を殆ど吐いていそうなくらいにまで嘔吐を続ける。因みに石丸小唄は即座に足を退けており、その吐瀉物が自分の足にかかるなどというヘマはしない。ただし、その行為行動については球磨川禊からすらもドン引かれているわけだが。

「文字通り一つ吐かせましたが、何か文句でも吐いてみますか?」

「ぐ、う……てめっ……頓知じゃねえぞっうぶうっ!」

再度蹴る。

先程よりも強く、一瞬背骨が外れたのではないかと疑ってしまうくらい音の音を発させながら。これはもう、暴力。実力行使ではなく暴力行使である。一度目の蹴りで何とか多少残していた胃の中の物も、本当に全て吐き出してしまふ。

「それで、次は何を吐くのですか?」

「くっ……ふ、あ……」

その後のシーンは割愛させていただいて。因みに彼女は膣口門音かどね

という。主人は張空機関所属。一度、斜道研究所の窃盗についての濡れ衣を被せられた事を恨んで派遣したのだとか。名前以外、球磨川禊には分からない話である。

拳句、球磨川禊の帰還方法については、結局いちちゃんが車で送る事になってしまった。車で送るのは嫌だとか、電車を乗り継ごうにも金が無いだとか、哀川潤との決闘だとか、石丸小唄の請負だとか、何もかもなかったことかのように、そうなってしまった。

『なんというしょぼや』

「しょぼさとか言わないでくれ。僕だつてビックリしたよ、まさか闇口にも関わっちゃうとかね」

『呪い名』の後に『殺し名』と関わるとか、どんな順番の逆転だよ。といーちゃんは車を運転しつつ、独り言のように呟いていたが、結局球磨川禊には分からない話なのだ。

『ていうか、車で送れる距離なんだね』

「急に喋り出さなくてくれ。驚くから。……まあ、ガソリンの継ぎ足しを何回するかは知らないけどそう言っても過言ではないんじゃないかな。日本国内なんだし」

要は近くない。箱庭学園が何県なのか、通っている球磨川禊ですら若干記憶に乏しかったりするのだが、しょうもない情報を日常の間に提供することに定評のある人吉善吉が「九州の地名姓が多い」だとか何だとか、言っていたような言っていなかったような気がしたために今のところ球磨川禊にとって箱庭学園は九州のどこかに位置している。

何にせよ、京都からは遠いわけだ。トンネルや橋があるとはいえ、海を挟んでしまっているのだから。地方であれば、中国地方を挟んでいる。車で向かうならば片道、半日弱といったところか。昼下がりに夕方前という微妙な時間である今から渋滞に巻き込まれずスムーズに着いたとして、明日の登校時間に間に合うかどうかと言ったところ。

尚、球磨川禊はマイナス十三組なうえ、生徒会であるため無断で休んでも特に成績に響きやしない。が、流石に人付き合いがなんだかん

だどある身の上だ、あの子達にいらぬ心配はかけたくないのが、今の球磨川禊の心情。

『……………』

ただ。

それは、球磨川禊という過負荷において有り得やしなかつた心情だ。前々から甘くなつたとは自覚しているが、あの子達にいらぬ心配はかけたくない、など。会つて数日の普通ノーマルに何を謙遜しているのか。

そもそもとして、何故、心配されるとさも当然のように思考してしまつてゐるのか。同じ学校の皆からは蔑まれ、忌々しく思われ、避けられ、疎外されるのが常である過負荷。の、頂点と言つても否定はされない、彼が。

甘くなつたどころじゃない。

温くなつたどころじゃない。

これは、球磨川禊にとつては重大な問題だ。そんな彼は、球磨川禊は——マイナスか？ これでマイナスだと言えるのか？ 無論、水俣真美に会つたとき、多少驚きこそはすれ、ずうつと今までいつも通りへらへら笑つてはゐる。だが、それは表面上の話。

内心は？ 前の通り芯まで髓までマイナスか？ ではないだろう。そんなことを考えてゐる現在、これだとまるで、ただの。

ただの。

「あいつらと同じプラスじゃないか……！」

「?!」

いーちゃんが驚く。そりゃあいきなり大声を出したら誰でも驚くだろう。加えて、彼は運転中であり、何となく球磨川禊からのどうでもいいちよつかいが無いなどは考えていたが何かしら考えているようだつたため、存在を無視してゐたところがある。

「……………どうしたんだい」

だが取り乱したらしい人間へのケアは取ろうと思つたのか、問う。勿論、運転中なため目を合わせず。

『……………気にしないで』『何、ただの独り言だよ』『独りで自虐してゐるだ

けなんだよ』

「……………そう」

「おいこら俺の敵。お前戯言専門ならこいつの嘘くらい見抜けよ、そうじゃないと物語が進まないだろうが」

『!?!』

今度は球磨川禊が驚く。これまた当然だ、いつから人の横に座っていたのか分からない、それも死に装束なんてものを着ている人間。車に乗った時に視認しておらず、本来ならば誰も乗っていないはずの席。まさか、運転中に忍び込んだわけでもあるまいし。

「……………狐さん……………急に出てこないでくださいよ。心臓に悪いんですから」

「ふん、お前がまた何らかの物語に関与しているのが分かってな。ついてきたただけだ。最初つからいたぜ、俺の敵。それと俺のことを狐さんと呼ぶな。仮面は外したし、本名も教えただろう」

「それだったらあなたも僕のことを俺の敵なんて言わずに本名で呼んでくださいよ。僕も教えたでしょう」

「『それだったらあなたも僕のことを俺の敵なんて言わずに本名で呼んでくださいよ。』、馬鹿を言うのもほどほどにしてもらいたいな。呼んだ奴が悉く死ぬ名前なんかを呼ばすとはなんつーブラツクジョークだよ。笑えねえぜ」

「普通を求める天才よりは僕は馬鹿でいたいですけどね」

「『普通を求める天才よりは僕は馬鹿でいたいですけどね。』……………なかなか反抗的だな、俺の敵。ま、良い。今日は単に物語が止まりそうだったのを動かしに來ただけだからな。本来ならば先程の談笑もカットしていいくらいだ」

「それをするならまずそこで置いてけぼりになってる過負荷マイナスに自己紹介をしてください」

球磨川禊が付いていけるべくもない。

「あん？…なんだこのお前の絵みたいなの野郎は。出てる雰囲気からしてすげえ負け犬っぽいが」

初対面で酷い西東天。球磨川禊の雰囲気だけで負け犬だと決めつ

ける。確かに負け犬であり、本人も時たまその名称を呼称していたりするが、それにしたってなかなか言い方だ。

「確かに一度も勝ったことはないらしいですけどね」

「お前より強そうだが」

「なんてこと言うんですか、当たり前でしょう」

当たり前らしい。なんてこと言うんですかと言ったにも関わらず当たり前らしい。流星は人類最弱の戯言遣い、自身の最弱具合をきっちり認識しているわけだ。

「……流星だな。とりあえず物語は進んだし、俺はまた次に止まった時に起きる。だから起こすな」

いきなり現れ、喋り、貶し、寝た。その自由奔放な姿を見て球磨川禊は正直「何だこの人」という雑な感想しか出てこない。傍若無人さが若干ばかり哀川潤らと通じるところがあるようにも思っているが、
『……………なんか、この人には一生会いたくなかったね』

「もう会っちゃったけどね」

『二度と会いたくないね』

「僕は一度として会いたくなかったよ」

『戯言だね』

「嘘吐きなだけさ」

結局、箱庭学園周辺には夜中に着くこととなる。この辺りで降ろしてもらっても球磨川禊は構わないのだが、いーちゃんの運転が止まる気配がない故に、正門辺りまで送ってくれるのだろおうと踏んで、楽しんでくつろいでいる次第だ。

「道中何もアクシデントが無かったのが奇跡だね」

『だったらこれからあるんじゃない？ 立て続けに』

「いやな予想をしないでくれ」

奇跡はそうそう続かない。何より、いーちゃんと球磨川禊どころか西東天という、どうしようもないマイナス三人がいてそんな奇跡があった事実が既に奇跡である。誰かが死ぬ分は僕球磨川禊が受け取ってるとしても、そろそろ誰かが死ぬのかもしれない。

「……狐さんはいつまでついてくるかな」

『あんまり学園に招き入れたくはないよ』

あの理事長なら許してしまえばいいよ。

「……ごちやごちやうるさいな、全く、俺なんかを忌み嫌ってんじやねーよ。てめえらも同等だつつの」

『同族嫌悪ですかね』

「……………仲良しだな」

『でも過^{ほく}負^{ちう}荷^りはいつでもへらへら笑ってるのが過^ふ負^っ荷^うですからねえ。いーちゃんは過^そ負^う荷^りじゃないかもですから仲良く出来ないかもね』

「何を言う、僕ほど逆境でへらへら笑っている人間はいないぞ」

「お前はへらへらつつか笑うと不気味なんだよ」

「……………」

分かりやすく肩を落とし、目線も落とすいーちゃん。完全に凹んでいる。何か、昔どこかの誰かに似たようなことを言われたのかもしれない。

「球磨川くん」

しかし、目線は落としていれど運転中、前方確認は怠っていないため、現れた異変についてきちんと気付いており、それがどういうことを示すものなのか、この辺りに詳しいであろう球磨川禊に訊いておく。

『なんだい』

「箱庭学園らしきところの正門らしきところに人らしき影が見えるんだけど知り合いとかかい」

止まってこそはいないが、いーちゃんが車のハイビームで照らしている。その光の先にいるのは、茶髪に目にくまのついただらしなさそうな小さい人。趣味の悪いイヤリングもしている。が、球磨川禊にそんな知り合いがいた覚え、素直に無い。

『知らないなあ』『学校内でも見たことないよ、誰あの人』

「ん？ あれ、確かあいつだあいつ」

「どいつですか狐さん」

「約の従姉の娘の義理の父親の又従兄弟の息子じゃないか」

「誰ですか」

『それはもう他人なんじゃ』

「あと確か、俺があいつの母親から研究資料を奪った気がする」

「めっちゃ私怨あるじゃないですか。ていうか何で箱庭学園にその人がいるんですか」

「ここら辺に住んでるんだっけな。多分誰かが俺がここに來るって教えたんじゃないのか?」

「あんた……」

「別にどうでもいいだろ。しかし正門、それも丁度車を止めるにや良過ぎる塩梅の位置に立ち塞がってやがるじゃないか、どう停めるんだ、ええ? つつても死にやしねえだろうから、まあ、」

西東天は、いーちゃんの停車方法を訊いているにも関わらず聞き終える前に、

「轢け。」

さーらつと言う。

「いやいやいやいや! 轢きませんよ!」

「あーあーいいから俺がアクセル踏むからお前はハンドル支えとけて」

「尚更轢かせませんよ!?!」

いーちゃんと西東天、この二人もこの二人で仲良しだ。が、球磨川禊にとっては疑問でしかない、目の前に立っている人間。何故そんな他人がわざわざ箱庭学園前まで來るのか、である。十中八九、水俣真美の差し金ではあるはずだが。

だとすれば、そんな他人を勝手に巻き込んだことに関して水俣真美へ先輩として灸を据えないと、と思うのが球磨川禊。既に散々他人を引き摺り回して苦労させている自分のことは棚に上げて、だ。

「はいアクセル踏んだ」

「あー……………南無阿弥陀仏…………」

諦めるいーちゃん。しかも死ぬ前提で。とはいえ、例え死んでも『劣化大嘘憑き』で蘇生できる。が、赤の他人なうえ男の人を蘇生したくないかなあ、などと考えているこの過負荷野郎がその能力の持ち

主な時点で、心配である。

しかし。その心配はいらなかった。

その男の子は車が当たる前にはねあがり――

西東天が驚いてアクセルを離し――

その瞬間にいちちゃんがブレーキを押し――

そして止まった車から球磨川禊達が急いで出ると。

彼女はそこにいた。

「あつるうえ!? 私轢かれる様な『騙し』したかあ? いっちばんぶつちぎりででつけえマイナスを恨んでるっぽいヤツに騙したんだがな、誰だろねアレ! そつれっでつき!」

彼女は甲高い声でテンションが上がった声から、低い声でテンションを駄々下がりにした声で話す。不安定。そんな言葉がお似合いだ、情緒が、不安定なのだ。最初、球磨川禊に会った大人しきは無い。

「球磨川ああああ……てめおなにけろろりん☆ つつー風に戻ってきてんだよお……ちやつつっかり同類以上のバカでけえマインスマで連れてきやつてよお。私の計画大失敗じゃねーかよ」
そして今度は人を唾うような声で。

「でもさつ! 今考え付いたんだけどあの程度で騙せるんならてめえを抹消出来るんだと至ったぜ! ひやはははははは! どうせそのオトモダチもてめえを裏切つちやうだろおしさ!」

更には弱気な声で。

「……だから……私はてめえ達を止めるんだ……止めて……騙して……殺して……刻んで……張り付けて……晒すんだ……。てめえら程度のマイナスごときが私に及ぶわけないって……」

極めつけに、元の声で。

「そして! 私はこの学校を絶つ! そしたら世の中の過半数がこの学校を憎み恨む……。この学校に騙されたつつつてさあ! その計画を完遂するためにも球磨川禊い! てめえは殺す!」

そう宣言したこの少女こそが――安心院なじみ曰く『歩く病気』
水俣真美。

下
の
下 水俣病

「ああ因みに？」
みなまたまなみ
水俣真美は。

「こ
の
言
葉
が
変
な
様
に
聞
こ
え
る
な
ら
め
え
は
私
に
は
勝
て
な
い
だ

「ろ」

「う」

「よ」

「！」

一文字ずつ、変えて言う。

落ち着いた声で。

荒ぶった声で。

怒った声で。

静まった声で。

発情した声で。

死んだ声で。

苛立った声で。

腐った声で。

泣いた声で。

悲しむ声で。

喜ぶ声で。

諦めた声で。

元気な声で。

驚いた声で。

蕩けた声で。

厳しい声で。

怯えた声で。

戸惑う声で。

愛しい声で。

悩んだ声で。

恥ずかしい声で。

頼った声で。

分かり切った声で。

恨んだ声で。

切ない声で。

楽しい声で。

虚しい声で。

優しい声で。

蔑む声で。

悔やむ声で。

安心する声で。

だが、その台詞自体は、球磨川禊ならば嘲って返すものでしかない。『勝てないだろうよ?』『何言ってるんだか——僕は過負荷マイナスなんだよ?』『君みたいに幾つも違うモノを持った半端者じゃなくて』『純正の、ね』『でもまあ、そこまで言われちゃカチンときちやうかな』

だから、手加減はしない。躊躇なく。

「……………か……………はっ」

地面に彼女を磔にする。螺子で。

「……………これ、僕らは送るだけという事ですから傍観してて良いんですよ?…」

「ふん、良いんじゃないか。面白くなくなったら動いてはもらうが」

「……………僕に、なんでしようね、それ」

再び観戦を決め込むいーちゃんと、それに付き添う西東天。と、言ってもどちらとも面白そうだからというのが西東天の本音なあたり、人格が知れる。流石は人類最悪の遊び人、遊ぶことにおいては暇がない。

「前は受ける前に『騙し』だから気付かなかったが、はあん。これがオールフィクション『大嘘憑き』か」

おかしい話だった。球磨川禊はそれこそ徹底的に、彼女に会ったときと同じように喋れないよう、喉にも螺子込んだはずなのだ。が、水俣真美はさらりとその螺子の刺さっていない声帯を使って喋る。予想できるは一つの効果。

「残念ながら、受けた後でも『騙す』事は出来るんだぜ?」

球磨川禊に匹敵する過負荷マイナス。否、似ている過負荷マイナス、か。何より、その使い方そのものが似過ぎている。螺子込まれた量は明らかに致死量、どう足掻いてもどこもかしこも螺子切られているはずで、生きていくわけがないのだった。けれど。

死んでも、死を「なかったこと」にする彼と。

死んでも、死を『騙し』してしまう彼女。

『いやあ』『戦い甲斐があるつてもんだよ!』

「そりやどうも! でもな、私にはまだ——三つ能力が残つてゐるんだぜ?」

『——つ鎖!?!』『くつ……!』

水俣真美の掌から、鎖が射出される。その鎖の先は別段尖っているなどでもないが、水俣真美は四つの能力持ちであるため、そのどれかとするのが正解だ。そのため、球磨川禊は避ける。わけがない。

「はっはあ! 受けたな! その能力を受けたな!」

彼女は嗤う。

『腐封』——私が持つてる異常だよ!」

どろりと。先程の鎖を受けた右腕が、溶け出す。服も皮も肉も骨も関係なく、まるで腐ったかのように、全てまとめて。加えて、鼻が曲がりそうになるほどの悪臭を放ちながら。その臭いだけで思考が途切れてしまうくらいであり、次いでその溶けていく手の痛覚は健在。絶叫ものの、痛み。

「……腐ってますね」

「腐ってるな」

その姿を見て、さらりと判断を下す最弱と最悪。

『何の! 僕には『劣化大嘘』——』『あれ』『効かない?』

「そりやそうだ! 『腐封』はどんな能力を使っても治癒できない不可逆! 文字通り、封印も同時にしてるんだからなあ!」

そう言う。と、球磨川禊は笑いを零す。当然だ、相手は絶世の過負荷^{マイナス}、球磨川禊。そもそもそうでなくとも、戦闘中に能力のネタばらしをってしまったては、いけないだろう。

どさと、溶けかけ、肘から先は既に無くなっている彼の右腕が地面に落ちる音。

「な……!」

彼女は何をしたのかと聞いたそうな顔をして、球磨川禊を睨む。何

てことはない。ちよつとばかし、右腕を螺子切っただけなのだ。当たった部位を溶かし、そして対象の能力スキルすらも封じてしまう能力スキル。

しかし、わざわざ当てなければいけない理由が無いし、当てた時に思考を奪うような腐敗をさせる意味が分からない。能力封じの能力ならば、もつと相手に危害を加えなくて済むだろう。ならば、どこか欠陥があるはずの異常プラスということになる。

何せ、螺子切ったあとにその右腕は戻なおっているのだから

『部分的に封印されているならね』『その封印している部分を丸ごと捨てるのが定石に決まってるじゃないか』『もしかして僕が自分の身第一な奴だと思ってた?』『そうなら甘いなあ。なかなか癖になる甘みだけど』『少しばかり不純物の混ぜだった甘さだ。』

「聞いていれば……散々言いやがって……! 何が甘いだあ!? ふざけてんじやねえよ、格下が!」

また鎖を投げる。

『呆れる。』『そう何度もしても——』

呆れた調子で喋る球磨川禊は、その鎖を螺子で弾く。

事すら出来ない。すり抜けた。すり抜け、彼の心臓部にヒットする、も、痛みは無い。溶けだすこともない。しかし貫通したわけでもないらしい。心臓に当たった瞬間にその鎖は消える。能力が使えなくなる違和感があるわけでも無いらしい。

『……………この能力は?』

『能拘束』。てめえは今からその能力を使う度に、死ぬ!」

水俣真美はまたしても高笑いに戻り、そう猛々しく宣言する。

『劣化大嘘憑き』

が、意味は無い。

「……………そが!」

『なあんだ、こつちには効くのか』『だったら後はさつきマイナスの過負荷スタイルと言葉とか言うやつだけかい』

「そこまで知ってるのかよ———だったら!」

追い詰められた、というほどではないだろうが、まるで奥の手を出すかのように、彼女は右腕を挙げる。何かを指示するかのような、何

かの合図かのような。そして、そう思った球磨川禊の思考は、間違っていない。

『言葉スタイル——『官能使い』の実力を見せてやんよおおおおおおお
おおおおお!!』

ぞろ。

ぞろぞろ。

ぞろり、と。人が出てくる。

「因みにコレは独学で知っただけなんだがよ——何かに対抗できるんだそうだな？」

出てきたそれは、箱庭学園の全校男子生徒。それも学校舎から、だ。全員こんな時間にまで待機させていたのだろうか。いや、球磨川禊がいつ帰ってくるかなど、分かるわけもない。正門でわざわざ待機していたことから、どの辺りからか彼の帰還を知っていて、かき集めたのだろう。

「ま、私にや知ったこっちゃねえが」

しかし全校男子生徒、というのは否定すべき言葉だった。人吉善吉の姿は見えない。阿久根高貴も、雲仙冥利も、日之影空洞も、黒神真黒も、蝶ヶ崎蛾々丸も。スベシヤル十二を含めた奴等プラスマイナスの面子は大抵見えない。普通だと、例外は人吉善吉一人だけのようだが。

「さて球磨川。てめえはこの数を——」

「意味ないですよね」

「『意味ないですよね。』ふん、全くその通りだな」

『劣化大嘘憑き』マイナスオールフィクション。』

「使えねえ!」

「僕が一人ずつ倒すという無駄な時間を「なかったこと」にした』『さあて水俣ちゃん?』『僕は君の最後のひとつとしか対抗出来ないと最初から思ってたんだけど。』『騙す』能力、『合縁忌円』ホールブラックジョークを使ってくれないかな?』

「……………」

『どうしたんだい?』『合縁忌円』ホールブラックジョークで『騙し』てくれないのかい?』

水俣真美は焦る。

『僕は今僕と同等以上……いや、同等以下の君に会えて不幸しあわせだよ。まさか僕が少し螺子れた戦いをした程度で君が屈したりしないよね?』『めだかちゃんとはまたベクトルの違う君かもしれないんだ』『存分に楽しませておくれよ』

水俣真美は確信する。

球磨川禊は、彼女と同等以下などではない。格が違い過ぎる。核から違い過ぎる。球磨川禊の言う通り、彼女は複数の能力を持っているが故に中途半端なのだ。

『腐封』という異常アブノーマルの欠陥は、過負荷マイナス二つに侵食されて出来上がったもの。『能拘束』という過負荷マイナスの欠陥は、異常アブノーマル一つに関与されて出来上がったもの。『官能使い』は言うまでもない、自身が深く知りもしない何かを、独学で習得してしまったが故の欠陥。

『それとも』『腐封』『能拘束』『官能使い』とやらの異常アブノーマルだか何だかが一瞬で破られて傷心中かい?』『違うよね』『君はその程度で傷心しない』『だって』

僕以下なんだから。

「……………っ!」

重い。

その言葉が重い。

薄っぺらく聞こえるのに、素晴らしく重い。

出来る事も言われたら出来なくなるような緊張の劣化版の状態だろうか。出来ない事なのに言われてしまっただけする気すら失せてくる。彼女は、死にたくなってくる。

本当は思い通りならば『騙せ』た時点で水俣真美の勝ちだったはずなのだ。なのに何で球磨川禊はどこまでも水俣真美の価値を汚す。貶める。勝った気にさせない。勝てる気を起こさせない。何せ、過負荷マイナスなのだから。生粋で純粋に、完全な負完全どうしようもない。そのどうしようもなさは周囲すらも蝕んでいく。

『あまり考える時間は作らないでほしいな』『僕は明日も朝からお忙しい仕事が残ってるんだからさあ』『今日はもう帰ってぐっすり寝たいんだ』『ほら、時間だっってもうかなりだよ』

彼は時計塔を指差す。しかしそんなものを見る余裕は、今の水俣真美には無い。何せ、心を読めるわけでもない彼女は、心を読まれるわけがない彼がいつ攻撃してくるのかまるで分からないのだから。

『何だかつまらなくなりそうだね』『ちゃんとしてほしいな』『僕がぺらぺら喋ってるだけじゃ何も面白くないよ』『大体そもそも面白くないんだし、さつきと熱いバトルに入って』『出来る限り上手い事終わらそうぜ』

ふざけている。いつも通りの、平常運転。ここまでおちやらけた奴に誰が負けるのか、とむしろ水俣真美は自信を持つ。誰もが勝つだろうと。さつきまで悩んでた自分が馬鹿らしいと。例え勝っても、それが胸糞悪いものになり、虚しくなってきた人間が幾人も存在するとう前例を忘れて。

「OオオオウKエエエエエツいだろうっ！ 私に戯言を吐きまくった罰を与えてやろう！ 『合縁忌円』ホールブラックジョークで『騙し』てやんよおおおおおお!!」

「……あいつが吐くのは戯言じゃないと思うんだけどなあ」

『あいつが吐くのは戯言じゃないと思うんだけどなあ』。んなわけあるかよ。お前のソレはあくまで名乗ったもん勝ちみたいなどこあるんだからよ、球磨川禊が言ってたって何ら不思議じゃねえ」

「ま、それはその通りですけどね。ですけど、あいつには僕の思う戯言には程遠く口が足りませんよ」

『口が足りませんよ』って、それで上手くかけたつもりか。戯言にもならねえ、三点だぜ」

「五点満点ですかね」

「九百九十点満点に決まってるだろ」

「何でTOEICなんですか。三点とか逆に一問程度しか合わなかったって事じゃないですか、逆に凄いいことになってますよ」

「例のテストで一問しか解かなかったお前なら出来るだろ」

「英語は苦手です」

「お前に苦手じゃないものはないのか」

「ないでしょうね」

『やっと本気を出してくれるみたいだねえ』『先輩として僕は嬉しいよ』

「勝手に先輩面してんじゃねえよ！」

ホールブラックジョーク

『合縁忌円』の汎用性は尋常ではない。如何なる屁理屈も可能にする。何せ、現実を『騙す』のだから。無論、『大嘘憑き』オールフイクションと同じような使い方もできてしまうのだ。そしてその使い方は、球磨川禊もいっつかはすることとなる。そう、

「まずは最初から大技だ——」

対象の存在を、「虚構」なかつたことにする。彼女の場合、『騙す』わけだが。

『な——』

しかし、その技を受けた球磨川禊は消える。服も体も、命も何もかも——

真後ろから衣擦れの音。

「やっぱ無駄かよおおおおおおおおおおおおお！」

『僕がこの世からいなくなってもそれは結果的に『死』と同義だ——

マイナスオールフイクション

—ある条件を満たさなければ『劣化大嘘憑き』の効力として僕は死から戻ってくる』『無論』『僕は無かつたことを無かつたことにはできないいし』『ないものがあるようには出来ないからね』『君よりは使い勝手が悪いかもしれない』

無駄にスキルの解説をする球磨川禊。しかもそれで攻略の糸口が掴めたわけでもないというのが、これまた本当に厭らしい。と、言っても、彼がどこまで事細かに能力を説明しようと、攻略できるわけもないのだが。

そもそも、球磨川禊を完膚なきまでに負けさせたければ方法は一つ。そしてその方法は既に二度、実践されてしまっているわけで。

「まあ元々成功するとは思ってないね。何せ大技なだけであって切り札じゃない。最も、大技は全然大きくなかったようだが」

マイナスブックメーカー

『次は僕から攻めてみようか』『君は僕と同じだから『劣化却本作り』は打たなくていいんだっけ』『なら普通に殴る蹴るの対戦でもいいんだ

けど』『こんな小さな子を撲殺するというのは聊か僕でも気が引ける』
戯言だ。球磨川禊はそんなこと微塵も思っではない。思えない。
言葉に出してるだけだ」「絶対にいつか殴殺だが蹴殺だかしかけて
きやがる——」

『さあ、どうだろうねえ？』『僕は誰かさん曰く甘いから』『本当にそう
いう攻撃をしないかもしれない』

「!?」「思考が——読まれて!?」「いや、待て、何故」「私は、口に
だして——?」

『劣化大嘘憑き』『君の脳内での思考を出来「なかったこと」にした』
「——!」「んな屁理屈でも通るのかよ!」「ふっざけんじゃねえ
!」

『合縁忌円』は如何なる屁理屈も可能にすると先述したが、無論、
『大嘘憑き』及び『劣化大嘘憑き』がその使い方を出来ないとは言っ

ていない。それどころか、出来ないわけが無いと言っしまえるほど
なのだ。仮にも、一時的にはいえ、あの球磨川禊が同等と認められた相
手のみだから。

『僕はいつでも真面目だよ』『真面目にふざけてる』

『地面に螺子を突き刺して言いやがる——』「それでもフザケ過ぎ
なんだよ、最低があつ!」「ニヤリと笑う」「否、嗤う」「実に、気持ち
悪い」「本当に——」

「……なかなか特殊な使い方をしますねえ、球磨川くん」

「俺はどっちかつつと今の水俣真美の発言の方が気になるがな。ふ
ん、球磨川禊も晒ってやがる」

「確かにそうですねえ……最低でしたっけ?」

「実に気味が悪い。最悪と言っても差し支えは無いな」

「ま、これで決着は付きますかね——『騙し』と『虚構化』の闘い
は正直MPとかPPの削り合いに近いですから、六十時間くらい続い
ても不思議ではなかったんですがね」

『六十時間くらい続いても不思議ではなかったんですがね』。なんで
その時間なんだよ。いや、同意はするが。そこは流石お前の上っ面と

激似ってとこだな。素晴らしく常識破りだ」

「僕はあなたに近いと思うんですかねえ……人類最悪さん」

「それならあいつも最弱を名乗ってんだからお前の方が近いだろ人類最弱」

『あは。』

球磨川禊はその表情に実に似つかわしい笑いを一言、漏らす。

『最低、ねえ』

「な、なんだよ——何か文句でもあんのか!？」「お前はどうか考えても最低だろ!」「最悪でも何でも良い、それらの類だ!」「この私でもそう思うぜ、何が同等だ!」「私とこいつじゃあ全然違うじゃねえか!」

『……………』

「くそつ、思考が筒抜けなのは『合縁忌円』ホールブラックジョークを使うに当たって酷くりスクだ」

『ふうん』

「なら——」

しかし、それだけ身構えている水俣真美を無視し、球磨川禊は、

『白けた。』

飽きた。

「……………は?」

『いやさあ、僕と君は一緒じゃないんでしょ?』『僕の方が下なんですよ?』

「確かにてめえより下は存在しないとは思いますが」「だから何だっていうんだ?」「私はコイツに負けるしか——」

『君は過負荷マイナスじゃないよ……』『むしろ過負荷ニの恥晒アラしだ』『ま、異常アブノーマルを持つてる時点で予想はしてたけどね』『いくら生粋で僕みたいなスキルを持つてても、君だったんなら意味が無いや』

「何なんだよ……さっきは挑発しておいて、今度は失望かよ。それも作戦か? 大体私は過負荷マイナスのスキルを持つてる時点で過負荷マイナスだ——

——異常プラスなんざ関係ない」

『どつちにしろ君は過負荷失格だ』『理事長の目にも適わないね』『明日からここに来なくていいよ。いや、今から帰宅して今日から来なくても良いね』『あ、退学届とか要らないから。僕から理事長に直々に言っておくよ』

「何を、勝手に——！」

球磨川禊のそのやる気のない言動に、水俣真美の苛つきは増すばかり。しかし、苛ついているわけではないが、球磨川禊も水俣真美に關してどんどんと関心が薄れていつている。面白くない、つまらないのだ。

『僕は悪くない』『こればかりは限りなく君が悪いよ……』『よく今まで他の過負荷が見逃してたねえ……』

「ふざっけんな！ 私の何が悪いんだ！ 過負荷じゃなかったら何だってんだ！」「さつきから胸糞悪い——」「何が言いたいんだコイツは！」

『じゃあ一つ質問するけど』『今まで虐められてた事は？』

「ないね。あるわけない。今までの学校全部手中に収めてきたからなああああああ」

『……はあ……』

先程よりも更に明らかに落胆した様子で、溜息を一つ。

「溜息とは何なんだ」「質問に答えてやったつうのに……」「大体、何をもって過負荷とするんだか。皆目見当も付かねえな」

『じゃあ教えようか？』『試合放棄したのは僕だからさつきの勝負は既に僕の不戦敗でまた勝てなかったけど』『後輩に教えられるくらいは出来るよ』

「しらつと言う」「何が言いたいんだか全然分からないが」「……良いだろう、先輩らしく、教えてくれよ……切り札を使った私に教えられるんならなああああああああああああああああああああああ！」

『合縁忌円』——」

『……おやおや』『どこにいったんだか』

『合縁忌円』、現実を『騙す』というそのふざけた能力の真骨頂である。自分の姿を、誰にも認識されないようにする。認識されるとい

どういうことなのか。水俣真美は甚だ疑問符を浮かべる。何故私を忘れてるのか、おいふぎけるなよ、と。喋れもしない口を開いて、当たりもしない手を振って、足跡も付かない足を動かして。

「君はこれからどうするんだい？」

『僕は仮眠でもするよ』『流石に、眠い』

「君でも睡眠欲は一応あるんだね」

『昔「なかったこと」にしようとも思ったんだけどね』『流石に困るかなあって』

「寝るのも一種の快感だからなあ……僕も寝れなくなるのは御免かな」

「おい、何してる。置いてくぞ」

西東天は車のエンジンをかけながらそう言う。水俣真美は先程、叫んだつもりだったが、彼らにはその叫びは全く聞こえない。加えて、能力を使おうにも使えないし、素手での暴力に訴えかけても全く通らない。『能拘束^{リスキースキル}』よろしく、全てすり抜けてしまうのだ。

「はいはい、今行きますよ」

『今行きますよ』ね。何で俺がエンジンをかけれるのかは疑わないのな」

「子供のころから色々ありましてね、その程度の事じゃ驚かないんですよ」

ほのぼののしやがって、というのがそんな状態に陥った水俣真美の率直な感想だ。

「そういえば球磨川くんは誰と戦ってたんだい？ 僕には終始分からなかったんだけど」

『やあ……』

いーちゃんも、忘れてる。分からない。何故か？ そして西東天も、先程の戦いに関しては大抵を忘れてる。何か、戦っていて球磨川禊が途中で飽きて、色々としていたのだという事実は確認しているが、ふわふわとしていて現実的に感じていない。

「俺はそれより最後何したのか気になるけどな」

『何をしたらって……』

無論、『劣化大嘘憑き』マイナスオールフィクションを使ったことに変わりは無い。が、水俣真

美の意識はそこにあるし、死んだわけではない。ならば、どのような事柄を「なかったこと」にしたのか？

『確か後輩へのお仕置き……だったんで』『過負荷マイナスみたいない扱いを受けさせるために急遽考えたんですが』

球磨川禊は実は咄嗟の思い付きで試したのだが、その「なかったこと」にされた弊害はとんでもなく抜群だ。何せ、

『誰かの存在感を記録から何から、「なかったこと」にしました。』
のだから。

「ふうん……なるほどな。それで誰かは皆から無視されて、いくら叫んでも気付かれない……」

『過負荷マイナスとやらの生涯を送るには最適な処置をしたということなんだね……』

言うならば、世界記憶、と言ったところか。やらかしたことがことなだけに痕跡は残っているが、それをしたのが誰かは分からないし、例え恨んでいても恨んでいる対象が分からなくなる。目的のための手段なのに、目的が消えてしまったのだ。

そして、そんな存在が世界に干渉することは勿論不可能。世界自体が忘れてしまっているのだから、何に関与しようとも忘れられてしまつて、逐一「なかったこと」にされ続けるのだ。そのため、水俣真美は、これから一生、誰にも。

「なかったこと」になり続ける。

『ま、そういうことですよ』『それではばいばい、戯言卿』

「またどこかで縁が《合わ》ないことを祈つとくよ、嘘吐伯楽」

『あ、昨日喜界島さんに呼ばれてたの忘れてた』

ブリスフルーザー 虚ろな大嘘への楔 過負荷

『おや』『こんな時間にどうしたんだい？』

『この話は僕が語ることはないし』『そもそもこうやって括弧付けて話している僕が話せることじゃない』

「だから何だって話だけどさ」

『ま』『本音で話したくても僕は僕の操縦すら思い通りになつてくんないのが僕らしいんだけど』『でもそろそろどうにかしてほしいよねえ』『色々と卒業してから何年経ってんだって話だし。いや、案外一日も経ってないかも？』

『そもそもこれだつて本当に僕が語っているのか怪しいもんだ』『だつて僕のそれからの足跡は』『まるで僕みたい』『なかつたこと』『』になつていゝるんじゃないのかい？』

『君が知る僕の情報はそのはずだ』『であれば』『今から語られる話は僕の記録じゃない』『誰かの記録だ』

「でも、僕は誰の思い通りにもなる気はなかつたはずなんだけどなあ』『何せ僕だぜ？』

「もしかして、僕を記録したくないだなんて思い過ぎて、それが逆説的に僕を記録しちやつたのかな？ だとしたらかなり大失敗をしてしまったことになる」

『いやはや』『人生』『難しいもんだ』

『何をやっても上手くいかないのは変わらないや』『何か決心しても変わらない』『でも何故か、上手くいかないにも幅がある』『限度つてやつかな』

『周りは固められているけど、その中でなら自由に動いてしまうような』『ちよつとだけなら思い通りにはなつてくれるような』『でも大雑把にはどうにもならない』『そんな感じ』

「まるで水槽みたいだ」

『まるで箱庭みたいだ』

「でもどちらにせよ、僕は強制的に被动させられているような気がするよ」

『神様の意志って奴かね』『神様なんて信じてないけど』『サンタさんだとか、そういうまやかしを信じるのは小学生で卒業したぜ』『ジャンプはまだまだ卒業しないけど』

『だって良いじゃないか、ジャンプ』『皆の理想の仮想が詰め込まれてるんだぜ?』『卒業する理由が無いね』

「良い非現実とも言う。友情・努力・勝利、そのどれもが美しい。僕だってその美しさに塗れてみたいもんだった」

『美しいかどうかを除けば案外』『いやどうだろう』『わっかんねえや』『その辺りの判断は君に任せるよ』『ああ、判断したという記憶も「なかったこと」になつてしまふかもしれないけど』

『それとも何かな?』『君は忘れて僕は覚えているっていうのが不満かい?』『そうだね』『僕も出来れば僕がもっと不味い立ち位置でいたいところだよ』

『その位置にいるからこそ僕だしね』

「でも、いない時はない。そういう場合は、仕方ないじゃない? 僕にどうにか出来るわけでもないし、折角の有利な状況、楽しんでみたらいっせや」

『つつても』『すぐさま終わつてくれるならそれはそれで』『良いんだけど』

『終わつてくれるかどうか分からないけどね?』

「勝つても負けても勝負が終わつても試合が終わつても、こういう単純な関わり合いは終われるもんじゃないのさ。僕は昔、いや昨日かな。明日かもしれない。そんなことを誰かにマイク越しに教えられたからね」

『誰かが誰かつて?』『それを教えたなら誰かじゃないじゃないか』『ぼかすからこそ括弧良いんだろう?』『ううのは?』

「一つ言っておくなら、純粋に好きな子さ」

『思いつきり傷付けた覚えしかないけど』

「元々僕は惚れっぽいからね。そうやって純粋に好きな子、一体何人

いるんだって話だよ。初恋は不動だけどき」

『それでも』『やつぱり』『惚れっばいことに変わりはないんだよねえ』『その子には花束みたいなもの贈ったりもしたけど』『全くガラじゃなかったなって今では思うよ』

「後悔はしてないとも。当然だ」

『だって』『僕がその時に抱いた気持ちは』『紛れも、なく』

「ノンフィクション』だったからね」

『にしても僕がノンフィクションを謳うとか』『片腹痛いにも程がある冗談だなあと僕でも思うよ』『何せ僕は元々大嘘憑きだったんだぜ?』『オールフィクション、出る言葉返す言葉何でもかんでも全部嘘』『嘘で塗り固められたとかそんな甘いもんじゃあない』『それはもう真っ赤な真っ赤な嘘に嘘を重ねた二枚舌から出る絵空事を話半分に万八千三つ法螺を吹くようなもんだったさ』

『エイプリルフルにしたって酷過ぎる嘘の吐き方だったね』『今でもそんな感じだ』『元々って言っちゃったけど、案外今も嘘に憑かかれている気がするよ』

『ああでも』『今じゃあ僕はかなーり』『ちよっぴり』『幸せになっちゃってる節があるから』『その憑かれている嘘も段々と劣化していつているのかもね』

『だったら安心だ』『何が安心か、なんて言われても答えられないけど』『少なくとも、もしかしたら会うかもしれない君は安心なんじゃないかな?』

『例えどれだけ幸せになったって僕は僕だからね』『それとも、君は僕と会っても普通なままかい?』『この球磨川禊はその昔、プラスマイナスゼロになることすら許されなかった身だぜ』

『それにもし君がどちらでもないだったならば』『僕に会うと過負荷に偏っちゃうよ』『それでも大丈夫だなんて言う人がいるとは思わないけど』

『その場合』『僕と縁が《合》っても大丈夫なんだからもしかすれば』『虚数だなんていう、面白い解答をしてくれる人なのかもね』

『だがそれは違う』『安心院さんですら見つけきれなかった種別の人間』

が今更いるだなんて』『フィクションにも程があるさ』

『僕といって大丈夫だなんて夢物語』『理想郷でも夢見てるのかな?』『それくらい、僕は折り紙付きの筋金入りで過^{マイナス}負荷なのさ』『どうしても』『それに、そんな理想郷を築くための歯車が足りなさ過ぎるよ。世界は一人一人が螺^{パール}子なのさ。だったらもつと、規定の規格の螺^{人達}子を用意^{集め}しないとね』

『それにそんな思想』『頭の螺子が外れた人しか浮かばないよ』『実現できなくともない』『どこかの誰かの説得に窘められて』『螺子伏せられて』『終わりさ』

『それに僕はそういう負^{取り返しの付かないスキル}完全な螺子は捨てたんだ』『僕という過^{マイナス}負荷から螺子という能力は無くなった』『だからって僕は』『プラスじゃないんだね』

『僕の貯め込んだ大切な大切は、あの子に贈つといたから。』

『だからといって勿論何も持^せってないわけじゃないぜ?』『それは僕の役割じゃない』『そういう役割の人はいなくなつたんだ』『強いて言うなら』『皆幸福^{プラス}だ』

『だったら僕は何かって?』『ま』『ゼロでもない、何でもない何か』『つとどこかな』

『虚無^ノだとかだと、恰好良いよね』

『それでもやっぱり』『安心院さんやめだかちやんとか』『多分善吉ちゃんも』『もがなちゃんも』『須木奈佐木さんも』『笑い飛ばしてこう言うんだろうなあ』

『何言ってるんだ。お前は紛れもなく良い奴^{マイナス}だよ』『って』

『善吉ちゃんなんかは強く否定してくるだろうなあ』『安心院さんとかは軽口叩いてくる程度かもしれない』『そう考えると』『僕はやっぱり恵^{アラ}まれてるかも』

『温かい話だぜ、全く。君たちの方が充分に良い奴^{プラス}だつて言うんだ』

『こんなどうしようもないマイナスを、プラスにまでしてしまうほどの大きなプラス』『とんでもない奴等だよ』『嘘を憑いて接していた僕が馬鹿らしいくらいだぞ』

『ならもつと』『本音で接しておけば』『良かったかな』

「今更後悔しても、何にもならないけど」

『それに時間は有限とは言え無限に近い』『その埋め合わせはいくらでもやってられるさ』『前提として僕は嘘が嫌いなんだ』『僕は僕を許してない』

「僕が、悪いんだから」

『でも僕は悪くない』『僕は甘ちゃんだからね』『例え僕が悪くても僕が悪くないよう、都合よく解釈しちゃって』『責任転嫁しちゃうんだ』

『君達だつて似たようなことをしたことが無いかい?』『我が身が可愛くて、つい』『誰かをちよつとだけ貶してしまつたり』『自己弁護する際に在りもしないでつちあげをしたり』『主観的な意見で、相手の感情を聞く気が無かつたり』『さ』

『心なしか、そんな不条理を相手に突き付けてしまつたことつて』『ないかな?』『僕はあるよ』『勿論ある』『そういう理不尽を表に出すし』『嘘泣きなんてザラさ』『言い訳とかも皆すーぐしちゃうだろう?』『いかがわしいことだつて何度したことか』『インチキだつて罵つたことも数えられないくらいだ。むしろ僕がインチキしていたのにな』

『そうやって墮落するのさ』『自分が可愛いからついつい墮落しちゃうのさ』

『ほら、今君がいるであろう社会の混雑の中でもそんな墮落の結果』『本当の善意じゃない偽善で正義ぶつてる人もいれば』『本当の悪意じゃない偽悪で不良ぶつてる人もいる』『おかしな話さ』

『不幸せそうだよね』『不幸せそうだ』『自分の不都合に合わせて他人を冤罪にしたりするし』『その流れ弾で誰かが見苦しくみつともなく、他の誰かに対して風評被害を撒き散らして密告するやもしれない』

『大体そういうのは嫉妬が原因さ』『あいつは皆が可愛がつてくれるのに、自分は自分しか自分を可愛がつてくれないだなんて格差社会だ』『なんてね』

『結論』『人は自分しか信じなくて』『知人なんか裏切るし』『子供なんか虐待するし』『他人なんか巻き添えにするし』『例え誰に二次被害が起きようとも関係無しに生きるのさ』『そうやって生きなきゃ』『やつ

てられないのさ』

「でもやっぱり、心の中では自分が悪いことを分かってしまっているから、やってられないんだよね」

『その羨望は恋人みたいに愛しいけれど』『ね』

『そう考えると世の中って』『案外単純だよね』『善悪とかさ』『良悪とかさ』『そういうの』

『でも人生はそれだけじゃない』『善人だからって人生勝ち組じゃないし』『悪人だからって人生負け組じゃない』

『勝ち馬が全員良い人かって言われたらそうでもないし』『負け犬が全員悪い人かって言われたらそうでもない』

『そりゃ勿論』『大抵の人は』『悪いよりは良く在りたいだろうし』『負けるよりは勝ちたいんだろうけど』

『善は善マイナスかもしれないし悪は悪プラスかもしれないし勝ちマイナスは勝ちプラスかもしれないし負けプラスは負けプラスかもしれない』『そうとは限らないよって話だね』

『だって悪いってことは何かをしたってことだ』『だって負けたってことは戦ったってことだ』

『悪があるから善があるし』『負けがあるから勝ちがある』『悪平等だなんてメジヤない平等さだねえ』

「ま、これ全部受け売りなんだけども」

『本当』『こーんな言葉に絆されちゃうだなんて僕も甘々だね』『週刊少年ジャンプに定期的に連載されるラブコメディ並に甘い』『口から砂糖が吐けるくらいの甘さだ』

『でも僕はそんな恋愛漫画の端役でもなければ主役でもない』

『僕は僕の物語の主役さ』『当然だろう？』『君だって君という人生の物語の主役なはずだ』『ああ、僕は主役だし君も主役だとも』

『僕としては、今更気付いたのかい？』『といたところだけどね』

『友達がいなくなつて努力してなくなつて勝てなくなつて』『僕は主役だったのさ』『主役を張っていたのさ』『驚きだよね』『アレだけの啖呵を切つたのに、安心院さんに申し訳ないや』

「ま、それはそれとしてファーストキスを奪われて奪つたんだから不本意ではないけれど？」

『マイナスだとかプラスだとかゼロだとか所詮は下らない話だったってこと』『そこはあの頃の安心院さんの思考の中でも共感できることの内の一つだったなあ』『でも、それが全て等しいわけではなかった』『マイナスでもプラスでも』『ゼロかイチかで変わるのさ』『ゼロの先はどんな欠陥が起きようともどれだけ失格しようとも何らかのイチが待っている』『等しくなんかないんだよ』

「不平等という平等。矛盾してるようだけど、これもまた世界の真髓な気がするぜ」

『今からでも安心院さんに教えてあげたいくらいだ』

『でも案外あの人のことだしな』『もう既に辿り着いちゃってるかもしれない』『ちつくしよー』『あの人に先んじて真相をしってその情報をひけらかすの』『やってみたかったんだけどなあ』

『ひいこらひいこら僕を崇めて』『傳いてくれるんだぜ?』『全裸パーカー……』『いや、ここは敢えて今までの全てを合わせて裸パーカージーンズエプロン……?』『裸要素が消えたっ!』『なんてことだ!』

『いやそれは置いて』『僕の趣味に合った姿で僕を崇拝する安心院さんとか』『拝んでみたいもんだったぜ』『本人にいったらそれこそ容赦なく』『一京』『二八五八兆』『五一九億』『六七六三万』『三八六五個のスキル全部ぶち込まれちゃいそうだけどね』

『全部が全部攻撃系じゃないとはいえ』『しようもないスキルでも攻撃に転化しちゃうところがあるからね』『恐ろしや恐ろしや』

「恐ろしいと言え、一昔。僕が記憶に無い誰かに京都だったかどこだかに飛ばされた時も、恐ろしく怖い人がいたもんだったね。あの、赤色の」

『その隣にいた無色の人も記憶に何となく残っているよ』『まともに何の制約も無しに殴り合ったら圧倒的に僕が負けるであろう自称最弱さん』『彼はこれまた見たことのない欠陥製品だったなあ』『ヘラヘラしない過負荷マイナスっていうか』

『そうだね』『名付けるなら』『否現実ネゲイションかな?』 いや、もうちよつと良い感じのものがあそうな……』『ま、いいか』『何にせよ彼からは』

「なるようにならない最悪、といった印象を抱いたよ」

『思い通りになるわけがない僕と似たり寄ったりだ』『でも、どこかが違うんだよね』『もしかして彼は裸エプロンや裸ジーンズは嫌いなのかもかもしれない』『だとしたらソリが合わないのも納得だね』『裸レインコートとか好きそうな人だと思ってたのに』『酷い話だぜ』

『でも盗み聞きした限りでは』『彼らの中での「最悪」って、あの死に装束の人らしいんだよね』『もう、一度として会いたくないあの人』『驕るつもりじゃないけど僕どころか彼にまでそう思わせるって』『相当なものだよねえ』

「同族嫌悪と言われれば、それまでな気もするけどね。どっちの人もなんだか周りをめちやくちやに掻き乱しそうな雰囲気をしてたでしよ」

『何もしなくても状況が悪化する』『みたいな』

『え?』『僕もそうだろうって?』『嫌だなあ、僕は自ら引っ掻き回してるだけでいるだけで迷惑だとかそんなそんな!』『……え?』『マジ?』『存在が迷惑?』『マジかあ……………』

『あの人達とそんなとこまで一緒だとか思いたくないんだけど』『いやでもまさか』『嘘だよねえ?』『嘘は嫌いだよ?』『いくらなんでも僕がいるだけで迷惑だなんて有り得ないよ』『むしろめだかちゃんの方が余裕で周りを巻き込むよ』

『僕のはそんなパッシブスキルじゃない』『断言するよ』『信じて信じて』

「自分から率先して掻き回していたっていうのも何のフォローにもならない自己卑下な気はする。でも、流石にいるだけでそんなことになるだとか、ないと思うよ?」

『というかそういう質問は求めてないって』『とにもかくにも彼らの話だ』『いや、目が死んでいた彼の話だ』『痛み慣れているようだったし案外マゾヒストなのかもしれない彼の話さ』

『僕について君が』『ある程度まで知っていきそうだからここまで長々と六〇〇〇文字くらいで話させてもらったわけだけど』『勿論、僕は色んなところにいたからね』『端的に言えば、あの辺りにも寄ったんだよ』

『そしたら何と奇遇も奇遇の奇跡偶然あらびつくり』『つてな寸法でさ』

『いやあ、まさか「なかったこと」にした本人じゃない人と遭遇するとは思っていなかったんだよね』『何せ』『何回か言ったように僕のあれからの足跡は「なかったこと」にされたかのように雲隠れしているはずだし?』

『だったら今話しているお前は何だなんていう言葉はエヌジーだぜ』『ほら』『あの死に装束の人も言っていただろう?』『物語を進めるためさ』『これは安心院さんと似たところがあるけれど』『重要なことだ』『それでどんな話をしたのかって?』『おいおい焦るなよ』『それを今から話すんだからさ』

『と、言っても僕から話したんじゃ味気ない』『僕は一応「なかったこと」になりかけている人間そのものだ』『それに』『嘘か本音が分からない僕の言葉で語り部なんて』『読んでられないぜ?』『今僕が話していた内容だつて、きつとどこかで八割方無視して読んでくれだなんて注意書きがあるレベルだよ』

「さてそれじゃあそろそろ本題だ」

『本題というか、これこそ注意書きかな』『この物語はフィクションです、つてやつ』『安心院さんの言うなら、現実から切り離して読んでね』『つてところかな』『じゃあ改めて、注意書きを』『いや』『注意言いを』

「——これは混沌どとうよりも這うもなく

「本当に負ひ完全じょうぜんに」

「『大嘘憑おほいつしやうき』ではなく」

「『劣化大嘘憑りやうかおほいつしやうき』でもなく」

「『安心大嘘憑あんしんおほいつしやうき』でもなく」

「『虚数大嘘憑こすうおほいつしやうき』だ」

欠陥製品

十二月。街はいよいよ冬本場、イルミネーションで着飾った建物達の間隙から意気揚々と定番のクリスマスソングが流れていく日々。おかげで冬至を越えて夜が長い季節だというのに、視界は一向に暗くなくネオンばかりの明るさにぼくは目がやられてしまいそうだった。流れていくクリスマスソングを聴きながら、そのクリスマスもあと一日、つまりは今日はクリスマス・イヴなのだと思いに耽る。今は一つまた請負が終わって、その帰宅途中。今回はまさかの九州まで飛ばされて人を一体何だと思っているんだとしか言いようのない事態に陥ったが、特に何も異変は起きず、何とかぼくは京都の城咲に帰ってきたわけだ。

ぼくが一年を通じて色々あったあの年から、もう既に一年以上経過している計算になるものの、未だこの新しい元骨董アパートを見る度にその色々を思い出す。《満を持しての教習所の普通車卒業検定、ただし大地震による活断層バリバリ》みたいな感じの一年だった。

そういえば、あのよく分からないことが起きたのもこの月だったか。あの時も確か九州だかその辺にまで車を飛ばすことを強要されて、日が変わったくらいで向こうに着いて。で、そこからまた眠い中で車を飛ばすという危険走行をして戻ってきた覚えがある。

「狐さんともしばらく会ってないな……まあ、あの人はそれで良いんだけど」

会ったら会ったで相変わらず碌でもないことになるに決まっている。今日、そして明日から明後日にかけての三日間、あの人のような人物に会ってしっちゃんかめっちゃかにされることだけは勘弁だ。ぼくはもう今年も友と一緒に平穏に過ごすのである。

とか。

そんなフラグを立てたのが、大間違いだった。

「何であいつがここにいるんだよ……」

そのよく分からないことの発端、虚言使い。いつしかの黒い制服は着ていないが、髪型も髪色も身長も体型もそのままうえ、あの雰囲気

気は明らかにソレだ。間違えるわけもない。間違えようがない。どうやら、何かを探しているらしいが、これまた狐さんと同じで碌でもない予感しかない。

球磨川禊。

箱庭学園、だったか——財力その他が玖渚機関に匹敵しかねないと折り紙付きの変人奇人びつくり箱高校に在籍している、頭の螺子が外れた特級ヤバイ人物。いや、制服を着ていないということは卒業したのだろうか。彼がそんな年齢であったことがかなり驚きだが……ぼくが言えたことでもない気がする。

しかしあれは、声をかけた方がよいのだろうか。そうだろうな、一日いただけの男だけどあれだけの印象を植え付けてくれたヤバイ奴だもんな、挨拶くらいも絶対にしなほくはすぐさま帰って友と甘い一時を過ごすともう心に決めたのだ帰ろう無視だ無視。

「ま、それを見越して僕から話しかけるのが僕なんだけどね？」

一度ぎゆうと目を瞑り、さあ帰るぞと目を開けて一步踏み出そうとすると、彼は目の前にまで来ていた。一年前は、僕よりも十センチほど高かった彼の身長だが、どうもぼくが若干ばかり伸びたのか思ったよりも首を上へげなくて済む。それでも、ぼくの方が小さいのだが。相変わらず身長が小さいのはコンプレックスになりそうである。

それにしても。

「……喋り方、変わったんだね。括弧付けなくなったのかい」

「もう括弧付ける意味が無いからね」『それとも何かな』「いーちゃんはこっちの方が接しやすいかな？」

変化した部分を指摘すると、そんな風にすぐさま再現してくる。

「言葉使いとしては確かにそこそこ好感の持てる遊びではあったけどね……別に良いよ。それで？ 何しに京都くんだりまで来たんだい？」

帰路の途中であったため、そのままぼくは歩き出す。と、話しながらでもあったため球磨川禊はきちんとぼくに付いてきてくれる。正直、友にこいつを見せるのは駄目な予感しかしないため、付いてきてくれなくても良いのだが。

むしろ、遠くから眺めた時は然程前と変わらないんじゃないかと思っ
ていたがこうやって直接話しているとどうも彼は彼でかなりの転換
点を経ているようだ。雰囲気も、よくよく考えると随分と薄れてし
まっている。

「僕の過負荷マイナス、『大嘘憑き』オールフィクションは覚えてるよね？」

「覚えてるよ。『劣化大嘘憑き』マイナスオールフィクションだとか、『却本作り』ブックメーカーだとか、色々持っ
ていたね。確か、「現実」すべてを「虚構」なかったことにする能力だったっけ？」

馬鹿げたスキルだ、文字通り戯言だと思いつつながら観ていた。受けた
傷を、誰が対象であろうと因果律を巻き戻して再生。それ以外にもあ
の時宮の操想術を「なかったこと」にしたり、どこの誰だか覚えてい
ないが思考で「なかったこと」にしたりしていた、アレだ。

『却本作り』ブックメーカーは封印系統のスキルだったか。球磨川禊という一個体
と、何から何までのステータスを同一にするというこれまたふざけた
もの。最弱だ最弱だと言っている彼だからこそそのスキルの真価が
発揮できるわけだが、どうだろう。それはあくまで彼が本当に弱い場
合のみの話だ。

現に、潤さんは抜け出していたし、球磨川くんの話では他にも抜け
出したことのある人がいるらしい口ぶりだった。となると、その弱点
は彼も認知しているところなのだろうとも。今更ぼくが注意するこ
とでもなさそうさ。

尚、そのスキルの加減で痛みは無いらしいとは言え友に螺子込み螺
子伏せたことに関しては許していない。結構根に持つ方だぞ、ぼく
は。

「ん？ 何か言いたげな目だね、喧嘩でも売ってる？ 僕、売られた喧
嘩は買うけど抵抗せずに気が済むまで殴られた後にその辺の關係な
い一般市民に八つ当たりして気を晴らす派だよ」

「括弧付けてなくてそれなのか……気のせいだよ。僕だって売られた
喧嘩は色々税を付けた上で転売する派だ。そういう世間話は捨て置
いて、その取り返しの付かないスキルがどうしたんだい？」

益体のない応酬を止め、さっさと本題に入る。

「いやいやそれがねえ、なんと。取返しなっの付くスキルちやっに改造なっされてさ。

『ノンフィクション虚数大嘘憑き』って言うんだけど。「なかつたことにした」ことさえも「なかつたこと」にできる、っていう」

はつきり言つて、驚いた。まさか、取り返しが付くようになっているとは。元から彼のそのスキルの扱い方は随分と取り返しが付かなくなつても良いような使い方ばかりだったが、今までに「なかつたこと」にしたことさえも「なかつたこと」に出来るようになるとは。

不可逆が設定変更で後からも可逆にアップデートされるなど、ゲームの世界でも早々あるまい。大抵、今までしてきたことの取り返しは付かないものだ。それも過去、何年と経っているか分からないものなど。

「いや、ついで取返しにすら憑かれるようになった、ってところか」

「ええ……そんなに背後霊多いの嫌だなあ。美少女なら良いけど。ああでも、こんな日に美少女に日がな一日べったりくっ憑かれてるってバレたらそれこそ何かに憑かれちゃうかな？」

括弧付けなくなつた、という割には然程調子が変わっていないように思える。彼の場合、ぼくと違って自分を偽っていたりしたわけではないのだから、括弧付けるも付けなくても言うほど変わらないのは仕方ないのだろうか。いや、僕も自分を偽つた覚えは無いけれど。

戯言だ。

「僕も僕だけど、そういえばいちちゃんもこんな日に何してるんだい？ 君は彼女とロリ奴隷がいただろう？」

「段々と健全な美少女奴隷になつていよ。じゃなくて」

危ない、うっかりとんでもないことを言つてしまった気がする。

「ぼくはこれから帰るところだよ。彼女のところじゃないけど」

「あれ、クリスマスだつてのに彼女といちやいちやちゅっちゅしないのかい？ 十年來くらいに互いのことを思いやっているようなそれはもう素晴らしい関係性だと思つてたんだけどなあ」

球磨川くんが見た友は一瞬だったはずだが。それも、すぐさま螺子伏せていた覚えがある。聞いた台詞も一つや二つだろう、よくもまあその程度しか聞いていなくてそこまで抜け抜けと語れるものである。流石は虚言使い。

「それとももしかして君達はただ単に彼氏彼女なだけで実は良い友の延長線上だったりした？ それならきちんと否定してほしかったよ」
「肯定した覚えは無い。そもそもとしてその時に肯定できないよ、彼女じゃなくなったし」

「あれえ？ 僕としたことが相手の関係を見間違うとは……詰めが甘くなつたかなあ」

「プロポーズしてたし」

「そっち!？」

あちやー、既にその段階越えてたかあ、と額に手を当てて嬉しそうに、自分に呆れる球磨川禊。嬉しそうに？ それは答えを外した自分ではなく、どうもプロポーズしていたぼくに対して、のようだ。

彼は人の幸せを妬み、不幸を愛する人間だと思っていたけれど、それもどうやらこの一年で随分と変化したらしい。取り返しが憑くようになったことといい、括弧付けなくなったことといい、一年前の彼と同じ人間だと思わなくらいが丁度良いのかもしれない。

「じゃあそっか、おめでとうだね。素直に祝わせていただくよ」

「ああ、こちらも素直にその祝福を受け取っておくよ」

「それにしてもあの子の苗字がいーちゃんに合わせられることになるのかな？ となると、呼ばれ間違いが発生しそうじゃない？ それとも違う方の名前で呼ぶのかな？」

今度は顎に手を当て、如何にも考えてますよと言った動き。既にそのはったりに近い、見抜いているかのような言葉群は間違いだったという現実が見えていたはずなのに、もうそれは虚構になっているみたいだ。前言撤回、やはりこの男、変わっていない。

「その辺りの話はこういうところするもんじゃないよ、やめてくれ」

「じゃあ別の話にしようか。クリスマス・イヴだったのに帰る時間遅過ぎない？ 大学生だったっけ。少なくとも学校帰りには見えないぜ」

「突っ込んでくるなあ……その通りだけど。大学はもう中退したよ、今はもう別のことを始めてる」

というか、高校を卒業したのならば球磨川くんも大学生だと思うの

だが。いや、今こうやってこんな場所で油を売っていることを見ると、どう考えても大学には通っていない。そもそも帰宅の電車賃が無いくらいに懐が寂しい男だ、進学したくでもできないくらいではなからうか。

「へえ。請負人とか?」

「何で知ってんだ本当」

そう。潤さんにはまだ話してないが、ちまちまとそういうことをこなしていつている。まだまだ初心者だし、半人前とすら言えないけど、何とか今のところ食ってはいけているので問題は無いだろう。

「人類最強の請負人に憧れて人類最弱の戯言遣いが人類最弱の請負人にジョブチェンジか、戯言だね」

「そうやって人の痛いところをちくちくというかずけずけと螺子込んてくる球磨川くんは、虚言だよ」

割と気にしているところなのに。何とかやれているとはいってもやはり、あの人の万能さ加減には及ばない。ある程度までいけたなら、あの人に話して色々協力し合うというのも夢だけど……いや、世話焼きなあの人のことだ、既に知っていてそのうち僕に生死ギリギリでクリアできる請負を取ってきて投げ付けてきそうな気がする。

前に球磨川くんを送った時も、請け負うんだぜだの何だの、そういうことを把握しているかのような物言だったし。確かに先んじてライバルになると言ってしまったぼくが悪いが請負人になることまで把握されているとは思わなんだ。

「でもそれなら結構良い偶然だね」

ふと、気分でも変えたのか、という風に彼はそう言う。本当に良い偶然だと思っっているというか、それこそ、丁度良い、というか。前の彼ならばぶった切って本題と虚言をませこぜにしてくるところだろうに。

根底が変わってないだけで、本当に外面の表面のそういうところは変わっているみたいだ。根底が変わってないだけで。その根底が結構な問題点だったりするのだけれど。

「今その『虚数大嘘憑き』で今まで迷惑「なかつたこと」にしたをかけた人達「こと」を水「なかつたこと」に流「し」してもらっているんだけどさ。今のところ全員断られちゃってるけど」

そんな全国ツアーをしていたのか、彼は。しかし、移動賃すらない彼だ、迷惑をかけたと言っても範囲は知れているだろうし人数も知れている。そうなる今頃京都という、九州から考えれば日本を半分も進んでいない場所で燻「ぶ」ぶ「つ」っているのは少しおかしい。

「一年も経ってるんだからもう終わってそうなものだけど」

「時宮、だっけ？ あの人達が見つからなくてね。あと、君も知っているであろう、よく分からない誰かも、ね」

「ここが最後ののか」

「そういうこと」

ならば納得である。にしても、彼は確か闇口とも会っていたはずだが、そこには『大嘘憑き』とやらは使わなかった、ということなのか。さしずめ小唄さんが盛大に、否、十全にやってくれたのだろう。

にしても、そうであれば確かに良い偶然だ。あれから一年経って、あれの始末を付けに来たところにぼくが遭遇する。変な偶然とも言う。が、そうなると下手をすれば潤さんも、それどころか狐さんも現れそうでも帰って欲しいというのも本音。

「そして偶然にもぼくが請負人を始めたから時宮……えつと、刻弥「きぎみ」さんと指針「ししん」さんを探して欲しいと」

「と、誰か、ね」

「それは難しいぞ……その誰かの何から何までの記録を「なかつたこと」にした君が悪い。誰か分からないと流石に探せないよ。それにまず、その誰かに謝ろうにも「なかつたこと」にしたことを「なかつたこと」にしてからじゃないといけなくなるじゃないか」

その誰か、男か女か大人か子供かすらもう分かりはしないが、その誰かとコンタクトを取るにはまずそこから始まる。コンタクトを取る頃には、彼の『虚数大嘘憑き』はもう発動してしまっているのだ。今のところ一度として使っていない、そのスキルを。

「いつそそれが出来たら楽なだけだねえ。誰かが誰なのか分からない」

いせいでスキルの使いようがなくてさ。ま、その誰かは二の次で良いから、時宮さん達は任せるよ」

「……………今からかい？」

「来年の三月までかな、いや、年末までかな。あと三人だけなわけだし、誰かを抜いてもあと二人だ。それだけの数ならもうすぐにも見つけにいきたいくらいだからね」

今からじゃなくても良いというのは安心した。何せぼくは今も足を動かして、あの元骨董アパートへと帰ろうとしているのだから。球磨川くんが付いてこようと関係ない、とにかく帰宅することが重要なのだ。

「それにそりゃあ愛してる人とのらぶらぶを邪魔するつもりなんてないよ」

「その心がけは有難いけどそれならそれで付いてくるのをやめるわけじゃあないんだね」

「何となく気になるから」

変わっていない根底はそこもか。邪魔をするつもりはないというのだから一目見れば帰るのだろうか、それほどにまで気になるものか。というか、帰るってどこに帰るんだ？

「野宿かい、君」

「どうだろうねえ、少なくとも今夜はちよつと出歩くつもりだけど。僕にとってもクリスマス周辺って言うのは、そこそこ、思い入れの深い日だからね。間違っても誰かと過ごしたい日じゃないのさ」

クリスマスなのに、誰かと過ごしたいわけではないのか。もしかすれば、彼は彼で何かしら、恋愛で大きなことがあったのかもしれない。彼女を取られたのだろうか？ いや、彼に限って彼女がいたとは正直思えない。片想いの相手が、存分に幸せになったところを目撃したとか？ それともその人の分岐点だったのか。

ぼくよりも確実に深い理由がありそうだ。だからと言ってここでぼくが「そんなに大事な日なのかい？」とでも聞いた途端、「財布を落とした日だからね」という風なしような虚言が帰ってきてぼくが「どうでもいいよ」と叫んで終わり。そういう戯言みたいな男なのだ。

「正直本音を言うと君が友と会うことを許容したくないんだが」

「まあ友ちゃんも絶対に僕に会いたくないだろうね」

「馴れ馴れしく呼ぶなぶつ殺すぞ」

「おーこわいこわい。どっちにせよ僕は玖渚さん……いや待って、どっちにしろ君と被るんだから下の名前呼びしないとどうしようもないよね？」

「本当だ!」

迂闊だった。これは迂闊過ぎた。そうだ、苗字を合わせるのだから友は誰からも友と呼ばれてしまう。畜生、これは考えていなかったぞ、畏過ぎる。まさか合法的に呼ばれたくない奴等から呼ばれるしかない状況に自ら陥らせてしまうとは、ぼくは馬鹿か？

「じゃあ奥さんで」

「それはそれで恥ずかしいからやめてくれ」

元骨董アパルトへと、踏み込んだところでそう言っておく。全く、何が好きでこのような男を友にまた会わせなければいけないのか。多少はその過負荷マイナス具合が薄れているようだが、根底は変わっていないのだからご察しだ。

「でも今夜と明日の夜は俗に言う甘い夜を過ごすんだろう？ なら間違っていないと思うんだけど。それとも何、何もしないの？ ナニも？」

「そういう意味深な言葉をぼくに投げかけるのもやめてくれよ、ぼくはそこまでメンタルの強い人間じゃないんだ」

「逐一注文が多い人だねえ。一概に人の物になつてないとしても？ 喜びなよ、今の君達は充分に幸せなんだから。君達はそれを味わう位置にいる。外になんか立っちゃいけないぜ」

括弧付けてない割には、恰好付けたことを言うらしい。嘘に憑かれている彼だし、取返しの憑く彼だし、もしかすればと勘繰っていたがやはり恰好もなんだかんだ憑いてしまっているのだろう。

そんなことを考えつつ、ぼくの部屋の前へ。一応インターホンを鳴らしてから鍵を開けて、扉を開けると相も変わらず反応の速いことで、既に彼女は玄関に立っていた。一年経っただけなのにあの蒼い髪

も瞳も雰囲気も、随分と落ち着いたものである。ただ、片目だけあの頃の蒼さを保っているか。

「ただいま、友」

「おかえり、いーちゃ——」

しかし彼女の言葉は途中で途切れる。

無論別段、後ろに控えている球磨川禊が螺子を散々に螺子込んだわけではない。そんなことをしなくなった彼なのだ、というか本当に何もしていない。が、彼が視界に入った瞬間に友の顔つきが変わったのである。

具体的には眉をひそめたしかめツ面。とても彼女には似合わない感情の表情である。この一年、徐々に彼女の様々な感情を色々な表情で見してきた覚えがあるが、それにしたってここまでのものは初めて見る気がする。

うん。

「気持ちとは分かるがだからって無言で扉を閉めようとするのはやめてくれないか友!?!」

「やだ! 見たくない! 絶対に関わりたくない! 早く捨ててきてソレ!」

「拾ってきたわけじゃないから! 単に顔見たいって聞かなくて勝手に付いてきただけで家に上げる気なんてさらさらないから!」

「すっごい酷い言われ様だね、本当……この一年間、時たま僕のことを思い出しては罵倒してたんじゃないかってくらいだぜ」

扉を引いて閉めようとする友と、隙間に片足を入れて何とか扉の閉まりを止めた上でこちらも扉を引いて開けようとする僕。その応酬を見て、球磨川くんはそんなことをぼやいていた。

尚、ぼくはそんなことは断じてしていない。というか正直忘れていた節がある。記憶力はあまり良くないのだ、思い出せる時ならば鮮明によく分からなく思い出せるあの日だが、忘れているときは全く頭に出てこなくなる。

ただ勿論、友を螺子伏せたことに関してはいつまでも覚えているし許していない。そしてそれは友も同じらしく、だからこそ今こうやつ

て球磨川禊という存在を力いっぱい拒んでいるのだろうか、

その力いっぱいには急に萎れてたのか、ぼくが扉を開けることに成功した弾みで彼女はぼくの胸に飛び込んでくる形になる。僥倖と言えば僥倖だが、やろうと思えばいつでもやれること、これのためだけにわざわざ球磨川禊との再会を僥倖の理由にしたくない。

「話し方が………変わってる………」

どうやら、友もそれに気付いて力が抜けたようだ。あの時、ぼくよりも彼に対しての事前知識があった彼女なのだから、あの括弧付けた喋り方と性格、言動諸々は色濃く記憶に刻まれていたのだろう。それが今、覆っていることに驚きを隠せないといったところ。

「あはは、僕は僕で色々あったからね。それにしても、それが今の君達の幸かたちせか。良いねえ、久々に良いものを見たよ、僕は。さてそれじゃ、一目見て満足したし、僕はまたそこら辺をほつつき歩いてくるとしようかな。あ、いーちゃん、時宮さん達のことがかかったらまた連絡してくれよ」

呆けたままの友と、見たことのない、それはもう幸せそうな笑顔をしてぼくらを褒めた球磨川禊を見て呆気にとられていたぼくを放置して、彼はつかつかといなくなった。根底が変わっていないとは言ったが、だからと言って外面が変わり過ぎだろう。あんな笑顔、彼が出来るとは微塵も思っていなかった。

そして。

「君の連絡先知らないよ………」

この請負には、重大な欠陥があったのだった。

人間失格

今年の冬は実に冷え込み、どれだけ服を着込んでも寒さを感じられる。しっかし、何だ。今日は確かクリスマス・イヴとかだったか……ああいや、もうてっぺんを回っているし日付自体はクリスマスなわけだ？

「つたく、そんな日頃に俺はなんでこうして外を出歩いてんのかね」
しかも何となくで京都なんつーところにまで来ちまってよ。いつぶりだ、こんな場所に来んのはよ。去年の十月だかそこらでかの欠陥製品野郎を助けたとき以来、か？ いや正直覚えていない。もしかしたら記憶に無いだけで一か月前もいたかもしれない。

自分でも把握しきれない自分の行動つてのは流石にどうにかした方がいいかもしれないな。こんなんだから色んな奴に変な心配をかけるってんだ、自粛できる気はしないが自粛できるよう頑張らせていただけよう。

そういえば、心配じゃなく迷惑をかけまくるタイプである欠陥製品君のアパートだか何だかも確か今いる市の中にあっただけか。会いに行こうとは全く思わないが、遭遇したくないとまでは言わない。

どうせ無関係な他人だ、そんな頻繁に鏡を覗かなくたって良いだろう。それに正直会うならあの馬鹿げた人類最強みたいな高身長美女の方が良いな。もしくは捨てられて彷徨ってる野良犬。似たような奴よりも好きな奴に会いたいもんだぜ。

とか。

そう、頭の中でぼやいていると、俺の視線の先には一つ、割と目を背けたくなるような意味不明な存在が。何だ？ アレは。白シャツに黒ズボンだけの、お洒落の欠片も微塵と無い服装なのは置いとくとしても、だ。

何故あそこまで欠陥製品を絵に描いたような奴がいる？

人類最強さんと人殺しをしない約束をしてから随分と経つが——
——ここまで、日頃殺されていそうで、殺しても良さそうで、殺しても問題なさそうな存在を見たのは初めてだ。欠陥製品は違う。あい

つは、殺さないといけなくなっちまいそうな存在だ。が、今俺の視界が捉えている奴は、殺さなくても殺しても変わりないような。

何をして、どうにもならなくなるような。虚しくなるような。そんな印象を、受ける。

「うん？ どうしたんだい、そんなに僕のことをじつと見つめて。もしかして僕のファン？ お洒落ガンバリストくん」

「何だお前!？」

何故その呼称を知っていやがる!？」

違う、それも驚きだが驚きべきは俺の方を見ていなかったにも関わらず、そこそこ遠い位置にいたにも関わらず、意識の隙間を縫って突然俺の目の前にまで移動したことだろう。人体に不可能なことではないが、だからといって普段から炸裂させるような術じゃない。

「僕は球磨川禊。何でもない、ただの過負荷マイナスだよ」

……マイナスとは何だろうか。それを自己紹介に使った辺り、欠陥マンの類なのは分かる。あいつのは確か、戯言遣いだったか。かは、傑作過ぎる。そういうとこまで似てんだな、こいつ。

鏡に映されたものを絵に描いたあ不可思議な現実だが、写真を撮られることだってあんだから不思議な幻想ってほどじゃあない。にしても、こういう存在がまだいるとは全く以て驚きだぜ。

「そうか。俺は零崎人識。何でもない、ただの人間失格だ」

「なるほど。よろしく、ぜろりん」

「本当に何だお前!？」

何故その呼称を知っていやがる第二版バージョン・ツー！

その呼び名をする奴がこの世に二人もいるとか御勘弁願いてえ！

そして何故だが分からんが確実にこいつはその系統の呼び方をする気がする！ それそのままではないだろうが確実に俺にとつちやあ不本意な呼び方で。だ！

「だから僕は過負荷ほくだってば。人識ちゃんが人間失格うであるように、さあ」

ほらな！

「初対面だったのに馴れ馴れしい奴だなホントよお……」

「そう？ そんな気はしないけど。こう、毎日通勤通学の電車で、窓越しに視線を合わせてしまういつもの人みたいな、そんな感じがするけれど」

「言い得て妙だな鏡映しの似顔絵野郎。ったく、お前アレか？ 欠陥製品と知り合いか？」

「欠陥製品って？」

素直に聞き返してくる。無駄に知りもしないであろう呼び名を知っていたあたり、こちらが適当に呼んでいる相手のことも把握してくれるもんだと思っていたのだが案外そうでもないらしい。

まあ、普通こんな言い方されて誰だと思いつけるわけはないわな。何にせよぼつたり初めて会った奴に俺は何を期待してんだって話だ、全くって言うならこれこそ全くだ。俺も随分と他人を変な風に信じるようになってちまいやがって。

「あー、何だったかな。い……いー？ やべえ、あいつの名前本気でど忘れした」

欠陥製品と呼ぶことに執着していた時期があつたせいで忘れちゃった。「い」から始まるのは確かなんだがな。何だったか。いっくん？ いっきー？ いーたん？ いの字？ いのすけ？ いー兄？ いーいー？ いやここまで色々思い当たる節があつて何で俺は出てこねえんだ。

「ああ、いーちゃんのことか。さつき会って来たところだよ。らぶらぶするらしいから冷やかしてきた」

「思ったよりも細部まで首突っ込んでんなお前……」

らぶらぶって何だよ。言葉で言うより可愛くなくてもつとエゲツない生々しい何かな気しかしてこねえその単語、逆に傑作だぜ。しかもあいつがそんなことをするのか、確かにそれは冷やかしたくなる。見物とも言う。

どうせあの赤色ならそのことも知ってんだろうし、もしかまた会う機会でもありやそんな時にでも訊いてみるか。そのもしがもし過ぎて会わない可能性の方が高いんだけどな？ ま、そこはそれ、なるようになつてくれや。

「それで？ 俺なんかに言われたくはないだろうけど、あんたはあんなでこんな時間に何でこんなところほつつき歩いてんだよ」

「んー、餌？ 餌？ 前にここに来たときは僕目当てで来てくれた子がいてね。もしかしたら、一年経った今でも適当に夜中に、それも一人で歩いてればそういう人から襲ってきえてくれるかなって」

こいつ目当て？ で襲ってくる？ 何だそりゃ。こんな奴、間違っても殺したくねえ。殺しても良いとは思うが、殺したら最後、その後の人生がしつちやかめつちやかにされてこっちの精神が殺されそうな奴だつてのに。

っーか。

「殺し名のこと言ってるのかソレ？」

「殺し名……ああ、そういえば似たようなものらしいね。闇口だとか、アレでしょ？ 闇口さんはたまたま巻き込まれただけだから違って、僕が用があるのは時宮さんなんだけど……何だったかな。呪い名、だったっけ」

どうやらどつちにも面識があるらしい。それにしたつて、流石は絵か。一つずつとは言えどつちの集団にも会ったことがあるうえで俺を引き当てるか。それもほぼ偶然、自分からそれらと会うことを目的としている時に。

「呪い名で合ってるな」

「お？ 何々、もしかして知ってたりする？ 時宮刻弥きざみさんのこと」

「残念ながら知らねえ。まず俺はどつちかつつと闇口衆の殺し名関連の人間だ、それに時宮はちと知り合いにいづらくてな。そいつらに会ったら殺せと言われてる奴が知り合いにいるもんでよ」

殺し名と呪い名の対極、というやつだ。仲の良いところもあるが、こゝと時宮とその対極である匂宮は相性が悪過ぎる。言った通り、匂宮の奴等は時宮を見かけたら問答無用で殺戮を始めるくらいに仲が悪い。

尚、零崎たる俺の一賊にはその対極が存在しなかったりする。ただ、まあ、人間失格おれと欠陥製品あらいの無関係性さから見るに、対極と言えなくもない機関だり何だりが存在していても正直おかしくは思えないところではある。

「なあんだ、知らないのか、それは残念だ。……………いや。案外、残念じゃないのかも？」

「人から残念って言われるのはちと嫌だが、撤回してくれんなら良いや。だが何で撤回した？ 別段俺は今あんたに有力な情報を何一つとして追加してないと思うぜ」

まともに他の奴等とも連絡を取っていた零崎が生きていたならそりゃあ確かにこの球磨川禊とかいう野郎に協力できるかもしれないが、俺にそんな伝手はないし、協力する気もはつきり言ってない。

残念と言われて仕方が無いうえに、がっかりだなんて言われても文句は言えないくらいの立場だぜ。なのに何故か、この男はそれを撤回した。特に何かしらの情報が今の俺の言葉から把握できたわけでもなし、何ぞや周囲にそういう奴が現れたわけでもなし——いや、そこは否定しよう。

現れていた。

三本ほど離れた街灯で照らされた地面に立っている。闇との区別がつかない黒髪に光の反射が講じたのか生気のない白色の肌。そして、『死神』の名に恥じない黒い外套をはためかせ、無駄にでかくて機動性も悪そうな大鎌デスサイスを持った男が。

「石風調査室……………」

「やっぱり誰か寄ってきてくれたね。もしかしたら人識ちゃんも一緒にいたから寄ってきたのかもしれないし、って思って撤回したんだよ」

俺だつて恐怖は感じていないし、至極冷静だが。それにしたつてこいつのおちやらけ具合はとんでもないな。相手は『死神』。こともあろうか、運命に背くから。生きているべきでないから殺す、殺し名だぞ。序列七位、最下位とは言ったつてこいつらだけは別格で特権階級そのものだ。

そんな奴がわざわざ来たつてことはつまり、殺しに来たつてことだ。ああ畜生、どうするか。この男狙いならまだしも、万が一俺まで巻き込まれてみる。流石に石風相手に殺さずして振り切れるか正直自信は無え。

「やあ、えつと、石風さん？　僕は球磨川禊。ちょっと尋ねたいことがあるってどうか、訪ねたいところがあるんだけど」

そして普通に質問をするか普通。不通過ぎんだろ。思い通りにならないさ過ぎる、本当に何なんだこの男。

「私の名前は石風世石せいし。あなたが球磨川禊などどうでも良い——
あなたは、生きていてはいけない」

「なあにそれ。生きてちゃいけない人間なんている？　僕は全く心当たりが無いぜ、そんな奴。全員生きてりや幸せプラスなんだから、わざわざ殺して不幸マイナスにする意味が無いでしょ。片腹痛いぜ」

そしてその調子のまま、何も臆さず一步前へと出る。おいおい、こいつ正気か。流石にどんな奴でもあの大鎌持つてる馬鹿見たら驚くか怖がるかするだろ。笑いながら近寄るとかどこの真紅だよ、お前から出てる雰囲気はむしろ真逆だろうが。

「おい、あんまり近付くのは得策じゃないぞ」

殺し合いならばともかく、話すのであれば特に。何せ相手は殺しに來ているのだ、話を聞く必要性は皆無。今だって、制止だか静止だか知らんがああ石風が唐突に動いて球磨川禊の首を刈り取る未来だつて十分にあり得るのだから。

「あはは、その辺は大丈夫だよ。僕は命とか色々捨てがちだけど、拾えないわけじゃないからさ」

説明になってねえ。どういうことだ。

「ま、でもちよっと用心はしとこうか」『大体、命を軽く見てる人なんて一握りさ』『何だったら僕が命をどれだけ重く見ているか』『この身体からだの強さで証明したって——』

喋り方が少しばかり変わったか、と思った頃には本当に球磨川禊の首は飛んでいた。眼にも止まらぬ速さでその大鎌は横一線、まさに一閃。綺麗な首切り死体の出来上がり。血液の出方も素晴らしく美しいとしか言いようがない、噴水。

しかし、その首は地面に落ちた音がしなかった。

どころか、血だまりすら出来ていないし、彼の服には血痕も付いていない。それにまた一步踏み出し、不敵に嗤う。傷跡なんてものも無

ければ首も切られていない、皮一枚ではなくまるごと肉がくつついている。首を切られたのが嘘だとしても、なかったことだとしても言うかのように。

おいおい、流石にそれは、傑作度合が過ぎ過ぎている。

『大嘘憑き』！ 僕の首斬られを』『なかつたことにした！』

「んなどんでもスキルがあるなら最初から言え……心配することっちの身にもなつてくれよ」

「おつと、それはごめんね。最近誰かに見せる機会もなかったからね、この過負荷スキル。説明するのも元からだんだん面倒になつてたし、忘れてたよ」

またしても話す調子を変えてちゃんと謝ってくる。何だこいつとは何度も言っていたし思っていたが、ここまで来るといよいよ意味すら分からないな。体質とかそういう常時発動型パツじゃなく、出夢のイーディングワン一喰いみたいなの必殺技のスキルなのか。

「じゃ、久々の説明といこう。僕の過負荷マイナス、『大嘘憑き』は何と「現実」すべてを「虚構」なかつたことにする、でもその「なかつたことにした」ものは「なかつたこと」にできない、取り返しの付かないヤバイスキルさ」

「……時間の遡行ってことか？」

「難しく言うところとちよつと違うけど因果の越え方は近いかな。僕は何でも戻すなおんだよ」

そうになると、実質殺すことは不可能じゃないか。これまた、ここに来てとんでもない野郎が現れたもんだぜ。殺し名の天敵も天敵、言うなれば「死なない」存在。それを殺そうつつう石風が目の前にいるのに、だ。何の偶然なんだか。

「だから、何だという。それならば、殺し続ければ良い話だろう」

石風調査室の人間はそんな見解を述べる。本来ならば零崎姓の奴でもそんなことは出来るわけがないんだが、『死神』の名は伊達ではないと言いたいところなのだろう。もしかすれば石風調査室の室員全員を呼んで交代々々、永遠に殺し続けるつもりなのかもしれない。

そしてそのためか、また一段と速度を上げて球磨川禊へと鎌を振ろうとする。

が。

『大嘘憑き』オールフィクション。その鎌をなかつたことにした」

身も蓋もないものを「なかつたこと」にする。

「エモノを取り上げるたあやつてくれるな。さしもの石風さんでもこりやあ手の打ちようがねえか？」

素手で人間一人を殺し続けるなんて真似、確実にその手が壊れること間違いなしだ。俺なら『大嘘憑き』オールフィクションというスキルが分かった時点で撤退する、んな無謀な行動は取りたくねえ、博打ですらねえんだから。

「構わん。それならそれで——」

「しつこいなつったんだよ。生きてはいけない？ 馬鹿か、このやべえ野郎は生きてはいけないわけじゃない。『死神』ならしゃんと見極めろや」

生きてはいけないと思つてしまうような野郎は別にいる。この球磨川禊という男は、そいつに似てはいるがそうではない。違う。生きていなくても良いんじゃないか、とは確かに思わされるし殺してしまつても良いんじゃないか、とも思わされる、が。

それは生きてはいけないというわけではないし、殺さないといけなわけではない。そもそもとして殺すのをほぼ不可能にするかのようなスキル持ち、早々に諦めるのが正解のはずだ。何がそこまで殺意を加速させるんだか。

「まだそれでも目が曇つてるってんなら俺が相手してやる。生憎、こちらら殺人することを禁じられてる身だが、ま、少なくともてめえのその腐つた目玉くらい抉つて解して並べて揃えて晒してやんよ」

「そういうのめんどくさいから良いつてば」
相手を見据え、ナイフを構えようとしたところ、唐突として目の前の男はいなくなつた。

は？

え、おい、今度は一体何を「なかつたこと」にしがつたんだこいつは。折角俺が傑作にキメて恰好付けたつてのに、何てことをするんだ。

『安心大嘘憑き』エイプリルフィクション。石風世石、彼そのものを「なかつたこと」にした。

さて、こつちのスキルは説明しないから分からないだろうけど、急いでここを離れようか。ああいう何も教えてくれなさそうな手合いには興味が無いんだ」

「それは良いけどよ……」

つまるところ、あいつの存在自体を「なかったこと」にしたらしい。死んだと言っても良いだろう、死体は無いが。そう考えると完璧な殺人だ、とんでもねえな過負荷マイナスってのは。

しかし、あつさり人を殺したわけだがそれで良かったのだろうか？ 何せそのスキルは「なかったことにした」ことは「なかったこと」には出来ない、取り返しの付かないスキルだとか何だとか言っていたじゃねえか。

いや、言っていないかったか。

今こいつが使ったのは『安心大嘘憑き』エイプリルフイクションだ。『大嘘憑き』オールフェイクションじゃあない。急いで離れようと言っていたり、あたかもまだ現れるみたいな言い方をしているあたり、おそらくは完全には「なかったこと」にはしないスキル。

こいつ、そういうスキルを一体いくつ持ってたんだ？ バリエーションが既におかしいだろ。「なかったことにした」ことが「なかったこと」になるスキルってんだから、自在じゃねえか。時間制限があつてその時間を変えられないつう欠点はあるみたいだが、それだけでそれだけで相当なアドバンテージになる。

やろうと思えば自分の存在をそんだけの時間だけ、「なかったこと」にして相手を翻弄するなんていう馬鹿げた真似も出来なくはないだろう。自分を「なかったこと」にすると、死亡判定が出てスキルが曖昧になっちゃったりするのかもしれないが、可能性はある。

「そんなふざけたもんを持つてる癖に体力はカッスカスたあな！ 傑作にも程があんだらうよ！」

「いや……本当………運動とかまともにしたことなくてさ……うん………高校の体育の成績も、全部サボってたから危うく留年を喰らうところだったよ……」

今は球磨川禊を担いで走っているところ。何でもその時間制限は

三分らしく、それでかなり離れてくれとかなかなかに酷い要望だ。そして俺の方が身長が低いというのに担がせるとはどういう了見だ。馬鹿馬鹿しいぜ。馬鹿らしくなってくるぜ。

「ああ……………うん、これだけ離れば十分だよ……………ありがとう、人識ちゃん……………」

「そう思うならその呼び名は改めて欲しいとこだが」

言われたところで止まり、降ろす。場所は奇しくも欠陥製品と出会ったあの橋だ。確か四条大橋だとかそんな名前が付いていたか。正確には邂逅したのは橋の下だが、まあそれなりに思い出浅い。

「んで、こっからはどうすんだ。時宮を探してんだろ？ 石凧が来たのは驚いたが、あの調子じゃあ次どこが来たって話に取り合ってくんねえぞ」

「あはは、やだなあ。何日かいればきつと誰かは取り合ってくれるよ。一応いーちゃんにも請け負ってもらってるし、問題ないさ。なんとなくなるって」

「何もなんとかならなくなりそうなのがあんただと思うんだが……………ま、俺の与り知るところじゃねーな。それなら俺はここでお別れかい？」

口惜しい気もするが、気がするだけだ。気の迷いレベルの。あの欠陥製品と同じで、俺とこいつもあまり長く一緒にいる意味が無い。むしろどんどん悪化していく予感がする。制約付きとは言え殺し名である俺と、殺されても殺されても殺されないこいつ。

とんだ戯言だな。

「そうなるねえ。また会うことがあればよろしくだぜ、ぜろりん。次は良い傑作を見せてくれ」

「ああそうかい。もう会いたくねえよろしくしねえ、襖ちゃん。次も悪い大嘘に憑かれてろ」

結晶皇帝

京都という土地柄でありながら、珍しくこの時期にちらほらと降る、白い雪。この辺りでは確か一月くらいに降るものだと思うのだが、変な季節もあるものだ。もしかすれば今、どこかで何か起きていて、変なものが降るような面白おかしいことが起きているのかもしれない。

主に、戯言遣いのお兄ちゃんの周りです。

しかし、文字通りのホワイトクリスマスとは言えど、私もあの人もこういうイベントには疎いように思える。毎年、我が兄、萌太が何かしらプレゼントを買ってきていたりしていたからこそ認知していたイベントだが、去年からはそうではないわけで。

特に去年はまず近日にあの意味不明な忘れたくても忘れられない、戯言遣いのお兄ちゃんに在りもしない汚点を詰め合わせて悪化させて混ぜ合わせて何もかもを混ぜこぜにした上で全てを台無しにするかのような存在がいたせいでもある気はする。見ようによつては殺しても殺さなくても何も問題は無さそうな存在だ。

が、アレは殺すに限る存在だと私は思う。そもそも、何故生きているのか。どう考えても人生において全ての試合も勝負も敗北をしていて全世界における負け犬みたいな雰囲気でありながらまだ死んでいないのは自然の摂理に反しているだろう。

「二度として会いたくない……………」

「そんなことを言うとき会いたくなつちやうのが僕なわけなんだけど」「はっ!」

驚いた。

私の顔の真横、右にいきなり横向きのその男の顔が。近過ぎる上に唐突過ぎる。ふぎけるな、腐っても闇口衆、対敵対存在感知はいつでも気を張っているというのに、こんな近くにまで寄られるなんて。それもこんな男に。

「な、何なんですか、何故ここに！ 貴方はあの時、戯言遣いのお兄ちゃんに連れられてどこぞと知れぬ場所に帰ったのではないのです

か！」

「いやあ、ちよつとした野暮用でね。ここがその野暮用の最後の地なんだ、それでほつつき歩いてたら何と目の前にとんでもない美少女の後姿があるじゃないか、声もかけたくなっっちゃうよね」

「どういうことだ。どういうことだ？　野暮用？　しかも、声の調子が少し違うらしい。それに、雰囲気も。一年前とは打って変わって、とまでは言わないが、柔らかく……いや。憑き物が落ちたかのようになっている？」

「まるで今日の雪のようにいや雪化粧をした遠方の山を地平線に置いて白銀の世界から純白の光彩を浴びせたかのような白磁みたいに透き通った儂げでありながらもそれこそ色が抜けたことを思わせるほどにまで清楚さと純朴さを兼ね合わせた白が広がっている綺麗な肌のうなじに、光を感じさせない漆黒なものにも関わらずこれでもかというくらいに艶やかで艶めかしさも誘発させていて見た人に闇夜を連想させてしまいかねない危険さを漂わせておいても尚その深く墨を差した影のようできて深く清らかでもあることを突き付けてくる濡れ羽の黒で染められた美麗な髪の流れ、そしてそれらの相反している反転していると言っても過言ではない白と黒という対極の色味を限りなくふんだんに使われた彩色である癖にだからこそとても言いたげなほどにまでその秀麗さを導き出していて見る者見た者全員を魅了しかねない雰囲気醸し出しつつ且つその絶妙に絶妙という絶妙を絶妙させたバランスを崩さないどころかそれ以上にその魅力を引き摺り出している何もを見透かしていそうなしかしだからといって人の髓までは覗かないことを決めていると分かる瞳に目鼻立ちに顔立ち。ここまですべてとんでもなく端麗な美少女のそれはもう風光明媚そのものと言っても全く言い過ぎでないことを体現した存在の後姿というどう考えても見た者は立ち止まって拝み咽び泣いてから地に平伏して感謝の言葉を述べ連ねるであろう僥倖を手におきながらその存在に声をかけないだなんて思考に行き着く男は人として存在する価値は無い上にそんな思考は思考とは言えるわけもなく考える輩である人間としての存在価値が問われるとしか言い様が無いから

僕は声をかけたわけなんだけど」

「はっ。」

私はそのような追加情報を知りたくて黙ったわけではない。そもそも、このような男にどれだけ甘言を捲し立てられようと全く靡かないし心に響かない。嫌悪感があるわけでもなく、相手は心の底からそう思っているのだということが何となく分かるが、それだけだ。

しかし、心の底から思うことをそのまま言うような人間だったのだろうか、この男は。もしかすれば、この人はこの人でこの一年のうちには何だかんだ色々あって、少しは心変わりをしたのかもしれない。

「加えて何とその完璧に完成されつつも今でもその完成具合が完全に増していくというのだから末恐ろしい。次いでそれを台無しにするわけもない服装のセンス。白色ワンピースとはよく分かってるじゃないか、いちちゃんの差し金？」

「そういう話をするために貴方は私に話しかけたのですか」

だとすればすぐさまお帰り願いたいのだが。

「いや？ 褒めに来たのは本当だけど、まあ、話す話題が別にないこともないかな。にしても、初対面の時にまるで嫌われてるかのような対応だったのにきちんと話してくれるし敬語なんだね。僕泣きそうだよ」

「……………仮にも年上でしょうからね。それに、前よりも何というか、空気が違う。差し出がましいことを訊きますが、勝ちましたか？」

「うん。一度だけ、ね」

勝てた、のか。生涯無勝という只為らない雰囲気存分に醸し出しておきながら、一度だけとはいえ。そういう言い方をするということ、試合に負けたけど勝負に勝ったとかではなく、試合にすらも勝ったということ。素直に、驚きだ。

「ああ、そういえば僕の名前を名乗っていなかったね」

「名乗らなくて結構です」

『しちむきかみそぎ剥神削』』それが僕の名前さ』

「虚言ですね」

「戯言だよ」

虚言にも程がある。どこまでこちらの世界のことを知っているのか定かではないが、こともあろうか飛ばされてる□の名を冠する名前を名乗るなど。ここまでの人間であれば有り得そうな気がしてくるが、間違いでも在って欲しくない。

「それで、貴方はそんなどうでもいいことを言いに来たのですか」

「うん？ うーん、正直そうっっちゃそうなんだけど、まあ、本題が無いことも無いかな」

おっと。正直そういうことしか言いに来ていないと思ったのだが、案外本当に何か話しかける用があつたらしい。そういえば、野暮用だとか何だとか言っていたか。おそらくはその野暮用というのも本当なのだろう。となると、この男、喋り方の調子もそうだが口に出す言葉もそれなりに変わっているらしい。

何の心変わりがあつたのだろうか。

「ほら、崩子ちゃんって殺し名？ だとか何だとかの一員でしょ？」

「帰りますね」

「ええ……」

絶対に関わりたくない。そんなことを自分から訊いてくる人間といて良いことなど一つも無いのだ。どう考えたって碌でもないことになるに決まっている、加えてこの男が言ったのだぞ？ 何がひっくり返っても最悪に近いシナリオを描かれる未来は確定事項。

「そんなつれないこと言わないでくれよ。僕は時宮さんに会いたいだけでさあ。迷惑かけちゃったから、その償いをしに来たんだよ？」

全く以て信用できない。多少は性根が変わったことは認めるが、だからと言って罪償いをするような存在にも見えやしない。むしろ罪に罪を重ねに来たと言われた方が納得がいくくらいだ、吐くならばもつとマシな嘘を吐けという奴である。

「昨夜もそれで零崎って人に会ってね。そしたら丁度石風さんって人も来て。全く話に取り合ってくれなかったから勝てそうもなかったけど、ま、そんなことは置いといて」

既に馬鹿なことになってしまっているじゃないか。私は嫌だ、そんな状況を作り上げてしまう奴の傍にいたくはない。何が悲しくて殺

し名序列三位と七位を引き合わせ——殺し名の例外的一賊と殺し名の特権級死神を巡り合わせるような存在の近くにいないといけないのだ。土下座されたって御免である。

そしていくら引き留めたいからと言って人のスカートの裾を掴んで止めるのはやめてくれないだろうか。しかもきつちりしやがんで……いや、位置と角度的にスカートの中身は見えていないのだろうか、それでも何となく嫌だ。気持ち悪い。

「離してくれませんか。貴方と一緒にいるとそのうちその話のようにすぐにでも別の殺し名の方々が——」

「どうも。『掃除人』、天吹聖送せいそう。そこの汚物、あなたを殺しに来ました」

「ごんち。『虐殺師』、墓森せきもん関問。拷問しに来てやったぜ、その糞野郎」

言った傍からこれだ。

二人とも、目線や言っていることからして仮名・剥神削のことしか眼中になさそうなのが私にとっては救いか。それにしたって、序列六位の天吹と序列五位の墓森だと？ 昨夜来たのが石凧と言っていたが、どんなパレードが始まると言うのだから。

それも、この男はいるだけの存在にも関わらずそのようなことをされているわけで。殺した方が良いのでは、と一年前に言ったのは私が見たわけではなく見る前から殺すためだけにこの場所にいるかのような物言い。筋金入りの殺され屋か何かか？

しかし当の殺戮対象はスカートを掴まんだままだんまり。

「……良いね、これ。次のトレンドはこれだねこれ。スカート掴まみ。とつても良いぞ」

「よくこの状況でそれを言えましたね!？」

虚言だとか戯言だとか以前に馬鹿かこの男は?!

「えー。だって良くない？ 分かんないかなあ、この良さ。何なら説明するけど」

「しなくて結構です現実を見てください」

「仕方ないなあ……確かに、変に崩子ちゃんを巻き込むわけにもいか

ないし』『ま』『だからと言って、君達の相手をまともにするわけでもないんだけど?』

不意と。

喋り方を、一年前のソレに戻す。流石は天吹と墓森と言ったところか、その調子の切り替えだけで何やら危険かもしれないと察せられたらしい。『掃除人』の称号に相応しく清掃員のような恰好をして箒を持っていて天吹と、『虐殺師』そのものと言える血塗れの拷問器具の数々を所持している墓森、どちらとも同時に瞬時にそれぞれの武器を構えた。

しかし、それでも何も恐れずつかと一歩、足を踏み込む男が一人。

『おいおい何だよその武器は』『チリトリも無しに埃を掃くのかよ君は』『だとしたらこれまた随分と馬鹿馬鹿しい人だ。まるで経験値をくれないスライムみたいだぜ』

何故スライム扱いをわざわざしたのか。

『そっちの人もそっちの人だ』『何その武器?』『血塗れとか厨二恰好良いの骨頂かよ』『バトルアクションものの漫画だったら全く盛り上がらないクツソしようもないとこで咬ませ犬になりそうな奴だぜ(笑)』『便器に詰まって死ね』

「五万年苦痛でもがいて死ね」

どちらもその煽りが靦面だったのか面白いくらい息を合わせて超高速でその男を殺していた。『掃除人』はその箒の柄で男の喉を貫いて。『虐殺師』はそのフォークとパンチと針のムシロとで全て男の心臓を貫いて。結果、その散々貶した武器が突き刺さったままの穴からはだらだらと血液が垂れていく――
が。

それらが地面に付くことは無かった。

『大嘘憑き』、『面倒臭いや、説明要る?』

☒剥神削がそう言う。見てみれば、血液は疎か、身体にも服にも穴は開いておらず、刺さっていた武器なんてもものもない。しかもそれらが殺し名達の手元に返っているわけでもなくて、見たまま、まるでそれそのものがなかったことだったかのような現実。

「何を——しやがった!？」

『何も何も。言ったじゃないか、『大嘘憑き』オールフィクションだつて』

「それだけで分かるわけがねえだろうが! 何なんだよそのオールフィクションってのは! 俺の逸品共を全部消しやがって、返しやがれ!」

そう激しく抗議するは、墓森司令塔。血塗ればかりとなると錆び始めていて優れものでは無さそうな気がするのだが、どうもあの状態こそが彼らにとつては状態の良いものらしい。厨二恰好良いの骨頂かよというツツコミに対しては同意していたのだが、案外きちんとした理由があるのかもしれない。

「あんだだけ恰好良くしといたつてのに! またペイントし直すの大変だろうがよ!」

無かった。しかもペイント。拍子抜けが過ぎるぞ。

『やっぱリアル恰好付けだったんだ?』『いやあ御免御免、僕ああいう恰好付けてるのって苦手でさ』『僕が恰好付けてないのに相手が恰好付けてるとかムカつくじゃん?』

「当たり前だろ! 女児のスカート摘まんで喜んでる奴が恰好付けてたらこつちが困るつてんだよ!」

そして律儀に応答する墓森司令塔。拍子抜けが加速していく。無論そちらの意見にも同意しかできない、あの状況で恰好付けているなどとほざかれた方が反応に困る。いや、いつそその方がそんなわけがないだろと一蹴しやすいのか?

『何てことを言ってくれるんだ君は!』『スカートつまみが恰好良くないだど!』『どこを見てそう言える!?!』

「どこをどう見たつて格好良くねえだろうが! むしろダサみの極みだろうが!」

『何をう!』『スカートという世間一般上では女性しか履くことを許されていない男女差別を存在から象徴しているかのようなその女らしさそのものを捲るのではなく摘まむことによつて逆説的に尋常ならざる背徳感と罪悪感を産み出ししかし摘まんでいるだけなうえパンツを見ることが目的ではなくそれどころか摘まんでいる本人の目線

と意識は全くパンツに行っていないが故にされた女性は何とも言い難い気持ちに陥り周囲のスカート捲りなんかをしてきたしようもない男共は目的と手段が入れ替わってしまっているような気がして気がでなくなるこの行動のどこが!』『摘まむことにより自分好みのパンツが見えなくとも良い感じに太腿との視界のバランスが取れ場合によっては自ら絶対領域を作り出したり最高の色の采配を作り上げられ加え相手の女性の下腹部には若干の空気を感じさせた上でのやはり見えない見えていないというマッチングを現実に引き摺り出しているこの行動のどこが!』『恰好良くないだ?!』

いや全く格好良くない。

そしてまた私のスカートの裾を摘まみながら言わないで欲しい。何が何だか分からない能力についてでも考えていたのか黙り込んでいた天吹正規庁の方の開いた口が塞がっていないし、反論することを諦めた墓森司令塔は至極嫌そうな顔をして見るからに拒否感を示している。

「……………すまない、墓森。私にこの男は手に負えない……………離脱させてもらう……………予想以上の汚れがこびりついているらしい……………無理だ……………これ以上見ていると綺麗にする前にこちらがヘドロ塗れになる……………」

「お、おお……………俺も正直無理強いはしねえわ……………うん……………」

というかドン引きしている。当然だ、こんなことをそれはもう盛大に力説されてしまったては引く他ない。私も正直今すぐにでもこの場から立ち去りたい。戯言遣いのお兄ちゃんの前にも行って今すぐ癒されて浄化されたい。

そして気付けば本当に天吹の人間は帰っていった。それほどにまで剝神削の言動は耐え難かったということなのであろう。そしてその事実を本人が認識できていないというのがこれまた手痛い。自覚していればそのようなことを言えるべくもないが、それが仇になり過ぎていく。自覚してくれ、頼むから。

「俺ももうこいつの殺しはすぐに終わらせてえから……………これで行くか!」

と、天吹が姿を消したことを理解してから新たに何かしらの武器を取り出し、目の前の男へと飛び掛かる。アレは何の拷問器具なのだろうか。首輪に両端がフォークのような棒が付いたものに、籠手やお面。長い錐のようなものもあれば、純粋なナイフと思わしきものもある。尚、血塗れではない。

しかし、それらは全てが全て、男に喰らわすことも叶わない。私から見れば、それらは唐突に空中で消えて、その違和感を即時感じ取った墓森がその場で止まったことが理解できた。とは言えど、私も彼も、何故いきなりその道具達が消えたのかは理解できておらず。

『大嘘憑き』オールフイクション 『君の持っていた武器を』 『なかつたことにした』

「なかつたことにした」。

そう言った。

なかつたことにした？ いや待て、それは流石に馬鹿げ過ぎている。どう考えても、などというものじゃない。どんな人間にだってそれを考え付くことは不可能だ。意味が分からない。

なかつたことにするだと？ それはつまり、何でもかんでも消え失せるということではないのか。先ほどの傷と武器を消して、今のは武器を消した。武器という固形だけならばまだしも傷も消せたということは、その対象の範囲は相当なものはず。武器、傷、記憶——

いや。

命さえも。

消せてしまうのではないのか？

「なかつたことに……だと？ おま、お前、何してくれてんだ。ふざけんな、ふざけんなよ……今までの歴史でどれだけ拷問器具が役に立って来たと思っただけだ！」

墓森司令塔の塔員はまたしても憤慨し、再び幾つかのそれらしい危険を出して駆け出す。今度はペンチの大型と、三叉のペンチ。だが、それもまた消える。これはもう驚く必要もないだろう——

『大嘘憑き』オールフイクション 『その武器もなかつたことにした』

「……………!! ふ、ふざ……！ ま、まさかお前！ この世から全ての拷問器具を失くす気じゃねえだろうな!？」

『……ふうん？ なるほど、この世からか……それも良いね！』君の持つてる分だけで勘弁してあげようと思ったんだけど、そんなキラークラスを出されちゃったから』『応えるしかないよね？』『いやはやしかし』『昔にもそんなキラークラスを出された覚えがあるかな』『結局あの時に「なかつたこと」にしたものはゼーんぶ安心院さんに元通りに塗りたくられちゃったんだっけな』『流石だよねえ』

飄々と、そう言いながら一つの長い長い螺子を、どこからともなく取り出す。どこから出した？ もしかして、その能力は時間すらもなかつたことにするとでも言うのか。そして、そんな疑問に対して答えてくれるわけもなく、その螺子の先を地面に付け、少し埋まったところで腕を乗せて立ったまま寛ぐ。

「や、やめろ！ 拷問器具つてのは、俺みたいな奴にとつちや」

『大嘘憑オールワイクシヨンき』！ 全ての拷問器具をなかつたことにした！』
「!？」

螺子が全て地面に埋もれる。

相手の言うことを途中でぶつた切つて、本当に、そうしてしまつたようだ。青褪めて全身をくまなく服の上から叩いてはポケットの布を引つ繰り返し、上着を脱ぎ、袖を捲り上げて、肌の露出を増やしていく。そしてそのどこにも、彼が探しているであろうものの姿は形も影もない。

「お、ま………か、返してくれ！ あれは、俺にとつちや宝物みたいなもんで、子供の頃から大事にしてたんだ！ 親の形見なんだ！ だから、か、返してくれよ！ なあ！」

『おいおい』『馬鹿言つちやいけないぜ』『そんなもので君は人を殺そうとしたのかい？ うわあ人の風上にも置けない人だ。よくそんなにいけしやあしやあと言えたもんだよ』『大体そんなこと誰が信じると思ってるの？ 馬鹿じゃないの？』

「あ、ああ、何とでも言ってくれ！ 俺を殺してくれたって良い、だから、だからせめて一番最初の武器達だけは！ 俺の手元じゃなくていい、せめて世の中に返してくれないか！」

……傍観者を気取っている私が言うのもなんだが、もうこれではど

こちらが悪役なのか全く分からない。墓森司令塔の人間が通常考えればおかしいことを言っているのは分かるが、心がかなり籠っている。しかしそれを咎めているはずの男は見るからに悪役という風体で、どちらが正義なのか全く見当が付かなくなってくる。可哀想、などではない。何だこの、気持ち悪いのは。

良いも悪いもないませに、というか。悪いことをしているはずの人間が、悪いことを言っているはずの人間が何故か良い人に見えてくる。良いことをしているはずの人間が、良いことを言っているはずの人間が何故か悪い人に見えてくる。

『そんなに懇願したって無理なものは無理さ』『オールフイクシヨン大嘘憑き』は「なかったことにした」ことは「なかったこと」には出来ないからね』『そもそもとして無理難題なのさ』『それにやっぱり君が悪い。』『どうしようもなく悪い。』『なのに戻してくれだなんて、甘いと思わないかい？』

コーヒーにミルクもシュガーもシロップも全部入れちゃう人よりも甘々だよ』

「それでも……!」

『何つって』

「が……?」

「は?」

目視できたのは肉片と化す墓森。いきなり体が膨れ上がったかと思えば、皮が破れ、肉が裂け、欠陥がはち切れて、血液をぶち撒ける。その残骸が飛び散りまくったところで視認できたのは何やら先程まで持っていた武器群の数々で、見ていないものもちらほら。それに明らかに数が多くなっている、形と大きさが合わないものもある。

体内に入れていたとは考え難いし、その男が全てなかったことにしていた拷問器具があるというのはおかしいし、あれほどの量を体内に隠し持っていたとも考えづらい。であれば、あれらがいきなりそこに現れた、というのが正しいわけだが……なかったことにしたことはなかったことには出来ないとも言っていた。

ならば、やはりおかしいわけで。
とか。

現実の視界情報に私の理解が追い付かないうちに、気が付けば墓森司令塔の姿は元に戻っていた。

そこに出てきた器具達は周りに散らばっていて、当の虐殺師は白目を剥いて口を開けて泡を吹いて失神している。失禁している。でもその周辺に血は飛び散っていないし、肉片は一つもない。服が破けているわけでもない。どういう、ことだ？

『虚数大嘘憑き』。「なかったことにした」拷問器具達を『「なかったこと」にした！』

「どう………いう………こと、です………か………？」

理解が。

追いつかなさ過ぎる。

『ん？』『ああ、そっか』「………わんこちゃんはいーちゃんや人識ちゃんほどアレなわけじゃなかったね。何、だったらここからはサービスだよ———」『大嘘憑き』。君の今の記憶を、「なかったこと」にしてあげる」

「は———」

意し、き、が。

「ま、生涯無価値からの餞別だとも思っておくれ。いや、スカート摘まみの良さを分からせてくれた謝礼かな。何にせよ、もうおねんねしな、美少女ちゃん。今までの放送は、《砂利奴隸》グラフィックスクリーンからの提供でした、って感じで忘れちまいなよ———

赤き征裁

「で、そのあと放置するわけにもいかなくていーたんのところにも渡しておこうかと思つたら次々と殺し名・呪い名が現れて追いかけて回されて困つてる時に私に出くわしたと。最高に意味分かんねーなお前、最高かよ」

「そう思うのなら！ 是非とも！ 助けて欲しいんですけど！」

クマーは息も絶え絶えに、その最劣な運動能力でかろうじて奴等の攻撃を全て上手いこと避けつつ私と話す。よくやるもんだな本当。その状況で私に依頼をしてくるっつー胆力も中々のもんっつーか何っつーか。

とりあえず視認できるのは六人。薄野武隊、咎風党、死吹製作所、拭森動物園、奇野師団、罪口商会。追いかけて回されてるのと等速で走ってるうちに聞いた話じゃあぜろりんと闇口の娘とは会っていて。んで、石風調査室と天吹正規庁、墓森司令塔の人間は撃退済。

その前にいーたと玖渚ちゃんにも会ってるってんだからすげえ縁の《合》い方だよなあ。

「まあ！ お金とかは無いんで！ 依頼したくても出来ないんですけどね！」

「あー良いよ良いよ、久々の依頼で気分が良いしやってやろう。どっちをすればいい、その娘の送迎か、あいつらの退却か」

言つた通り、最近、私への依頼は段々と少なくなってきたていて困り果てている。これじゃあ請負人をしている意味が無え、請負人であるための存在意義、仕事が出来ないってんだからどうしようもねえよな。《私専用の天守閣建立計画、ただし地球上のものは使えません》みたいなつ。言つてて悲しいぞ畜生。

「どちらでもお任せしますよ、どちらでも僕は助かるので！」

それにしても、クマーも随分と素直に物を言うようになったもんだ。昔ならまず追いかけて回されているという現状を作り出さなかつただろうし、行動原理からかなり変わってしまったていらしい。元が元々凄まじいくらいにまで螺子れていたのだから、元通りにまつす

ぐ、となれば当然の結果か。

「じゃ、どっちも——とはいかなさそうだな。あの殺し名と呪い名が混じってなんて言やあ良いのか見当も付かねえ謎集団、全員が全員何言ったってクマーからターゲットを外しそうになさそうだ。行けそうかよ。期待してるぜ、人類最弱の虚言使い」

尚、今現在人気はどこにもないのが救いか。いやまあ、仮にもあいつらはその道のプロなのだし、人払いなんかも完璧にやってのけているだろうが。私がいるところから察するに、完膚なきまでに、とまではいつていないわけで。

仕事が無いからって暇になってその辺ほつつき歩いてた私も私なんだがな。それでクマーと会ったつてのはめっけもんだが、一応今日クリスマスだぞ。そろそろ陽も落ちて、数々のイルミネーションが目立ち始めるネオン街。

そんな日にあれだけの人数を用意して殺そうとするとか正気か、全く。

「いやいやいやいや——哀川さ」「私の名前を苗字で呼ぶんじゃねえ」「潤さん。期待してるだとか何だとか、そんなこと言われたら」「括弧付けるしか!」「無いでしょう!」

ふと。

また、調子を戻して。そう言う——良いねえ、そういうの! 最ツ高に恰好良いじゃねえか!

『あ、でも崩子ちゃんは任せますね』『怪我させるといーちゃんにどんなことされるか分かんないんで』

「恰好付き切らねえなあお前は!」

だけどそういうところも好きだぜ、惚れ惚れする。相も変わらずいつの間にか掌に収まっている螺子に、その飄々とした態度と不敵過ぎる笑み。いーたんとはまた違った、それらしく似つかわしい、筆舌し難いほどの至高の表情。

『それじゃ』『自己紹介、行ってみよーか!』『僕の名前は球磨川禊、愚か者と弱い者の味方だぜ!』

「……それに乗る理由は無いが、まあ、殺す相手への名乗りは無視でき

ないか。私の名前は薄野醒儀せいぎ。正義のために殺す、『始末番』だ」

「正直ちかこのような相手に対して自分の名前を教えるというのは些かどころか盛大に気が引けるのだが。むしろそんなことをした方が身のためにならないと予言が渦巻いている——しかし、薄野うすのが言うのであれば乗じてはおこう。私は《予言者》、名前は咎とが風かぜ閃述せんじゆつ」

「何とまあ、薄野と咎風とがかぜは正直ちかですなあ。ああ、僕は死吹尖せんけつ桀、《死配人》をやらせていただいておりますとも」

「……………俺としては名乗ることに同感なんて出来やしないんだが。しないと駄目か」

「こつちの名前は《飼育員》、拭森せわ瀬和。世知せちの名前は奇野世知さ」
「勝手に紹介してんじゃねえ」

「はあ。作った武器を散々に自分好みに塗りたくる墓森が盛大にやられたって聞いたから参加したんだけど、まあ。武器が螺子たあひねくれた奴もいるもんだね。ふん。ああ。あたしの名前は罪口青誠せいせい。ふう」

過負荷マイナスにつられて、次々と自己紹介をしてくれる。タキシードの決まった男にローブ姿の性別不明、パントマイマーかと疑いたくなる動きを連発する謎男と気怠気な作業服の男、首を座らせない方が落ち着くのか逐一首を傾けまくる女、こちらもまた気怠気だがどちらかという面倒臭がりそうな裸サスペンダーズスカートの女。

そんな感じでどう見ても通常生活において会ったならば関わり合いになりたくないといーたん辺りが心の中で叫んで避けようとするような奴等ばかりだが、こうしてクマーのノリに付き合ってくれるところを見るに案外律儀な奴らばかりらしい。人は見た目に寄らねえな。

『ふんふんなるほど。でもこうやって文字数を稼いだところで』『一人一〇〇〇文字くらいでしか相手してあげれないからそこは勘弁しておくれよ』『誰から行こうか』『流石に全員一気にだとかはやめてねー』『君らオツム弱そうだし』『気が付かないうちに互いに潰し合いとかしちゃいそーだから！』

にしても、括弧付けただけでここまで言うこと言うこと全部変わっ

ちまうのか。一人くらいなら私の方にも向いてくれるんじゃないか
とちと策を練ろうと思つたんだがこりゃあお手上げだ、絶対に誰も私
の方に見向きもしねえ。

こうやって嘗められるのは嫌いだ、仮にもこちとら美少女一人担
いだ女一人、殺し名・呪い名の連中なら一人でも仕留めきれそうなも
んだらうに、目撃者を消すだとか何だとか来るはずなのに、何も無し
にこうして傍らにしゃがんで観戦が出来ちまう。

ゲームで言うなら超高性能なヘイトスキルだな。それがあいつの
アクティブスキルとかじゃなくて自分で引き摺り出してる雰囲気と
マッチングしているだけの、性格が滲み出ているだけというのが素晴
らしい。

「貴様のような悪逆非道を繰り返す卑劣漢がいる現実など認めない――
安心しろ、痛みは一瞬だ。死」

『そういうのは求めてねーから』『って石凧さんにも言ったはずなんだ
けどなあ』『伝わってなかったかな』

開幕、『却本作り』を一刺し。一〇〇〇文字使うって話はどこに行つ
たよ、正義とか如何にもクマーが嫌いそうだから分かるが、だからつ
てここまで一発とは。あーもう見てらんねえよ、正義漢って面した薄
野の奴がもう既に何もかも諦めきつた顔をしていやがる。生きるこ
とすら諦めていそうだからありや。

『今の様子を見るに僕の言つたこと』『まああああつたく伝わってい
なそうだ』『僕が何しにここに来たかって知つてたりするのかな』『ね
え』『死吹さん』『だっけ』

「……………時宮を探死はな死に来た。と、いう話は聞いていますが……………だか
らと言つて、僕達お死が教えるとおお思いですか。僕達は貴方を殺死に
来たのですよ」

『……………お』『これは』『何』

途端、クマーの動きが歪になる。死吹の動きと連動している――の
か。確か、「身体支配を駆使する」《死配人》、死吹製作所。そうか、あ
れがその身体支配とやらなのか。鏡映しなどではなく、右手を上げれ
ば右手を上げている。

『あ』『ぐあ』『痛——』

「ごきりと、何度か鈍い音がしたかと思うと両者、有り得ない形と
なっている。いや、関節を外せば有り得なくはない形か。だとして
も、死吹の方が顔色一つ変えずにやっているため、あちらはそういう
駆動に慣れていることが見て取れる。」

「ほらほらほらほら、まだ死にませんか。まだ死にませんか。僕はそ
ろそろ限界です、さあさあさあさあ」

『あ』『はは』『いやあ』『これは』『ちよつと』

「が、クマーはそんなことに慣れていない。慣れている理由もあるわ
けがなさそうだし、あのまま、苦痛でもがいて死ぬのがオチか。何だ
かんだ異能バトル展開の多かったこの世界、あいつの『却本作り』ブックメーカーに
ついては誰も言及していないが、それを解明する前に殺そうとする
は、嗚呼。」

「読みが甘過ぎる奴等なこつた。」

「死ぶといので、道連れで妥協死ま死よう」

「ばぎん、と。首の骨が折れる音が二つ。」

「……………あー、死吹が道連れにしないと死なないって、見た目の割に
は結構強い奴だったみたいだな。滅茶苦茶弱いくせに、弱いからこそ
強い、みたいな文言をあいっからは聞いたが……………ああでも、何でもか
んでも台無しにするつつうのはまだ見てね」

『大嘘憑き』——』

「!!」

「二つの首折れ死体を眺めて、感想を漏らしていた拭森のフラグを
きっちり回収するクマー。はっはっは、流石だぜ。道連れで死のうが
何だろうが、身体支配されてようが何だろうが、「現実」すべてを「虚構」なかつたことに
するそのふざけた能力。」

「もしかしたら歪過ぎるし能力自体を「なかつたこと」にしている可
能性も考慮してたんだが、やはりまだ捨てていないらしい。という
か、強化されているか。前は確か『劣化大嘘憑き』マイナスオールファイクションで、若干ばかり制
約が厳しかった覚えがある。」

「死んでも死なないとか、どういう——いや、それならば俺の方が有利

だな！」

そう言い、拭森は驚きついでに勢いよく、その手刀でクマーの心臓を貫いてくれる。なかなか鮮やかな手捌き。だがそういう純粋な殺し方はそれこそクマーに効くわけがないはずだが。

『……あれ』『何で僕、君と握手出来てないんだ』

クマー自身は限りなく素っ頓狂な発言をしている。えーと、死吹の身体支配みたいなもんが確か拭森にもあったか……何だったか、《飼育員》の……何をして殺すんだったか。そこそこ面白そうだけど微妙そうとも思ってた覚えがある。

「いっつも拭森の噂は聴いても視ても違和感だにやあ。世知、そういうの認識しきれなくて分かんないさ」

「分からなくて良い……脳内干渉するわけだが、俺は拭森でも落ちこぼれだからな。その周囲にも脳内干渉して認識阻害しちまうんだよ」

おお、そうだそうだ脳内干渉によって攻撃された自覚を一切与えずに殺す。ただ、それだとやはりだからと言ってクマーに突き刺さるよなもんでもないな。しかも流石は絶世の過負荷野郎マイナス、それに気付いてももう行動に起こしてやがる。

拭森は螺子を何本も体に螺子込まれた状態で話していた。それに気付きもしない咎風、奇野、罪口。ふらりと体を揺らしたかと思えば拭森は地面へと倒れ込み、代わりにクマーがぬらりと立ち上がる。勿論、顔には最高に螺子練れた笑みを浮かべて。何を「なかったこと」にしたかと言えば。

『安心大嘘憑き』——』

さしずめ、

『君の痛覚を「なかったこと」にした』

つてところか。

『そして』『大嘘憑き』。君達がその攻撃を認識でき「なかったこと」にも、した』

おっと。そうか、倒れても全く心配しない奴等がいるのはおかしな話だ。であれば、そりやそういうことも「なかったこと」にしている。ふうむ、やっぱり拭森なんかよりもクマーの戦いぶりの方が幾重にも

面白味がある。それに、『安心大嘘憑き』。あれは一体普通の
オールフィクション
『大嘘憑き』とはどう違うのか。

なじみんから聞いた通りの週刊少年ジャンプファン、きちんとそう
いう引き延ばしをしてくれる。

「……何で君が生きてんのか全く分かんないけど——生きてるな
らば殺すまで！ 喰らえ、世知お手製のお薬!! 『シビア』！」

『お』『お』『おおおおお』『これ』『は』『何』『——ツ!!』

何やら唐突に奇野が取り出した瓶の液体を思いっきりかけられた
クマーは、頭を押さええて液体を払うようにぶんぶんとして振り回
す。苦しそう……ではないな。むしろ若干喜んでやがる顔だア
レは。そうだと殺すための薬じゃなさそうだが……何だろうか。

「別名・辛酸想起剤！ 堅苦しくて言いづらいから世知は「嫌なこと思
い出させ薬」だなんて呼んでるよ！ 効能は勿論その名の通り、嫌な
過去を思い出して精神的にメンタルダメージを喰らわせること！」

……何だソレは。最高に無意味な攻撃じゃねえのか。

「そして続けて、こちらのお薬！ 『ダサン』！」

加えて何だその世知辛いシリーズ。名前にかけてんのか。名前に
かけてんだよな。

『おお』『おおお』『ああああああ』『あ』

今度は手に何やら軟膏を付けて、クマーの心臓をまたしても貫いて
いる。すると何たることか、白目を剥いて涎を垂らせつつ体全体を痙
攣させるクマーが。あ、動きが止まった。そして多分心臓も止まっ
た。

うわー、流石は括弧付けてても恰好付かない超新星、死に方が超ダ
セえ。

「こちらのお薬は単純明快、純然たる苦痛をその胸に！ 具体的には
心筋の動きに不定期的な緩急を付けて心室細動を強制的に引き起こ
すもの!! 効力が一番高いのは勿論心臓にそのままぶち込むこ」

『っ』『これが』『恋………!!』

「何言ってるの世知にも分かるように言ってる」

誰に向けての説明だか知らんが、奇野がそう言っていると不意とク

マーは蘇って、そんな言葉を口にする。恋ってなんだよ。どういう経歴があつてお前の中でその結論が弾き出されたんだよ。

『あ、でも君スカートじゃないから良いや』

「どういう理由——!!」

滅茶苦茶テンションの高い女だったからか、そのツツコミにかまけて地面へ四つん這いになり悲しむ姿が。というか割と真面目に今何が起きたのか出来ないできやしねえ、心を読めないクマーの考えてることなんて分かるべくもなかったりするんだが。

「……一応訊いところ。何で恋になった」

『いやあどうも、今僕括弧付けてますから』『括弧付けてない時』『どうか、括弧良くない時の感情が想起されちゃって』『具体的に言うとな崩子ちゃんのスカートの裾を掴まんだ時なんですけど』

「シーンが既に理解できねえ」

ただ言わんとすることは分らないでもない。要は、その思い出したことと心筋の痙攣が結びついてドキドキ動悸だと勘違いしたと。阿呆か。いや馬鹿か。終始おちやらけているような奴だとは思っていたものの、ここまで目の当たりにさせられると展開が素早過ぎて付いて行けそうにもねえじゃねえかよ。

咎風は咎風で静観を決め込んでいるし、罪口は罪口で傍観だ。手を出そうという感情が一切感じ取れねえ。殺しに来たわけではないのかもしれない。ここまでやってきておいて、殺す気も何もないとは思うんだけどな。

それに——

「あがああああああああああああああああ!!」

途端、さきほど倒れ込んだ拭森が叫び出し、手足をばたつかせる。螺子込まれた場所が痛いのか何なのか、形振り構わず足掻き倒している。と、そのうち、絶命。した時には螺子は「なかったこと」になっているのか、跡形もなく消えているし、拭森は綺麗な顔で死んだように寝息を立てていた。

アレが『安心大嘘憑き』エイプリルフイクション

、という奴だろうか。痛覚は「なかったこと」になつていたはずだが、今の様子を見るに、おそらくは時限式でそれ

が更に「なかつたこと」になるスキル。時間は……ほう、丁度三分か。こりやあなじみんが何か一個スキルを渡して作らせたもんかね。

クマーが自分でスキルを改良してそんな面白可笑しい超展開のものを作るとは正直思えねえ。そういやあ、なじみん元気にしてんのかなあ。最近、というか去年のあの依頼の時から専ら会ってねえや。

『ふう』『さて、お次は……無い感じかな』

「……ああ、私は貴公を殺せるとは思っていない。よしんば殺せても、この者達のように全てを台無しにさせられて終わることは予言しなくとも目に見えている」

「あたしもお手上げ。ええ。だってあたし、罪口って言っても本当に武器作りには力がなくて人殺しなんて出来やしないもの、うう。まあ。ここは一つ、あたし達の降参ってことで。うん」

『くっ………!!』

ずしやあと。

盛大に音を立てて、ものの見事に片膝を地に付けるクマー。項垂れて、その顔は実に悔しそうに眼を口をキツく縛っている。何か攻撃を受けたわけでもないと思うのだが、それにしても表情が如何せんマジ過ぎるくらいがある。

『何て寛容さ……ッ!』『負けた………!!』

どうでも良かった。

『僕みたいな矮小十把、器の小さい男じゃあ勝てる見込みがない………!!』『また勝てなかつた………!!』

確かに人格勝負になつたらお前はどの誰にも勝てないだろうよ。それにしても、随分な悔しがりようだなオイ。いつそ楽しんでんじゃないのかってくらいだぞ。咎風は呆れて帰り始めてるし、罪口なんて興味なくなつたのかそこら辺に打ち捨てられてる無傷の薄野、死吹、拭森、奇野の奴等から武器を幾つか奪ってるし。

「ま、いや。おいクマー、いやんとこ行くんだろ。私も今暇だし、一緒に行こうぜ」

「ええ、そうしましょうか、潤さん」

うわあ身替わりクツソ早えの何の。もしかして「また勝てなかつ

た」って言いたかっただけなんじゃないのか。

嘘吐伯楽

「……私はもうお前とは関わりたくないと目の前で叫んだ覚えがあるんだが。何だ、一年越しで野球拳が出来なかったことがそんなに悔しかったのか。そういう肌の露出を賭けることは青誠せいせいの奴としてくれないか」

その一年前に色々であったせいでその時にいた京都で路頭に迷うこととなり、何とか千本中立売通りの少し高めのアパートにて姉と共に住むことが出来るようになってから一年が経過した辺りでとんでもなくとんでもない予感がしたために、それを回避しようと模索したものの全て失敗。

深夜も深夜、もう少しでクリスマスも終わるであろう時間帯に一年越しに彼らと顔を合わせる事になろうとは、正直思わなかった。いや、思っていたのだけれど、思いたくなかったのだ。

球磨川禊。

私の人生がとち狂った最大にして最低の分岐点にいた男。と、『イーちゃん』もいるらしい。前よりも髪が少しだけ短くなってさっぱりし、案外一般人向けの体裁を保っているか？ 私からすれば相変わらず言い表せないおかしさが滲み出ているが、まあ、通常の比とは気付かない程度だろう。目の前の男よりはマシだ。

「酷いなあ、僕は僕が「なかったこと」にしたことを「なかったこと」にしに来たっていうのに。やっぱり君も断るのかい？ 時宮刻弥きとみやさん」

……喋り方が少し変わったか？ どうでもいいか。

「その名を名乗ることはもう出来ない、時宮は除籍させられたし刻弥という名前もその姓のオプショかみへばるきとみやンだ。今の私は上辺春兆波かみへばるきとみや、というかここに来たのならば苗字は見ているだろうが」

「ああ……はい、うん………ぼくは見てますね……それはもう毎日のように……郵便受けのネームプレートとかで毎朝のように………」

「はー」

『イーちゃん』は随分と気怠気、というか自分自身に呆れ返っているような、やるせなさを感じる顔と声のトーンでそう言う。のように、とは付けているが見る限りそれそのものということなのだろう。つまりは。

……は？ である。

「同じ建物に住んでいたのか……」

「そうなりますねえ、ええ……はい……」

巡り合わせが変過ぎる。変則的過ぎる。そりやあ球磨川禊にも二度として会ってしまおうわけだ。一年前の時点で既に私の運命は組み込まれてしまっていたわけである。このようなどうしようもないとしか表現のできない性質を体現している人間一人の近くに住んでしまっただけは当然の結末を迎えたわけで。

タイムリープ出来るならば是非でも自分に忠告しよう、もっと安い場所で我慢しておけ。そうすれば変な巡り合わせも無ければこの男が京都に舞い戻ってくることも無いし、ここが目的であることを悪寒してしまふことも無いしそれで知り合いも知り合いでないも関係無しに殺し名呪い名をけしかけることも無い。

「にしても、あの数時間だけで闇口、時宮に関わったと思っただら今度は全員と関わり合ったのが流石だね球磨川くんは……あの人間失格にも遭遇したのがこれまた。崩子ちゃんを昏倒させるわ、単独で潤さんにも会うわ」

トラブルメイキング能力が強過ぎるんじゃないのかい？ と別に返答しなくても良さそうな言葉を、『イーちゃん』は独り言のように連ねていく。潤さん、とはあの《死色の真紅》のことか。つまりは球磨川禊もあの存在と知り合いと言うことで、まあ何ともんでもない関係だことだ。

「本人達から話は聞いている、相変わらずふざけた戦い方をしたらしいな？ ビデオ通話越しですら分かるほどに大抵が『イーちゃん』と見間違えレベルで死んだ目をしていたというのが……私はまだ軽度で済んでいたという事実がまた胸に来るぞ」

「無い胸に？」

「ようし今すぐ「なかったこと」にした私の操想術を返せ、ぶつ叩いてぶつ飛ばしてぶつ殺してやる」

「お、やっとならストツでそう言ってくれる人が出てきてくれたよ。ほら」

と。

私、に。

私の胸、正中線上、心臓腑にどんびしゃり完全命中。螺子が文字通り螺子込まれる——ヘッドの型は分からない。が、どうせ碌でもない型だろう。何より、今までの低頭や丸皿とは違う、一本ラインの入れられたなべ。

刺された感触というのを説明するのも変な話だが、前とは違う感じがする。前はそれこそ、この世の最悪と最低とを混沌の鍋に放り込んで煮詰めて固めて粉碎してその破片だけを集めてもう一度溶かして煮たような感じだったが、今はそれを粉碎せずに更に何かふざけた調味料を無理くり混ぜ合わせたせいで反物質が出来上がったかのよう。そんな、感じ。

『ノンフィクション虚数大嘘憑き』。君の操想術を「なかったこと」にしたことを「なかったこと」にした」

確かに、操想術が戻ってきた感覚はある。あるが、如何せん発動しているのかどうかは分からない。何せ、姉の指針……否、今は宥凜しりんだ。あの姉の操想術を突破して恋に落としたり『いちちゃん』がいるのだ、確証は無い。強いて言うならば、球磨川禊に通じていればいいのだが………。

「まあ、僕に発動されても困るから僕に効か「なかった」ことにもしてあるんだけどね」

そう甘くはないらしい。私達姉妹はその術を制御しきれず常時発動しているがために落ちこぼれだったわけで、姉妹同士でも互いの姿を視認できていない。ここ一年ほどは、姉は私を認識できていたようだが、私は出来ていないのだ。

嫌いな奴の姿がまるで家族のように馴れ馴れしくしてくるといのは全く慣れない。いや、まるで、ではなく正真正銘家族ではあるの

だが。

「ああ、姉にも会っていくか？ 球磨川禊には関係のない相手と言え
ばその通りだが……思い出話をしに来たのなら相手にはなれるだろ
う。特に『イーちゃん』に関しては会って行ってほしいのだが」

「……ぼくですか。何かしましたっけ」

姉がどうなっているのか分かっていいのか、思いつきりすつとぼけ
やがった。こいつ、方々で自分は普通だの一般人だの色々言っていた
と聞いていたが確信犯だろう。自分が漫画的アニメ的小説的ハーレ
ム主人公の位置にいれることを理解しているだろう。

「何かした。ああしたとも、おかげであの姉は前以上に周囲への興味
が無くなった。操想術が自動で使用されている以上、同じ過ぎる人間
が通常社会に組み込まれることは出来ないし、元から働ける状況でも
なかったからな。私もそんなに興味は無かったんだが」

時宮を除籍させられて、金の伝手無し。加えて私は操想術が
「なかつたこと虚構」にされていたが故に普通に社会に溶け込めることが分かって
しまったし、で必然的に出稼ぎをするしかなかったわけだ。

尚、今も操想術を発動させ続けている姉は何もしていない、所謂
ニートである。仕方が無いが、事ある毎に『イーちゃん』の素晴らし
さを聞かされる身にもなつてほしい。

「あれ？ となると、君達の操想術は「なかつたこと」にした方が良好
事だったりする？」

どうも、理解したらしい球磨川禊の質問。

「そうだが。私も先程勢いで返せと言ってしまったがこれではパート
に出れなくなったな。何にせよ、適当に次の仕事を探すだけだ」
「……やつとこの長い旅の目的がきちんと果たせたと思ったら意味が
無いどころか悪い方向だったとか傷付くなあ……」

そうか、この男にとつてはそうなるのか。私からすれば今まであつ
たものがいきなりなくなって環境も変わっただけで、それが元通りに
なつていくだけなのだが。そう考えると文字通り、戻なわつていくわけ
で。良いじゃないか。

「それよりも『イーちゃん』、寄っていかないか。寄っていけ。寄れ。

責任を取れ。とても姉が面倒くさい。寄れ。頼むから寄れ」

「絶対に嫌です帰りますそれじゃあ」

「球磨川禊、何でもしてやるからその男を引き摺ってでも寄って行ってくれないか」

「えっ本当!?! 寄る寄る寄る寄る!」

「ほんと君は自分の欲望に忠実だなあ!!」

話しているうちにずりずりと、じわじわと後退っていく『いーちゃん』がばつと後ろを向いて走り出したところで球磨川禊にそう持ち掛けると問答無用で『いーちゃん』の右足を螺子切って止めた。引き摺ってでも、と言うか何と言うか。

しかもその傷も一瞬瞬きをするうちになわ戻っている。

「いやあ、女の子から、それも金髪碧眼の美少女合法ロリから「何でも」なんて言われると心がうきうきしてつい犯罪とかやつちやいそうだね」

「君は存在が犯罪だよ。存罪だよ」

ううむ、この男、止めを刺したり凌辱をしたりするわけでもなく野球拳などといきなり言い出すあたり、何でもしてやると言う尻込んで多少ゆるい要求をしてくると踏んでいたのだが、今思うと浅はか過ぎたか。

裸エプロンとかさせられかねない。合法ロリとか当人を目の前にしてとんでもないことを口走っているし、裸ジーンズもあり得る。全裸パーカーとか? にしても、この男にとって私は一応美少女の範疇に入るのか。パートの連中だとか、そういう反応をしないので、そこまで自身の容貌が優れているわけではないのだと思っていたのだけれど。

「まあ、金髪碧眼だとそういうファイルターもかかるか……」

純粋に、珍しいから可愛く見える。特別に思える、とか。それか後にはあれだ、この男の周りにいる女が絶望的か。何が絶望的かは言わないが。ただ、《死色の真紅》は凍てつくような美人だと聞いたことがあるのだが、そう考えると違うのかもしれない。

「うん? えーつと……上辺春さん、もしかして僕が本心でそう言っ

てないと思ってる?。」

「いや、今のお前ならば本心なのだろうよ。一年前ならば冗談だと思っ
ているが、今はそういう状態だろう?。」

「あははー、どうだろうねえ? 僕は僕でも思い通りにならない
自動操縦アシコントローラブルだからね、冗談かもしれない」

「お前の冗談は存在だけにしろ。」

「ああ、今やつと合点がいました」

ふと、『いーちゃん』がそう言う。今はもう玄関で靴を脱いでもらっ
て、廊下を歩いて姉のいる居間の扉を今まさに開けようとせんところ
なのだが。私と球磨川禊の会話で何か思い出したことでもあるらし
い。

「最近、近所のスーパーでやたらとアイドル的な感じで噂されている
金髪美少女って貴女のことだったんですね」

「私そんな持ち上げられてたのか!？」

初耳なんだが!

「どうか何だ、同じスーパーにいたのか!? 巡り合わせというか、
よく今まで遭遇しなかったなという感想が出てきてしまうほどだぞ、
感嘆するわ! 遭遇したらしたで気まずいわけだが……いやそう
じゃなく、じゃあパートの奴等は噂しておきながら私に対しては普通
に接していたのか、凄いな!」

「変態は変態イェスであるからこそ、それを隠して振る舞うべきチだとは言っ
たもんだからね、上辺春さん相手には紳士で在り続けたんだろうね
え」

「君が言うとは何故か説得力があるんだけど、何、球磨川くん、幼女趣味
があったのかい?。」

「うーん、それは怪しいとこなんだよね。僕って元々惚れっぽいから
さ。で、僕に対してちゃんと相対してくれるのって純粹過ぎる人とか
だから、必然的にそういう幼めの子とかが多くてさあ。まあそういう
わけじゃないんだけど」

違うのならば何故そう言った。

「というか、いーちゃんの方が幼女趣味……じゃないか。君も割とた

またまそうなっちゃった系か」

「言わんとすることは分かるけどそうだ、ぼくもまたまたまそうなっちゃった系だ」

「いえーい」

「いえーい」

ノリ良く二人はハイタッチ。仲良しか。仲良しなんだろうけど。明らかに似た者同士、同族嫌悪も許さないレベルでの、同一存在と言っても過言ではないくらいに気質・性質が同じな人間なのだ。一年前ならば多少は違っていた印象を受けるが、今となつては見た目と喋り方以外で区別が付かなかつたりする。

そんなことは置いておいて、何はともあれ『いーちゃん』を姉の宥凛に合わせる方が先だ。あの姉のことだから、『いーちゃん』を見ただけで取り乱しそうな気もするが、まあ。それはそれということで、御開帳——だが。

「……………誰？」

そこには姉ではなく、金髪ボブカットで翠眼垂れ目、私とは違つてふくよかに育つた体を強調するかののような胸の開いたふわふわ桃色ワンピースを着た女がいた。誰だ。私のこの部屋にいるのは姉、私にとつての嫌いな奴、要は球磨川禊・制服バージョンがいるはずだったのだが。

誰だよ。

「えー、ひつどいなーきぎつちゃん！ 私は私だよ、誰？ なんて今更他人行儀に！」

は？ クソうざい奴だな何だコイツ。

いや見当は付いているのだが、こんな喋り方でこんな動き方でこんな性格でこんな外見をしていたのか。何にせよ腹が立つ。正体が分かつても腹が立つ。その外見とは初対面だしその性格とは初対面だよクソアマ。いやそういう言い方をすべきではないのだが。いやしかし。いやだが。でも。

「……………おい球磨川禊、さつき「なかつたこと虚構」にしたことがもう一つあるな？ 言え」

『オールフイクンヨン』
『大嘘憑き』、君にも、君のお姉さんにも操想術が効か「なかった」とにした」

悪びれずに言う。

畜生、こいつもこいつで腹が立つ。先に言ってくれないか、おかげで覚悟が出来ていなくてすさまじいヘイトが私の中で姉へと向かっている。何故だ。何故なんだ。何でこんなのが姉なんだ。私はこんな奴のために稼いでいたのか。

「一年しか違わないだろ、何でこんなに体の成長に差が！」

「ほえ!? えっ何、きざつちゃん私の姿見えてるの!?!」

片や身長一四九のまな板、片や身長目測一八〇弱の西瓜つてどうかと思うんだ。どこでここまで差が付いた。一年だぞ。一歳差だぞ。なのにそれがどうしてこうなった。畜生、世の中全部恨んでやる。幼少期から育つて分かってたのならばまだしも、この年になって露見したというのがくる。心が痛い。無い胸が痛い。

「てゆーか何、何で球磨川禊がここに——」

うざいのが喋り方だけで、恰好までうざくなかったのは救いだなと自分の心を落ち着けているところで、我が姉は球磨川禊の存在に気付いて私の後ろを覗こうとする。覗いたところで、思考停止。だろうな。そうだと思っていた。

『いー………ちや、ん』が………何で、ここ、に………?』

どうやら停止しきつてはいなかったらしい。

「えっと、そうですね、ちよつと色々こんがらがって、押し切られて、螺子切られてというか」

「わああ!!」

叫びだし、背中をこちらに向け、蹲る。恥ずかしいらしい。ぼそぼそと聞こえる声から察するに何故ここにいるのか哲学し、先に知らせなかった私に対してちよつと恨み、球磨川禊に会ったことを全面的に呪い、『いーちゃん』の目の前が出るに相応しい恰好・化粧をしていたかどうかを自問自答しているようだ。そしてその『いーちゃん』はどうやら先程の球磨川禊の行動に対して不満たらたららしい。

「さて、じゃあ私はここで、『いちちゃん』にも色々あるだろうからな、どうぞ私の姉に完膚なきまでに事実を伝えて絶望させてくれ。球磨川禊、お前はそのまま廊下だ廊下。そこで何でも聞いてやる」

と、言うとき球磨川禊は直立不動。期待したような眼差しがかなり鬱陶しいが、まあ、言っている内容が内容だし仕方あるまい。そして、私は『いちちゃん』の後ろに回り込んで蹴って居間に入れて扉を閉める。

尚、姉はあの日以来『いちちゃん』についての情報収集をしていないしそもそも目を向けようとしなかったため、かの男が周囲の女性関係をどう終結させたかを把握していない。そもそもとしてあの姉は他人の情報を閲覧するのが好きではなく、あの十月前後に『いちちゃん』が取った行動も完全には把握していないのだ。

なので、言わずもがな。『いちちゃん』が今の境遇を全て説明すればあえなく失恋、絶望のち悲哀の嵐待ったなしの確定、心の天気予報というわけである。それがどう爆発するのかは分からないし、もしかすれば姉も悟っているのかもしれない。

「で、お前は一体何をやっているんだ球磨川禊」

「え？ スカートを摘まんでいるんだけど」

確かに私の今日の服はスカートだが。尚、本来は今日は休むためにだらけた服装をしていたのでキャミソールの上にパーカーを羽織っている次第。男を招き入れる女の恰好ではないが、男二人が男二人だし、私とて仮にも元呪い名。

ただまあ、急いで取ったスカートがよりにもよってミニスカだったのが痛恨のミス。というわけでもなかったりするが、まあ、スカートを捲るわけではなく摘まんでいるだけなので良しとしよう。何故摘まんでいる状態で静止しているのかちよつとあんまり全く全然よく分からなさ過ぎるとはいえ。

「……何でもしてやると言っただけはなんだが」

「うん、だからスカートを摘まませてもらっているよ」

という論理だ。

いや待て、そういえば、唯一この男に戦いをまともに挑んで無事に撤退してきた天吹の報告にあったな。自己紹介をしている時に随分な

美貌を持った少女のスカートを摘まんで満足そうにしていたと。それか。こいつさてはそれにハマったのか。

だから何なんだ？

「裸エプロンとかを本当にやらせられると思っていた私の覚悟とは一体……お前、本当に変わったんだな。趣味も含めて」

「何言ってるんだい、僕は昔から僕さ。そうじゃないと僕じゃないじゃないか」

うん、そういうウザい感じに面倒臭い御託を並べるのはお前らしいがな。

「にしても、基礎的にはお前も男、何でもすると言った女が一番警戒すべきことを要求することも覚悟していたんだが」

「うーん、そういう生々しいのはちよつと……」

顎に手を当て、困り眉で軽く首を捻る。まるで私が異常だぞとも言われているかのような反応で若干ばかり苛立つものがある。やはりこの男、素の状態でも人にヘイトを向けるのは変わらないのか。それこそ私達姉妹の欠陥した操想術のように常時発動型なのか。

「ま、スカートを摘まむのがお前の望みだったのならばこれで終わりだな。もう会わないことを祈つとくよ」

居間からの喋り声も、一時驚く声が聞こえたりしたような気もするが、啜り泣きも聞こえなければ重苦しい雰囲気でもないし、『いーちゃん』から別れを告げる言葉も聞こえてきた。潮時といったところ、私としてはようやく球磨川禊から解放されるのか、といった感じだが。

扉が開く。

「どうだった、『いーちゃん』。面倒くさかったか？」

「思った以上に冷静なようでこつちが驚きましたよ。一応、二人分の生活費を一人で稼がせるのはやめるように言っておきましたけど、それ以外に関してはいち生活、僕が首を突っ込み過ぎることではないので。それと、まあ、ちよつとした宣伝と伝手にもなってもらおう方向性で」

ちよつとした宣伝と伝手。ふむ、元とはいえ呪い名、『いーちゃん』が直接的に噂するよりも、私達が何かしらばかしたり脚色したりした

上でまことしやかに伝えていくという形が似合う話もあったりする
か。有効活用する気満々だなあ、自分への好意を。

好意というか、崇拜、妄想みたいな節もあったが。しかし、面と向
かって話した『いーちゃん』が冷静だったというのなら、その節は
そもそもとしてあの姉の性格が混じっていただけなのだろう。

ああ、私はむしろこれからの方が悩ましいのか。今更、やっと、姉
と姉妹らしい生活を送らねばならない。そのような義務感に駆られ
るものでもないが、気が重くなるものでもないが、どうなることやら。
「それで、球磨川くんは一体どんな要求をしたんだい？ いややっぱ
いいや教えてくれなくて。なんかしようもなさそうだし」

「しようもないとは何事か！ いーちゃん、君にもスカート摘まみの
偉大さを教えてあげようじゃないか！」

「結構だよ」

これ以上意味の分からん変態なのかどうかわからない変態を増や
そうとするな。この周境界限で女性のスカートを摘まむ謎の不審者
が現れたらどうする。『いーちゃん』に限ってそこまで露見するよう
なことをするとは思えないが、球磨川禊がどこまで洗脳するかも定か
ではない。洗脳するとも限らない？ いや絶対こいつは洗脳とか余
裕でするタイプの人間だ。

「そんなことより、君の目的はまだ果たされていないだろう。時宮
……上辺春さんともう一人、いるんだろう？」

「……そういえば私に対してラストツーとか言っていたな。まだいる
のか？ その、「なかったこと」にした対象が。だとすると途轍もなく
不憫でならないが」

「ん？ ああ、うん。いるよ、一人。僕でもまだ確実には把握できてい
ない、一人」

把握できていない？ これまた不思議な言葉を使う。まるで対象
がどこにいいのか分からないという風だ。この男はどこにいろの
かよく分からない風来坊そうな奴ですら行き先を把握できない存在
など、世界中の誰もが見つけられないんじゃないのか？

「相変わらず把握できていないのかい。ならどうするんだ？ 一応、

ある程度はそつちの人も探そうとしたんだけど、全く分からなくてね。その存在自我以外は記録から何から何まで「なかったこと」にした人となると、その記録に齟齬が生じないか、とか思ってたんだけど空振りだったし」

どうも『いちちゃん』にも搜索を頼んでいたらしい。というか搜索したのか。何だ？ 『いちちゃん』はさては何かしらを搜索したりする探偵なんかを目指しているのだろうか？ しつくりこないな。依頼を受ける事務所を構える風体が特に……依頼。依頼か、ああそうだ。請負人、というのならば、少しだけしつくりくるか。

あのドキツイ赤色に比べて、無色過ぎるが。

「あーそれがねえ、アテはあるんだ。というか出来たんだ、うん、これに関しては上辺春兆波さん、貴方に感謝しなくちゃね」

「は？ 私がその消去された？ 存在だか何だかへのヒントを与えた覚えは無いぞ？」

「僕のために呼んでくれた変人奇人びつくりパーティ、呪い名？ 殺し名？ そんな人たちごった煮の彼らだよ。彼らを仕向けて、僕を殺してくれたのがヒントになった。いやあ、久しく死んでなかったからね、あの空間のことを忘れていたや。全く、彼女はいつだって僕を捕らえているなあ」

死んでなかった、という飛んでもない言葉の力を發揮している文章は置いておき、どうもこいつは死んだ際に何かしらの空間に飛ばされることがあるらしい。それも女関係だそうだ。なんだ、こいつにぞつこんなメンヘラくさい女もいたんじゃないか。だから私の過干渉を断ったのか？ そういう風にも見えなかったが。

「なら、君はもうその存在にアクセスすることが出来ると？ ぼくはもう御役御免か」

「うん、そうなるね。久々に会えて楽しかったぜ、いちちゃん」

「はは、やっとかい。僕は最初から楽しかったぜ、球磨川くん」

「まるで打ち切り最終回で別れる、宿敵と書いて親友と読みたいな関係性をカッコつけて滲ませているのは結構だがここはまだ私の部屋の中だからな？ せめて外に出てやれ」

恰好付かなさ過ぎだろう。

病的

「久し振りもクソもねえ、ふざけやがって天下天下の過負荷野郎が」「畜生、まだ自分の身体が気持ち悪い。何なんだこれもう」「全てを全て良いも悪いも縋い交ぜに台無しにするたあ聞いてたが、自分の存在自体をそうされるとは思わねえよ」「クソ」

『虚数大嘘憑き』——なんて説明しなくても良さそうだね。うん、久し振りだけ水俣ちゃん。折角可愛い女の子でもあるんだからそんな風にクソクソ悪態付かない方が良いと思うよ、全く」

「ここにここにここにここにこいながら言うんじゃねえ。そりや確かにお前のそのクソふざけた能力はどういうもんかは知ってるがよ」「悪態については反省する気もないね。ああないね」「絶対に嫌だ、これは私のアイデンティティ——」「ってわけでもねえが」「君の場合、生来の性格だろうし治らないのはそうだろうねえ」

「つうかお前に可愛いと褒められても何も嬉しくねえな」「驚くくらい嬉しくねえ、むしろよくそんな風に言えるよな。逆に惚れそうだね」「とりあえずぶん殴っていいか?」

「前後の流れが繋がってないよ、とか僕にツツコミ役を投げるのはやめてくれるかい。僕はその辺不慣れでねえ。にしても、それはまだ喋りづらそうだね」

そう言い、再び、螺子を構える球磨川禊。と思っていると、気付けばソレは私の身体に螺子込まれている。本当ふざけた能力だ、私の思考以外、存在も能力も行動も記録も干渉も全部全部「なかったこと」にし続けやがって。

あそこまで永続的に「虚構」に出来る馬鹿げた能力だと知っていたりやあ勝負なんてしかけなかった、いや気付かなかった私が悪いのか。仮にも一時的にこの男から直々に対抗できる能力と言われた能力を持っていると言われたのだから知っていて然るべきだったわけだ。

ああクソ、忌々しい。

『虚数大嘘憑き』。君が思考でき「なかったこと」にしたことを「な

かったこと」にした」

言われて気付く。確かに今私は、口を開いていない。喋っていない。そういえばそんな虚構化の履歴もあったか、忘れていた。だああ畜生、人の気にしていないことすらほじくり返して抉り返して螺子り返してどさくさにまぜこぜにどうでもよくしやがる。

「それで？ 私に関しては戻して欲しいかどうか訊かずに勝手に使いやがって」

「その辺はいーちゃんに言われた通り、どうしようもないからね。開き直って勝手にすることにしたんだよ、君には色々と話すこともある気がしないでもないし」

絶対に話すことがない奴だこれは。私としても言いたい文句は多量にあるが話したいことは何もない。にしても、何の因果か知らねえが私が思考しかできない状態だと球磨川禊の周囲、数メートル以内にしかいらなかったことを把握しているとは。

あれか、安心院なじみとかいう奴に教えてもらったクチか。ちと違うが、その私からすれば然程親しくもなければ詳しくもない間柄の間からのイメージだと全知全能と言った具合だが。何より去年の生徒会長決めの選挙でもそんな感じだったぜ。

思考しかできないのに視認はできるつつうのは如何せん気持ち悪いがな。匂いも捉えられるし音も聞こえるとかいう説明するに筆舌し難い実にふざけたとしか言いようのない状態。どうしろってんだか。

「んでえ？ これでお前の御高尚な自分勝手な自業自得な自己中心的な罪滅ぼし全国ツツアアアは御終いなあわけだが？ どうすんだよ、これから。どうせ行くアテも無えんだろ球磨川あ。大学も会社も全部落ちたとか言ってたしよ」

「ん？ じゃ何、君が実は大富豪の娘で僕を拾ってくれでもするのかい？」

「は、お前みたいな野郎、従僕フットマンとしても雇えねえよ」
敷地内に入れるのも御免だね。

「あはは、そうだろうねえ」

軽く笑い、足を踏み出してどこかへ行こうとする。

「……結局どうすんだよ」

「どうもこうも無いさ。僕は球磨川禊、そんな名前を持っていたどこかの誰か。適当にほつつき歩いて、座って、立って、食べて、寝て、起きて、生きて、住んで、倒れて、死ぬだけの男さ」

「……………お前ってさあ、昔から鈍いとか言われたことなかったか？」
「無いねえ。あるわけ無い。僕はまず誰かから好意を持たれるっていう主人公体質は持ち合わせていなかったんだ。そして今でも持ち合わせていないし、僕自身持っていないと思いつている。無いのさ、そんな事実」

「……………女心を分かるってか？」

「分からないなあ。僕は男心どころか自分の心すら分からないような人間だ。黒髪の女の子だとか、お人好しの女の子だとか、安心できる女の子だとか、宝のような女の子だとか、立ち上がるような女の子だとか、言わずもがな、どの女の子が好き先だったのかすら僕は知らない。」

「……………だったら」

お前とは違って女として、女心を多少は分かっていた私から言わせてもらおうか。

お前と違い最低じゃない、その辺の粋がってただけの私から言わせてもらおうか。

『言わなくて良いさ。』

「……………は」

「言わなくても分かっている——わけじゃないけれど、僕は球磨川禊だ。そこを忘れてもらっちゃあ、困る」

「だから、曖昧にして、適当にして、台無しにして、何も正解にせず、そこら辺に散らばらせていくってのによ？」

「良いじゃないかそれで。御目が高かったり、瞳が良かったり、なじんだり、今だったり、斬れそうだったり、機会があったり、先だったり、半袖だったり。どんな女の子でも、どんな女の子からでも、僕という過負荷は過負荷としか記憶されないままで良い」

本当、自分だけに都合の良い野郎だ。

「それで良くないつつう女がいたらどうすんだ」

「その時はその時さ。そんな子なら、もしかすれば、僕を」
見つけられるかもしれないね。

そんな言葉が聞こえそうになつた頃には、そんな言葉を吐きそうな声は聞こえなくなっていた。後ろを振り向いてみると、そんな声を出しそうな背中は見えなくなっていた。周囲を見渡してみても、そんな背中をしていそうな男はいなくなっていた。

あいつはスキル名を発しなくてもスキルをいくらでも使える——
——螺子さえ、出す必要もなくスキルを使えてしまう。だから、私はあいつがスキルを使って消えたのか、偶然意識を縫って消えたのか、判然とはしない。

更にはそのスキルが『大嘘憑き』オールフィクションなのか、『安心大嘘憑き』エイブリルフィクションなのか、『虚数大嘘憑き』ノンフィクションなのかさえも私には理解できる範疇を越えている。

最後まで、嫌味な野郎である。

「……け。」

お前の人生をここまで付き合わされた身にもなれや。

そんなお前をひいこら探そうとしている女だっている。そいつが果たしてお前を見つけられるかは分からんが、少なくとも私はそいつに手を貸しはしねえ——好い加減なまんまで良いってのがお前の望みだつてんなら、それくらい従つてやろう。

私だつて、少しくらいは過負荷マイナスなんだ。それに。

「お前をスキル無しで見つけられるような女なんざ、例え特別でもいて欲しくねえもんだね」

全国ツアー、楽しかったぜ、クソ野郎。